

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第494集

いいおかさいかわ

飯岡才川遺跡第8・9次発掘調査報告書

盛岡南新都市土地区画整理事業関連遺跡発掘調査

2007

岩手県盛岡市
独立行政法人都市再生機構 岩手都市開発事務所
(財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター

飯岡才川遺跡第8・9次発掘調査報告書

盛岡南新都市土地区画整理事業関連遺跡発掘調査

序

本県には、旧石器時代をはじめとする1万箇所を超す遺跡や貴重な埋蔵文化財が数多く残されています。それらは、地域の風土と歴史が生み出した遺産であり、本県の歴史や文化、伝統を正しく理解するのに欠くことのできない歴史資料です。同時に、それらは県民のみならず国民的財産であり、将来にわたって大切に保存し、活用を図らなければなりません。

一方、豊かな県土づくりには公共事業や社会資本整備が必要ですが、それらの開発にあたっては、環境との調和はもちろんのこと、地中に埋もれ、その土地とともにある埋蔵文化財保護との調和も求められるところです。

当事業団埋蔵文化財センターは、設立以来、岩手県教育委員会の指導と調整のもとに、開発事業によってやむを得ず消滅する遺跡の緊急発掘調査を行い、その調査の記録を保存する措置をとってまいりました。

本報告書は、盛岡南新都市土地区画整理事業に関連して、平成17年度に発掘調査を実施した飯岡才川遺跡第8・9次調査の成果をまとめたものです。調査の結果、縄文時代の狩り場跡、平安時代前期の集落跡であることが確認され、往時の社会状況を考える上での貴重な資料を得ることができました。

本書が広く活用され、埋蔵文化財についての関心や理解につながると同時に、その保護や活用、学術研究、教育活動などに役立てられれば幸いです。

最後になりましたが、発掘調査及び報告書の作成にあたり、ご理解とご協力をいただきました独立行政法人都市再生機構岩手都市開発事務所、盛岡市都市整備部盛岡南整備課、盛岡市教育委員会をはじめとする関係各位に対し、深く感謝の意を表します。

平成19年2月

財團法人 岩手県文化振興事業団
理事長 武田 牧雄

例　　言

1. 本報告書は、岩手県盛岡市飯岡新田2地割46-3・同78-1ほかに所在する飯岡才川遺跡第8次調査・第9次調査の結果を収録したものである。
2. 本遺跡の岩手県遺跡台帳の遺跡番号と遺跡略号は以下のとおりである。
遺跡番号：LE16-2291 遺跡略号：ISW-05-8（第8次調査）・ISW-05-9（第9次調査）
3. 本遺跡の調査は、盛岡南新都市土地区画整備事業に伴う事前の緊急発掘調査である。第8次調査は、独立行政法人都市再生機構岩手都市開発事務所と岩手県教育委員会事務局生涯学習文化課、第9次調査については、盛岡市と県教委事務局生涯学習文化課との協議を経て、財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センターが委託を受け、受託事業として実施した。
4. 各次の発掘対象面積、調査期間、調査担当者は以下のとおりである。
＜第8次調査＞ 面積：839m² 期間：平成17年9月1日～9月29日
　　担当者：文化財専門員 濱田 宏、期限付調査員 石崎高臣
＜第9次調査＞ 面積：2,907m² 期間：平成17年7月25日～9月29日
　　担当者：文化財専門員 濱田 宏、文化財調査員 村木 敬、期限付調査員 石崎高臣
5. 室内整理期間、整理担当者は以下のとおりである。
＜第8次調査＞ 期間：平成18年2月16日～平成18年3月31日 担当者：石崎高臣
＜第9次調査＞ 期間：平成18年1月4日～平成18年3月31日 担当者：濱田 宏
6. 本報告書は濱田と石崎が分担執筆した。なお、全体の編集は濱田が行った。
7. 各種鑑定・分析は次の方々にお願いした。
　　石材鑑定：花崗岩研究会
　　鉄製品の保存処理：岩手県立博物館「文化財科学」
8. 野外調査で使用した基準杭の打設は委託者である都市再生機構に依頼し、（株）玉野コンサルが実施した。
9. 野外調査および本書の作成にあたり、次の方々からご指導・ご助言を賜った（順不同、敬称略）。
　　千田和文・津島知弘・神原雄一郎・今野 類・斎藤麻希子（盛岡市教育委員会）
　　斎藤邦雄（平泉町世界遺産推進室） 星一幸文（県立花泉高校）
10. 野外調査では盛岡市・滝沢村・零石町の方々に多大なるご協力をいただいた。
11. 本遺跡の調査成果は、当センター主催の現地説明会・遺跡報告会および略報等で公表しているが、本報告書の内容はそのいずれよりも優先される。
12. 本遺跡から出土した遺物及び調査に関わる資料は、岩手県立埋蔵文化財センターが保管している。

目 次

I 調査に至る経過	1
II 遺跡の概要	1
1 遺跡の地理的環境	1
(1) 遺跡の位置	
(2) 周辺の地形と地質	
2 調査区割と基本土層	3
3 周辺の遺跡	5
III 野外調査・室内整理の方法	9
1 野外調査	9
(1) グリッド設定	
(2) 遺構名の付け方	
(3) 調査の手順	
2 室内整理の方法	12
(1) 遺構記録の整理	
(2) 遺物の整理	
(3) 遺物の選択・掲載の基準	
IV 検出された遺構と出土遺物	14
1 A区	14
2 B区	16
3 C区	16
4 D区	25
5 E区	28
6 遺構外出土遺物	44
V ま と め	54
1 遺 構	
2 遺 物	

表 目 次

第1表 周辺の遺跡	7	第2表 遺物観察表	52
-----------------	---	-----------------	----

図 版 目 次

第1図 遺跡の位置	2	第19図 E区の遺構（2）(RA018①)	31
第2図 周辺の地形と調査区	4	第20図 E区の遺構（3）(RA018②)	32
第3図 地形分類図	6	第21図 E区の遺構（4）(RA019)	33
第4図 周辺の遺跡	7	第22図 E区の遺構（5）(RA020)	34
第5図 調査区とグリッド配置	10	第23図 E区の遺構（6）(RB009・RB010)	36
第6図 これまでの調査範囲	11	第24図 E区の遺構（7）(RE005～RE008)	38
第7図 遺構配置図	13	第25図 F区の遺構（8）(RE009・RE010)	40
第8図 A区の遺構（1）(RD73)・B区の遺構（RD74）	14	第26図 E区の遺構（9）(RE011・RE084～RE086)	42
第9図 A区の遺構（2）(RG018・RG035・RG036)	15	第27図 E区の遺構（10）(RG039・RZ016)	43
第10図 C区の遺構（1）(RA016)	18	第28図 遺構内出土遺物（1）	45
第11図 C区の遺構（2）(RB006・RB007)	19	第29図 遺構内出土遺物（2）	46
第12図 C区の遺構（3）(RB008)	20	第30図 遺構内出土遺物（3）	47
第13図 C区の遺構（4）(RD075～RD078)	22	第31図 遺構内出土遺物（4）	48
第14図 C区の遺構（5）(RG038・RG039)	23	第32図 遺構内出土遺物（5）	49
第15図 C区の遺構（6）(柱穴群)	24	第33図 遺構内出土遺物（6）・遺構外出土遺物（1）	50
第16図 D区の遺構（1）(RD079・RD080)	26	第34図 遺構外出土遺物（2）	51
第17図 D区の遺構（2）(RD081～RD083)	27	第35図 第3・4次調査と今次E区の遺構配置	56
第18図 E区の遺構（1）(RA017)	29	第36図 把手状突起付の瓶	58

写 真 図 版 目 次

写真図版1 遺跡近景ほか	63	写真図版16 E区の遺構（2）	78
写真図版2 A区の状況	64	写真図版17 E区の遺構（3）	79
写真図版3 A区の遺構（1）	65	写真図版18 E区の遺構（4）	80
写真図版4 A区の遺構（2）	66	写真図版19 E区の遺構（5）	81
写真図版5 B区全景と遺構	67	写真図版20 E区の遺構（6）	82
写真図版6 C区の状況	68	写真図版21 E区の遺構（7）	83
写真図版7 C区の遺構（1）	69	写真図版22 E区の遺構（8）	84
写真図版8 C区の遺構（2）	70	写真図版23 E区の遺構（9）	85
写真図版9 C区の遺構（3）	71	写真図版24 E区の遺構（10）	86
写真図版10 C区の遺構（4）	72	写真図版25 遺構内出土遺物（1）	87
写真図版11 C区の遺構（5）	73	写真図版26 遺構内出土遺物（2）	88
写真図版12 D区全景と遺構（1）	74	写真図版27 遺構内出土遺物（3）	
写真図版13 D区の遺構（2）	75	遺構外出土遺物（1）	89
写真図版14 D区の遺構（3）・E区全景	76	写真図版28 遺構外出土遺物（2）	90
写真図版15 E区の遺構（1）	77		

I 調査に至る経過

盛岡南新都市開発計画は、盛岡市が経済・文化などに対する機能を備えた北東北の拠点都市を目指して、市の南部地域を新市街地として開発し、両者が有機的に結びついた軸状都心を形成するために策定された土地区画整理事業である。岩手県・盛岡市・旧都南村の三者は、平成2年9月に地域振興整備公団（当時、現都市再生機構）に対して事業申請を行い、これを受けて公団は実施計画を作成した。平成3年12月には建設大臣と国土庁長官から事業の実施許可がおり、平成3年度から平成17年度までの15年間を事業予定期間とし、対象面積313haの土地区画整備事業が実施されることになった。なお、本事業については、当初計画より数年の期間延長が示されている。

飯岡才川道跡第8次調査は、岩手県教育委員会と独立行政法人都市再生機構岩手都市開発事務所が、第9次調査については岩手県教育委員会と盛岡市とが協議し、平成17年度事業として確定した。その後、財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センターが委託を受け、受託事業として発掘調査を実施した。

II 遺跡の概要

1 遺跡の地理的環境

（1）遺跡の位置

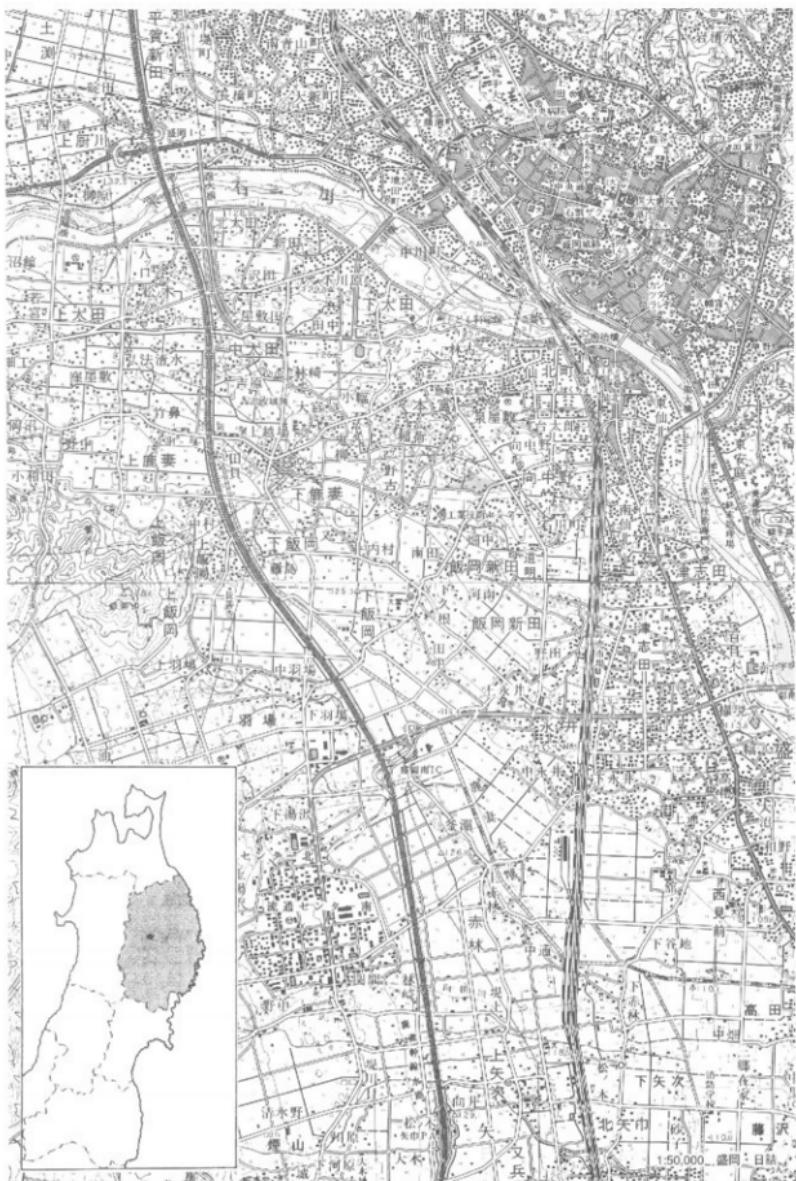
本遺跡が所在する盛岡市は、北上盆地の北縁にある。東は岩泉町・川井村、北は岩手町・八幡平市・葛巻町、西は滝沢村・平石町、南は矢巾町・紫波町・遠野市と接している。本遺跡はJR東北本線盛岡駅より南へ2.5kmほど進んだ盛岡市飯岡新田才川2地割4番地3ほかに位置する。奥羽山脈に源を発する零石川は盛岡市の西部をほぼ東流して北上川に合流するが、本遺跡はその右岸の北緯39度40分41秒・東経141度8分9秒付近にあり、国土地理院発行の2万5千分の1地形図「盛岡」(NJ-54-13-14-2)の図幅に収まる。本遺跡からは、北西に岩手山(標高2,038m)、北東に姫神山(同1,123m)、南東に早池峰山(同1,917m)を望むことができる。

（2）周辺の地形と地質

北上盆地の西側には奥羽山脈、東側には北上山地が、それぞれ南北に並行して連なっている。

1000m級の山々が続く険峻な奥羽山脈の東縁には、零石川を挟んで北側に標高4~500m前後の山(烏泊山・高峰山・燧堀山・沼森山)が、南側に標高800m前後の山(箱ヶ森・赤林山・毒ヶ森・南昌山)が連なっている。後者の東麓には丘陵状の地形が広がっていて、その末端は零石川・北上川によって形成された沖積低地にまで張り出している。前者の西側には岩屑なだれ堆積物の丘陵地が広がり、さらに西方にはその供給源である岩手山が聳えている。奥羽山脈は、岩手山を代表とする第四紀に形成された火山地域と、新第三紀の集塊岩・両輝石安山岩・綠色凝灰角砾岩を基盤とする非火山地域に分かれる。

県境の7割を覆う北上山地には岩手山と向き合う形で姫神山が対峙する。そこから南側には標高7~900m前後の山(鷲頭山・明神山)や同じく550~600m前後の山(高森山・朝鳥山)が連なっている。北上平野は隆起準平原と考えられており、古生代や中生代の堆積岩・花崗岩を基盤とする。



第1図 遺跡の位置

この基盤岩の性質の差が浸食谷の方向や水系の決定に関与している。

盆地内部では東北地方最大の河川である北上川が北から南へと流れている。これに遺跡から北に2.1kmの所で北上山地から西流する中津川と奥羽山脈から東流する零石川が、北東2.3kmの所で北上山地から西流する梁川がそれぞれ合流する。盆地には河岸段丘堆積物・岩手火山噴出物・沖積層が堆積している。これらの堆積物の様相は零石川の北と南とで大きく異なる。すなわち、北側では河岸段丘堆積物は北上川沿いにわずかに点在するのみで、岩手火山噴出物が広く分布し、南側では沖積層が広がる。岩手火山噴出物には降下火砕堆積物の他に岩屑なだれ堆積物がある。北上川沿いの岩屑なだれ堆積物には、青山町岩屑なだれ・大石渡岩屑なだれ・平笠岩屑なだれによるものがある。これら岩屑なだれ堆積物の埋積によって、岩手火山東麓の河岸段丘の形成場は、北上川上流の渋民・好摩地区、北上川と零石川が合流地点付近の盛岡地区、零石川上流の零石地区に分離される。そのため、河岸段丘の分布域は比較的小規模で断片化されている。河岸段丘は、上位から上田段丘、門前寺段丘、好摩・零石段丘、渋民・高松段丘、松内・黒石野段丘に区分される。これらの段丘の構成層は礫層または砂・シルト層で、この上には上田段丘を除いて分火山灰、渋民火山灰上部、渋民火山灰中部、外山火山灰上部がそれぞれ累積している。沖積層は周辺山地から供給される砂礫層から構成される。零石川以北では各河川沿いの狭い範囲分布するが、零石川の南側では現在御所ダムが建設されている峡谷部から東に向かって、東西約8.0km・南北3.5kmの範囲に形成されている。ここでは自然堤防と後背湿地が発達している。本遺跡が立地するのは、この自然堤防上である。

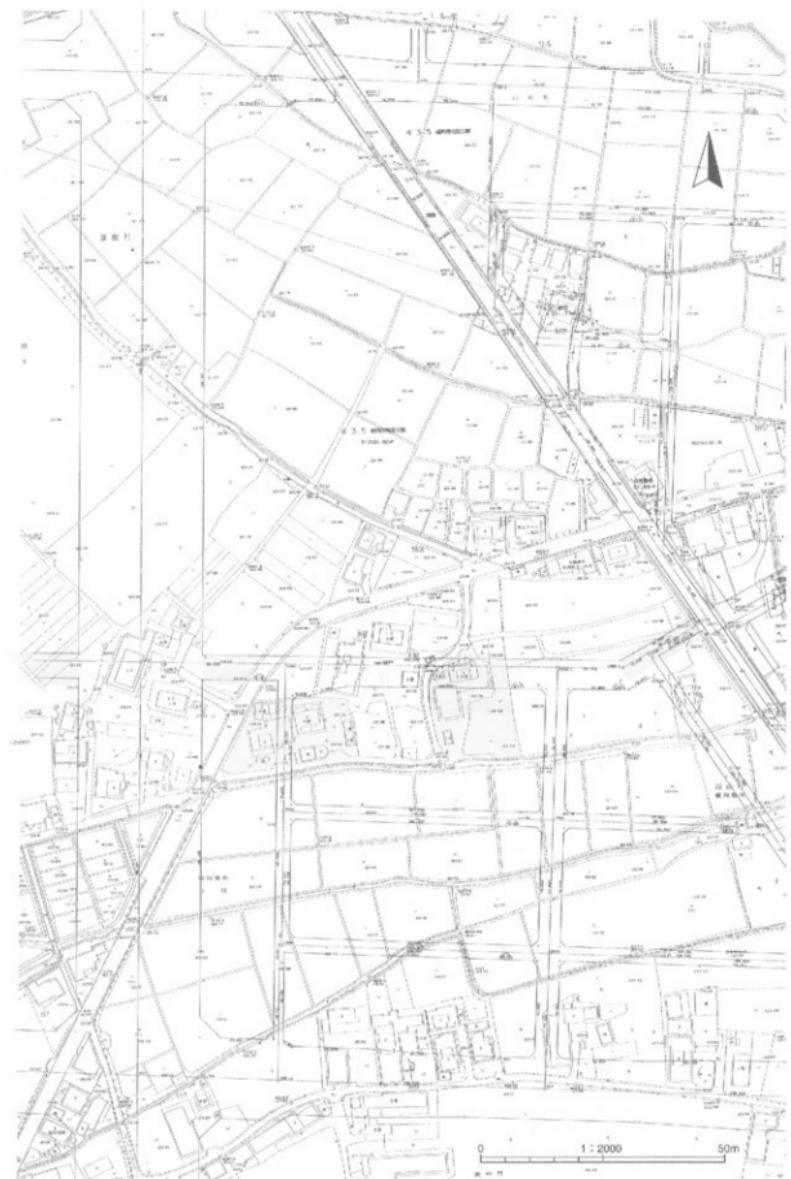
零石川が北上川と合流するのは、現在では中津川と北上川の合流地点と同じ場所だが、その右岸は水田の区割りなどからも判明するように旧河道や自然堤防が複雑に入り組んでおり、流路がしばしば変わっていたことが判明する。現に江戸時代に編纂された「盛岡砂子」では「零石川は大むかしは、今の仙北丁綱丁（現盛岡市仙北2・3丁目）中程の石橋の古川を流れたり」とあるように、少なくとも近世では現在よりやや南寄りJR東北本線仙北町駅の南側を流れていたようである。本遺跡の周辺には旧河道が入り込んでいるのが水田の区割りから見て取れる。この旧河道を境として同時代遺跡である飯岡沢田遺跡が北西に、細谷地遺跡が南に隣接する。

2 調査区割と基本土層

今次調査では遺跡範囲の南側に細長くトレントを入れた形になる。調査区は5つに分かれ、西からA区・B区・C区・D区・E区とした。前項で述べたように本遺跡は自然堤防上に位置し、第2図で示したように遺跡の西側は平坦面が広がっている。一方、東側は細谷地遺跡との境となる旧河道に向かってやや傾斜する。A区・B区は平坦部に、C区・D区は東側のやや傾斜する部分に、E区は東に隣接する向中野館遺跡へと続く平坦面に位置する。

上述のように調査区は5つに分かれているが、基本的には土層の堆積状況は共通する。ここではA区・C区・E区の状況について述べる。なお、いずれの地区でも現表土（I層）直下の層の上面が遺構検出面となる。II層の下には基盤層である砂礫層が堆積しているが、今回の調査ではE区で一部を検出したにとどまる。

A区	I a層	10YR4/2	灰褐色シルト		現表土
	II a層	10YR4/4	褐色シルト	粘性ややあり しまりあり	遺構検出面
C区	I b層	10TR2/2	黒褐色シルト		現表土
	II b層	10YR4/6	褐色シルト	粘性ややあり しまりあり	遺構検出面



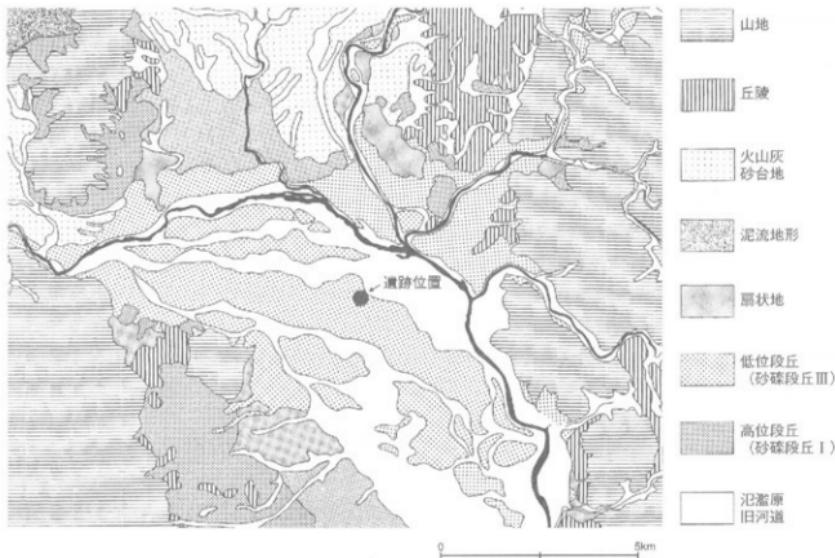
第2図 周辺の地形と調査区

E区	I b層	10TR2/2	黒褐色シルト	現表土
	II b層	10YR4/6	褐色シルト	粘性ややあり しまりあり 遺構検出面
III 層	10YR4/6	褐色砂礫		基盤層

3 周辺の遺跡

前節で述べたように、宇石川の左岸と右岸とでは地形的に様相を異にし、遺跡の分布もこれと相關関係にある。すなわち、左岸では大新町遺跡において、約1万1000年前に降下したと考えられているローム質火山灰（柳沢軽石層）の直上から縄文時代草創期の爪形文土器が、その上部の堆積層から早期初頭の無文土器や早期前葉の押型文・沈線文土器が出土し、早期の竪穴住居跡も検出されている。また、隣接する大館町遺跡では中期中葉から後葉にかけての集落が確認されているなど、宇石川左岸では早い段階から人間の活動が確認できる。一方、右岸では奥羽山脈西縁の丘陵地に展開する上平遺跡群を除けば、沖積地では縄文時代の遺跡の分布は希薄である。ここで生活の痕跡が見られるようになるのは晩期になってからで、本宮熊堂A遺跡や台太郎遺跡で竪穴住居が造られるようになる。さらに、多くの遺跡では遺構外から縄文時代晩期の土器が出土したり、同時期と思われる陥し穴状土坑が検出される。これは沖積地が水場に集まる動物を目当てにした狩り場で、本来的には居住域ではなかったためと推測される。

これ以後、右岸では弥生土器が散見するのみで、やはり左岸において竪穴住居跡など居住の痕跡を見出せないものの、統縄文土器（後北C2-D式・北大I式）や弥生土器（天王山式・赤穴式）・土師



第3図 地形分類図

3 周辺の遺跡

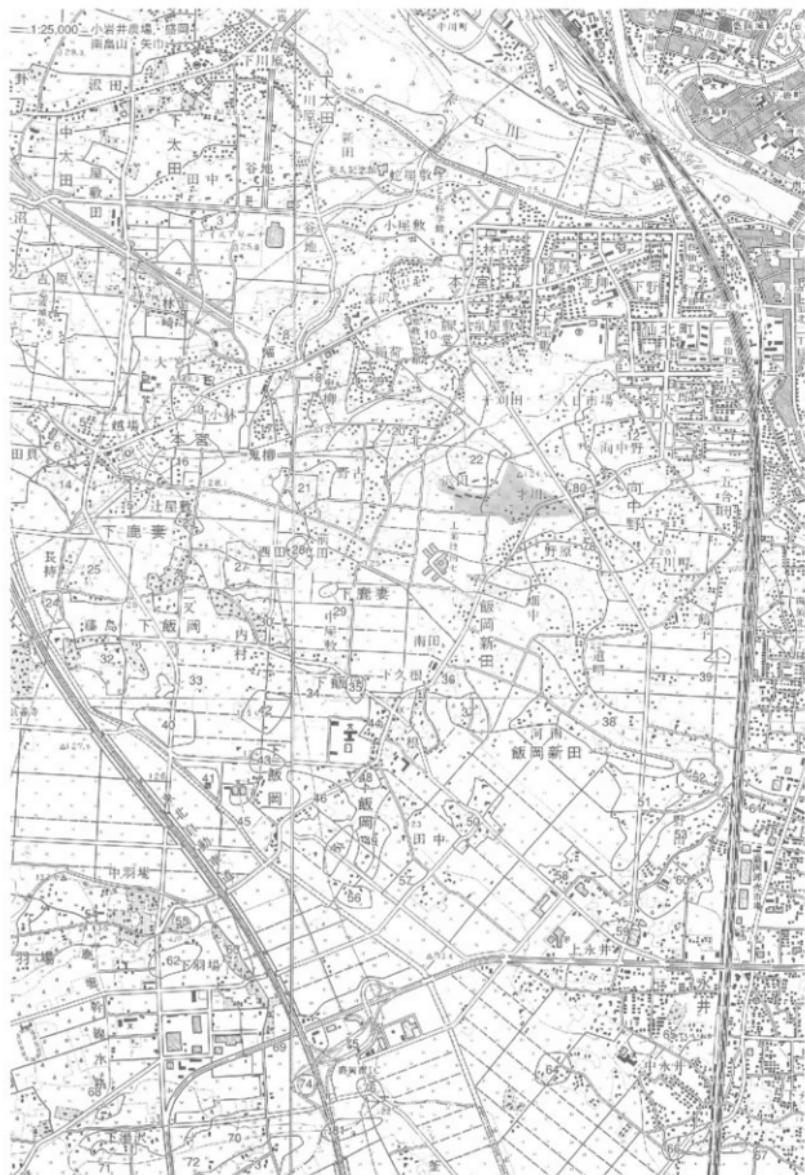


表1 周辺の遺跡

番号	遺跡名	種別	時代	遺構・遺物
1	薬師城	城郭跡	中世・近世	石垣、製、鍵跡、瓦、かわらけ、陶磁器
2	志波城	城郭跡	古代・平安	土壘、無立柱建物跡、門跡、塗跡、浮転、火床
3	太田田中	集落跡	古代・平安	
4	鈴跡	集落跡	古代(平安)	土壘、須恵器、柱立柱建物跡、門跡、塗跡、浮転、火床
5	新原跡	城構跡	築文・古代(平安)	鐵人土器(淡河)、土器器、土壘、火床、多穴住居跡
6	田貝	集落跡	古代	土壘跡、多穴住居跡
7	大字北	集落跡	古代	土壘跡
8	小林	集落跡	古代	土壘跡
9	貴沢	集落跡	古代	土壘跡
10	本所施瓦ム	集落跡	古代	土壘跡
11	本名残置B	集落跡	古代	土壘跡
12	台太郎	集落跡	古代	土壘跡、火床、塗跡、多穴住居跡
13	大河	集落跡	古世・中世	土壘跡、多穴住居跡
14	石仏	集落跡	古代	土壘跡
15	上越塚A	集落跡	古代	土壘跡
16	穴門	集落跡	古代	土壘跡
17	鬼柳B	集落跡	古代	土壘跡
18	鬼柳A	集落跡	古代	土壘跡
19	細佐	集落跡	古代	土壘跡
20	切合A	集落跡	古代・平安	土壘跡、多穴住居跡
21	野古B	散在地	古代	土壘跡
22	巣園の村	集落跡	古世	多穴住居跡
23	上越塚B	集落跡	古世?	土壘跡
24	藤島E	散在地	平安?	土壘跡
25	笠置	集落跡	古世	土壘跡
26	又	散在地	古世・平安	土壘跡、須恵器
27	西田A	集落跡	古世	土壘跡
28	西田B	集落跡	古世	土壘跡、須恵器
29	前川	集落跡	古世	土壘跡
30	当村	集落跡	古世・平安	土壘跡、須恵器
31	大柳	散在地	古世	土壘跡、須恵器
32	○	集落跡	古世	土壘跡、十字宮、須恵器
33	LIC-6-0073	集落跡?	古世?	土壘跡、須恵器
34	中尾敷	散在地	古世	土壘跡
35	西岡敷I	散在地	古世	土壘跡
36	久久池	散在地	古世?	鐵人土器、土壘跡
37	石竹	散在地	古世	土壘跡、須恵器
38	夕景	散在地	古世	土壘跡
39	向中野跡	集落跡	古世	土壘跡
40	側岡神崎II	集落跡	古世	土壘跡、須恵器
41	板岡林跡I	散在地	古世	土壘跡
42	深瀬I	集落跡	古世・平安	土壘跡、須恵器
43	深瀬II	集落跡	古世・平安	土壘跡、須恵器
44	高麗歌B	散在地	古世・平安	土壘跡、須恵器
45	許田	集落跡	古世	鐵人土器、石器、土壘跡、多穴住居跡
46	鶴窓工	集落跡	古世	鐵人土器、石器、土壘跡、多穴住居跡
47	鶴窓堂	集落跡	古世	土壘跡、須恵器
48	○	集落跡	古世・平安	土壘跡、須恵器
49	前代目	散在地	古世	土壘跡、須恵器
50	松戸	集落跡	古世	土壘跡、須恵器
51	鶴屋	集落跡	古世	土壘跡、須恵器
52	牛町	氣象院	古世	土壘跡
53	瀧井	集落跡	古世	土壘跡、上縁、土壘跡、須恵器
54	田舎	散在地	古世	土壘跡、多穴住居跡
55	新井田T	散在地	古世	土壘跡、須恵器
56	瀧谷地	集落跡	古世・平安	土壘跡、須恵器、多穴住居跡
57	田中	散在地	古世	土壘跡、須恵器、打製石器、石斧
58	鶴木	散在地	古世	土壘跡、打製石器
59	境田	散在地	古世	土壘跡
60	長沼	散在地	古世	土壘跡
61	津志畠	集落跡	古世	土壘跡
62	新井田II	散在地	古世	土壘跡、須恵器
63	新田	集落跡	古世・平安	土壘跡、須恵器
64	闇木	散在地	古世	土壘跡
65	永井新田	散在地	古世	土壘跡、須恵器
66	神田	散在地	古世	土壘跡、須恵器
67	下水堀	散在地	古世	土壘跡、須恵器
68	小田I	散在地	古世	土壘跡
69	F羽場	集落跡	古世・平安	土壘跡、須恵器、鍍錫陶器
70	圓波II	散在地	古世	土壘跡、須恵器
71	小田II	散在地	平安	土壘跡
72	森子	散在地	古世	土壘跡
73	湯沢大船	散在地	古世・中世	土壘跡、須恵器、空甕
74	筒波I	散在地	古世	土壘跡
75	下涌沢	散在地	古世	土壘跡、須恵器
76	大崩	散在地	古世	土壘跡、須恵器
77	森坂	散在地	古世	土壘跡
78	網谷地	集落跡	古世	土壘跡
79	南仙北	散在地	古世	鐵人土器、千海瓶、千壺、堅大作居跡
80	向中野谷	城跡	中世	塗、土器
81	一本松(久山町)	集落跡	御文・平安	土壘跡、須恵器、鐵人土器

器が多く出土するとの対照的である。

こうした状況は7世紀中ごろまで続くが、7世紀後半になると堅穴住居跡の数が急増し、特に台太郎遺跡・百日木遺跡で大規模な集落が形成されはじめ、その周辺でも野古A遺跡・飯岡沢田遺跡・本宮熊堂B遺跡・西鹿渡遺跡などでも数棟単位で堅穴住居跡が見出される。こうした状況は8世紀を通じて続いているが、延暦23年（804）沖積地に志波城が築造されると前代から様相が変化する。すなわち、小幅遺跡・館・松ノ木遺跡・下羽場遺跡・湯沢遺跡など新たに形成され始める集落がある一方で、8世紀より継続する遺跡では9世紀前半の堅穴住居跡数が減少する。また、墳墓と考えられる円形崎溝が飯岡沢田遺跡や湯沢遺跡に出現する。志波城は半石川の水害により移転を余儀なくされ、その機能は徳丹城へと移され、その徳丹城も9世紀の中ごろには廃絶する。9世紀の後半になると、志波城の外郭に林崎遺跡が、台太郎遺跡の南西に飯岡才川遺跡が出現する。前者では大型の掘立柱建物跡がL字型に配置され、後者では2×2間の総柱掘立柱建物跡が近接して4棟検出されるなど、これまでの集落遺跡には見られなかった要素をもっている。また、堅穴住居跡の数も前の時期よりも増え、もっとも盛行する。この状況は10世紀前半まで続くが、半ば以降になると徐々に堅穴住居数が減少していく。そして、11世紀代の住居はほとんど見られなくなっていく。

遺構名変更表

新遺構名	旧遺構名
RD073（「坑」）	A区1号竪穴
RG035（遺跡）	A区1号墓
RG018（遺跡）	A区2号窓
RG036（遺跡）	A区3号窓
RD074（土坑）	B区1号土坑
RA016（堅穴住居跡）	C区1号堅穴跡
RH006（掘立柱建物跡）	C区1号堅穴柱建物跡
RB007（掘立柱建物跡）	C区2号堅穴柱建物跡
RB008（掘立柱建物跡）	C区3号堅穴柱建物跡
RC001（柱穴）	C区1号柱穴
RD075（土坑）	C区1号窓・穴状透構
RD076（土坑）	C区2号窓・穴状透構
RD077（土塁）	C区3号窓・穴状窓構
RD078（土坑）	C区4号窓・穴状透構
RG037（遺跡）	C区1号窓
RG038（遺跡）	C区2号窓
RD079（土坑）	D区1号土坑
RD080（土坑）	D区2号土坑
RD081（土坑）	D区1号窓・穴状透構
RD082（土坑）	D区2号窓・穴状透構
RD083（土坑）	D区3号窓・穴状透構
RA017（堅穴住居跡）	E区1号堅穴跡
RA018（堅穴住居跡）	E区2号堅穴跡
RA019（堅穴住居跡）	4号堅穴跡
RA020（堅穴住居跡）	旧RA08住
RB009（掘立柱建物跡）	E区1号掘立柱建物跡
RB010（掘立柱建物跡）	E区2号掘立柱建物跡
RF005（住居状透構）	E区1号住居状
RB006（住居状透構）	E区2号住居状
RD007（住居状透構）	E区6号住
RF008（住居状透構）	E区8号住
RF009（住居状透構）	E区7号住
RE010（住居状透構）	E区5号住
RD011（住居状透構）	E区3号住
RD084（土坑）	E区1号土坑
RD085（土坑）	E区2号土坑
RD086（土坑）	E区3号土坑
RG039（遺跡）	E区1号窓
RG046（「芯型段差窓」）	E区1号土窓隠

III 野外調査・室内整理の方法

1 野外調査

(1) グリッド設定

グリッドの設定は、これまで本事業で継続して使用してきた調査座標である平面直角座標系第X系を用いて行った。この地区的調査座標の原点は、 $X = -36,000.000m$ 、 $Y = 26,000.000$ （日本測地系）であるが、これを基準として50m区画の大グリッド、さらにそれを2mの小グリッドに分割した。その際の座標原点は北西隅に置き、大グリッドは東西方向に大文字のアルファベット、南北方向にアラビア数字を付してI H -1 Hのように表した。同様に、小グリッドもa~yの小文字のアルファベットと1~25のアラビア数字を付して、いずれも東と南に増加するようにしその組み合わせで表した。実際の調査では、北西隅の杭にグリッド名を与えて「1 H 1 a」・「-1 H 25 b」などのように表記した。

今回の調査区は概ね5箇所に分散していたため、西側からA区~E区のように呼称（第5図参照）し、基準杭（4級基準点）は基本的に1つの区に対して1~2点打設した。調査で使用した各基準点の成果値は以下に記したとおりである。

<A区> I S -1 (1) 1 D 6 f グリッド $X = -35,960.000m$ 、 $Y = 26,160.000m$ 、 $H = 124.006m$

<B区> A区と同じ

<C区> I S -3 1 F 1 a グリッド $X = -36,000.000m$ 、 $Y = 26,250.000m$ 、 $H = 122.968m$

<D区> I S -6 -1 E 11 u グリッド $X = -35,970.000m$ 、 $Y = 26,340.000m$ 、 $H = 123.307m$

<E区> I S -8 -1 H 11 u グリッド $X = -35,970.000m$ 、 $Y = 26,390.000m$ 、 $H = 122.791m$

(2) 遺構名の付け方

遺構名は、調査時には区ごとに遺構の種類で連番を付し、「○区○号住居跡」のように呼称した。その後室内整理の段階で、同じ飯岡才川遺跡の第7次調査（国土交通省岩手河川国道事務所分）との調整を行い、これまで当事業において踏襲されてきた遺構ごとに付された遺構略号とその連番を用いたものに変更した（P 8 参照）。本調査で使用した遺構略号と遺構名は以下に記したとおりである。

R A-堅穴住居跡、R E-住居状遺構、R B-掘立柱建物跡、R D-土坑・墓壙、R G-溝跡

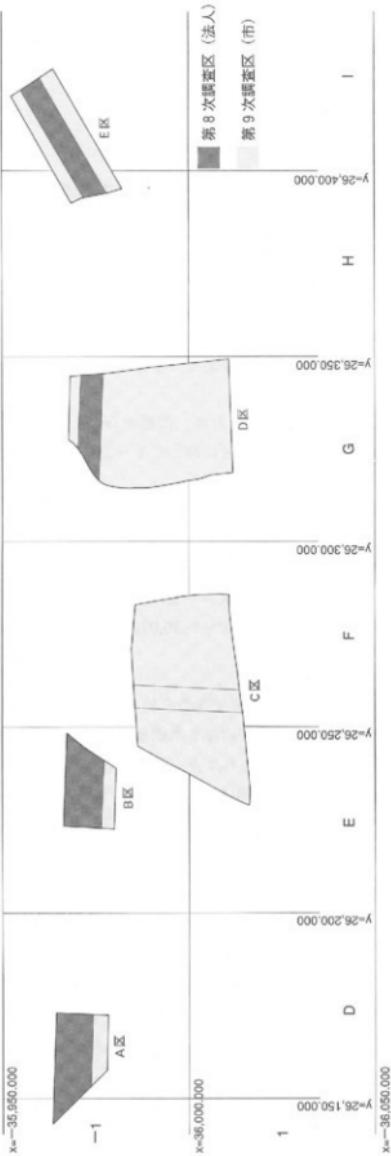
R Z-その他

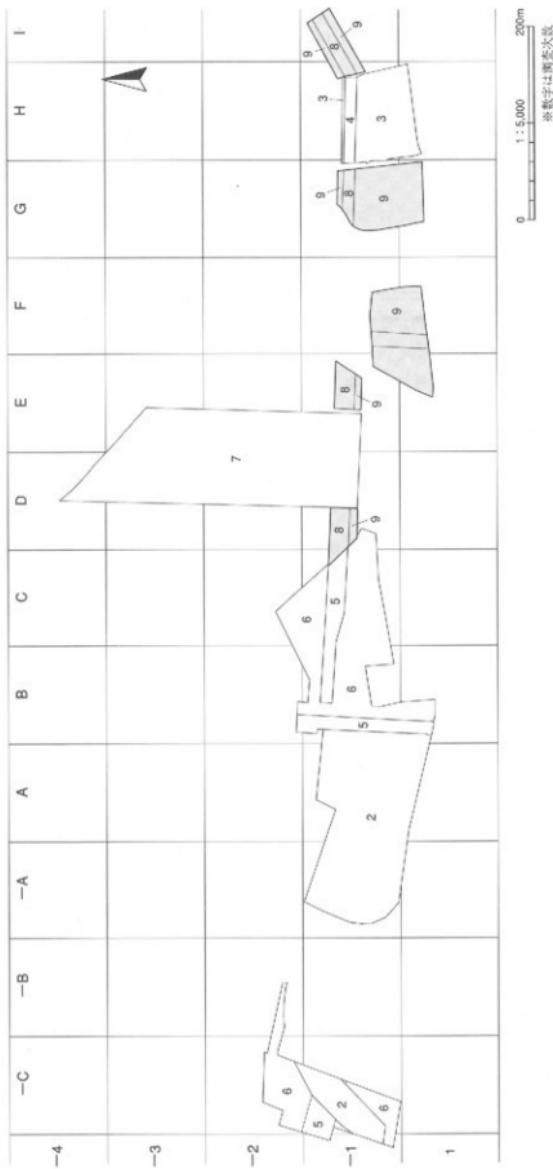
(3) 調査の手順

粗掘りはまず人力で試掘を行い層序の確認後、全域で重機を使用して行った。その後、人力で遺構の検出作業を行い、必要に応じてその状況を撮影した。

検出した遺構は、原則として住居跡と住居状遺構などの大型の遺構は4分法で、土坑類は2分法で行った。精査の段階で必要となる図面の作成や写真撮影は適宜行った。柱穴状の小土坑のうち、掘立柱建物跡を構成しないものについては、断面図の作成を省略、縮尺1/100の平面図だけを作成した。

遺構内の出土遺物については、床面出土の遺物は写真撮影・図面作成後に取り上げた。また、遺構外出土の遺物については、原則としてグリッドごとに出土した層位を記して取り上げた。平面実測は、簡易遺り方測量と光波トランシット測量を併用した。平・断面図の縮尺は1/20を原則とし、遺物の出





第6図 これまでの調査範囲

土状況やカマドに関するものなどは1/10で作成した。

写真撮影は、35mmモノクロームとカラーリバーサル各1台、モノクローム6×9cm判1台、補助用としてデジタルカメラ1台を使用した。実際の撮影は、被写体等のデーターを記載したカードを直接写し込み、各種遺構の土壤の堆積状況、遺構の全景、遺物出土状況などについて行った。

なお、今回の調査ではセスナ機による航空写真撮影は行わなかったが、同じ飯岡才川遺跡第7次調査（国土交通省分）で撮影したものが資料として残されている。

2 室内整理

（1）遺構記録の整理

野外調査で得た図面は遺構ごとに分類・点検をして、必要なものについては第二原図を作成した。その後トレース・図版の作成の順に進めた。撮影した遺構写真のモノクロームフィルムは、ネガアルバムに密着写真と一緒にして収納し、カラースライドフィルムはスライドファイルに撮影順に収納した。遺構写真図版は、紙焼きを外注し遺構ごとに作成した。

（2）遺物の整理

遺物は、野外調査時あるいは当センターで水洗した後、出土地点・層位等を注記した。その後、出土地点・層位ごとに仕分けを行い、それぞれ接合・復元作業を行った。遺物は実物大で実測し、トレースは状況に応じて原寸あるいは縮小して行った。その後、遺構ごとに遺物図版を作成した。

遺物の写真撮影は、写真撮影を専門に行う期限付職員1名と補助の期限付職員1名があたった。

（3）遺物の選択・掲載の基準

①土器類

<掲載遺物>

立体・円形を基調とする遺物は、反転光測が可能なものの（口径の1/4以上）や全体の器形がわかるものを中心に選択、掲載した。

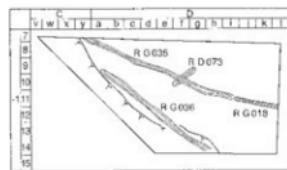
破片－立体で拾うことのできない形態のものや墨書き・刻書き器などのほか、調査員が必要と判断したものを選択、掲載した。

<不掲載遺物>

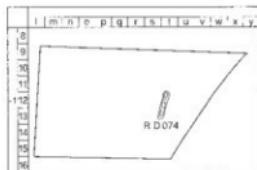
不掲載とした遺物については、情報のひとつとして遺構ごとに土師器・須恵器の総重量を計測、提示した。

②石製品・金属製品

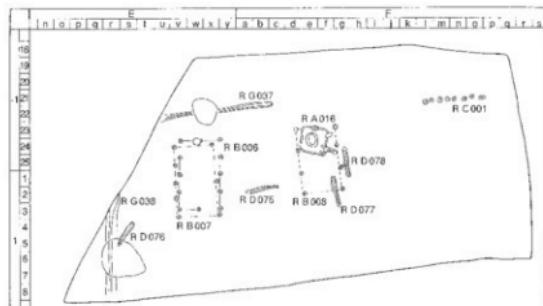
古代に属するものに関しては、全点掲載した。金属製品のうち、鉄製品には保存処理を施しているが、実測および重量計測はその処理前に行っている。銭貨も同様である。



A区



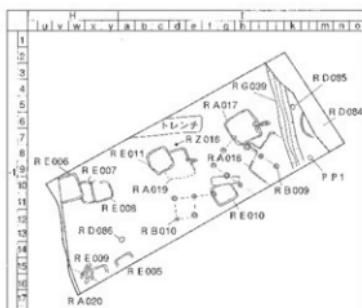
B区



C区



D区



E区

0 1:600 30m

第7図 造構配置図

IV 検出された遺構と出土遺物

1 A区

A区は、調査区最西部の-1C・-1Dグリッドに跨っており、その南西端は遺跡がのる段丘の縁辺にあたる。確認された遺構は、陥し穴状遺構1基、溝跡3条である。後者のうち、1号溝と2号溝は一部途切れていることから別遺構扱いとしたが、同一遺構の可能性がある。

R D073 (土坑)

遺構 (第8図、写真図版4)

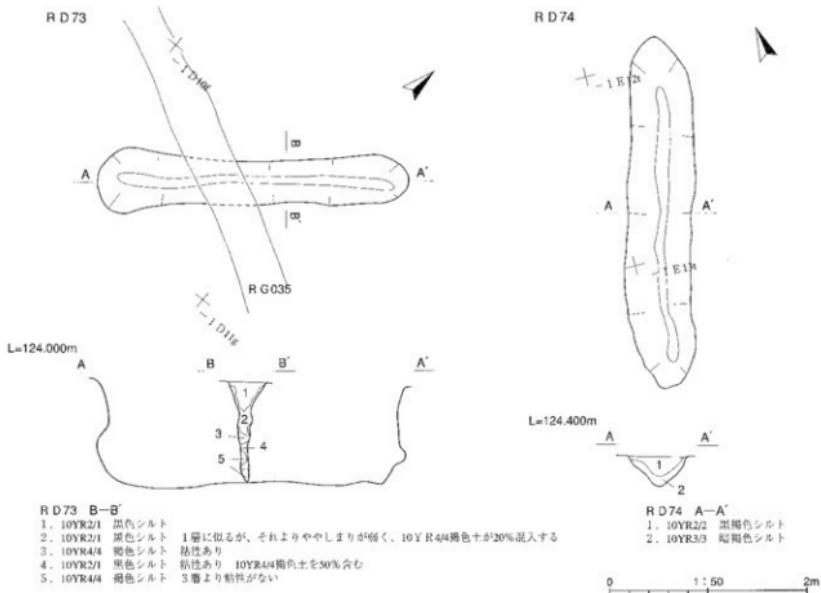
〈位置・検出状況〉-1D 9g~-1D 10fグリッドに跨る。IIa層で暗褐色土の広がりとして検出した。

〈重複関係〉RG035溝跡に切られる。〈規模〉上端0.63×3.58m、下端0.15×3.00m〈深さ〉1.11m
〈平面形・横断面形〉溝状・V字形 〈長軸方位〉N-40°-E

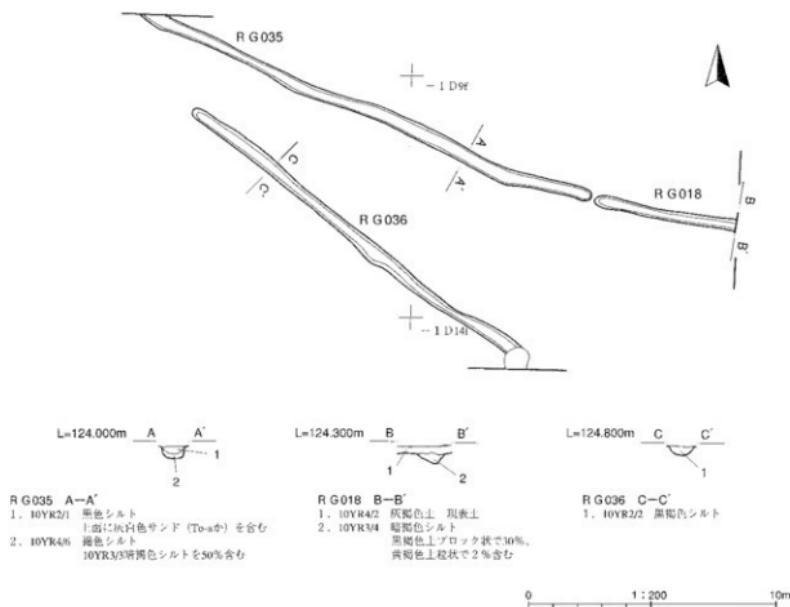
〈埋土・堆積状況〉上位は黒色土、下位は地山崩落土の褐色土を主体とする。自然堆積と思われる。
〈壁・底面〉壁はオーバーハンプグリッドに波打つ。

遺物 出土遺物なし。

時期 詳細な時期は不明だが、遺構の形態から縄文時代に属するものと思われる。



第8図 A区の遺構(1)(RD073)・B区の遺構(RD074)



第9図 A区の遺構（2）(RG018・RG035・RG036)

RG035（溝跡）

遺構（第9図、写真図版3）

〈位置・検出状況〉 A区を北西から南東方向に走り、-1C7y~-1D11iグリッドにかけて位置する。IIa層上面で黒褐色土の広がりで確認した。

〈重複関係〉 RD073土坑と重複する。本遺構のほうが新しい。

〈規模〉 確認できた長さ19.4m、上幅0.40~0.55m、下幅0.10~0.45m

〈深さ〉 0.25m前後（断面形）逆台形

〈埋土・堆積状況〉 黒色土と褐色土から前者には十和田aテフラと思われる小ブロックを含む。自然堆積と思われる。

〈遺構の性格〉 水が流れた痕跡が認められることから、古代における何らかの区画溝と思われる。前述したとおり2号溝とは同一の溝跡の可能性がある。

遺物 出土遺物なし。

時期 墓土に灰白色火山灰が認められることから、平安時代に機能した溝と思われる。

RG018（溝跡）

遺構（第9図、写真図版3）

〈位置・検出状況〉 RG035溝跡の東、-1D11i付近で途切れ、第7次調査区に続く溝である。-1D11i~-1D12iグリッドにかけて位置する。IIa層上面で暗褐色土の輪郭で確認された。

2 B区

〈重複関係〉認められない。〈規模〉確認できた長さ5.8m、上幅0.38~0.50m、下幅0.20m前後

〈深さ〉0.20m前後 〈断面形〉V字状

〈埋土・堆積状況〉暗褐色土の単層で、黒褐色や黄褐色土粒を含む。自然堆積と思われる。

〈遺構の性格〉R G035溝跡と同様、区画溝の可能性がある。

遺 物 〈出土状況〉出土遺物なし。

時 期 検出状況から、平安時代のR G035溝跡と同一の遺構である可能性が高い。

R G036 (溝跡)

遺 構 (第9図、写真図版4)

〈位置・検出状況〉R G035・018溝跡の南西側を北西から南東に走る。ほぼ段丘の縁に平行する溝跡で、-1 D 9 aグリッドを起点とし-1 D 14 hグリッド付近まで確認できた。II a層上面で検出した。

〈重複関係〉重複する遺構はないが、南東端は擾乱を受けている。

〈規模〉確認できた長さ16.3m、上幅0.40~0.70m、下幅0.10~0.45m 〈深さ〉0.18m前後

〈断面形〉U字状 〈埋土・堆積状況〉黒褐色土の単層で自然堆積と思われる。

〈遺構の性格〉これも水が流れた痕跡が認められず、区画溝かと思われる。

遺 物 出土遺物なし。

時 期 詳細な時期は不明である。

2 B区

B区は、A区との間に飯岡才川遺跡の第7次調査区を挟んだ東側、-1 E区内にある。検出された遺構は土坑1基である。

R D074 (土坑)

遺 構 (第8図、写真図版5)

〈位置・検出状況〉-1 E 11 t~-1 E 13 sグリッドにかけて位置する。II a層で黒褐色土の広がりとして検出した。

〈重複関係〉なし

〈規模〉上端0.48×3.37m、下端0.10~2.82m 〈深さ〉1.11m 〈平・断面形〉溝状・V字状

〈長軸方位〉N-15°-E

〈埋土・堆積状況〉上位は黒褐色、下位は暗褐色土からなる。自然堆積層と思われる。

〈壁〉壁は緩やかに立ち上がる。

〈遺構の性格〉平面形は陥し穴状遺構に似るが、深さがなく不明としておく。

遺 物 出土遺物なし。

時 期 詳細な時期は不明である。上部が削られた陥し穴状遺構の可能性を残す。

3 C区

C区は、調査区中央部の-1 E~-1 F・1 E・1 Fグリッドの4つの大グリッドに跨る。当初計画より大きく面積増となった箇所である。確認された遺構は、竪穴住居跡1棟、掘立柱建物跡3棟、陥し穴状遺構4基、溝跡2条、柱穴列1箇所、柱穴状土坑51個である。

R A016 (竪穴住居跡)**遺構 (第10図、写真図版7)**

〈位置・検出状況〉 C区中央、-1 F23 d グリッド付近にあり、II b 層上面で黒色土の広がりで確認できた。幾分遺構の上部が削られているものと思われる。

〈重複関係〉 R B008掘立柱建物跡を構成する柱穴と重複するが、いずれも本遺構のほうが古い。また、東辺の北東隅付近の一部が搅乱を受けている。

〈規模〉 3.25×3.32m 〈平面形〉 正方形 〈標の高さ・状態〉 5~20cmほどでいずれも緩く立ち上がる。

〈埋土・堆積状況〉 上位は黒色土、下位は小礫を含む黒褐色土からなる自然堆積層と思われる。

〈床面〉 II b 層を床面とし堅く締まる。中央部には1.35×1.70m、深さ30cmあまりの梢円形の掘込みが確認できた。埋土の状況から住居に付属することは間違いないが、用途は不明である。作業場であろうか。また、この箇所を除く全域には胎床が認められた。

〈カマド〉 カマドは東壁南東隅寄りに設置され、本体・煙道部とも良好に残る。

〈本体部〉 幅は約90cmで、袖部は褐色のシルト質土で構築されている。燃焼部焼土は直径30cm程度に広がり、厚さは最大で7cmである。焼土奥には支脚の蹠が1個据えられている。

〈煙道・煙出し部〉 挖り込み式の煙道で、埋土には焼土粒や炭化物粒を含む。煙出しに向かっては緩やかに下るが、その長さはおよそ1.4mである。煙道方位はN-105°-E。

〈柱穴・土坑〉 カマド付近にPP 1、北壁中央部にPit 1が検出された。前者は本遺構に伴うかは不明である。後者は44×85cmの梢円形をなす貯蔵穴と思われる土坑である。

遺物 (第28図、写真図版25)

〈出土状況〉 土器類は、埋土やカマド内・煙道部などから土師器がビニール袋半分ほど(130g)、須恵器が数片出土した。

〈掲載遺物〉 3点掲載した。1・2はいずれも須恵器壺の破片、3は刀子と思われる欠損品である。

時期 出土した遺物などから、平安時代(9世紀後半~10世紀はじめ)に属するものと思われる。掘り炬燵状の掘り込みを有する住居であるが、何らかの作業場としての機能も想定される。

R B006 (掘立柱建物跡)**遺構 (第11図、写真図版8)**

〈位置・重複関係〉 C区の西側、-1 E24 v ~ 1 E 4 y グリッドに位置する。II b 層で検出した。R B007掘立柱建物跡と重複するが、柱穴の切り合いではなく、新旧関係は不明である。

〈平面形式・方向・規模〉 桁行4間、梁間2間の掘立柱建物跡である。13個の柱穴を使用した。桁行の方向はN-1°-Eではほぼ真北である。桁行8.4m、梁間5.1m、面積は42.8m²(約13坪)である。

〈住間寸法〉 桁行は210cm(7尺)、梁間は255cm(8.5尺)である。桁行の7尺を基準として、梁間はそれを1尺半広げたものと思われる。

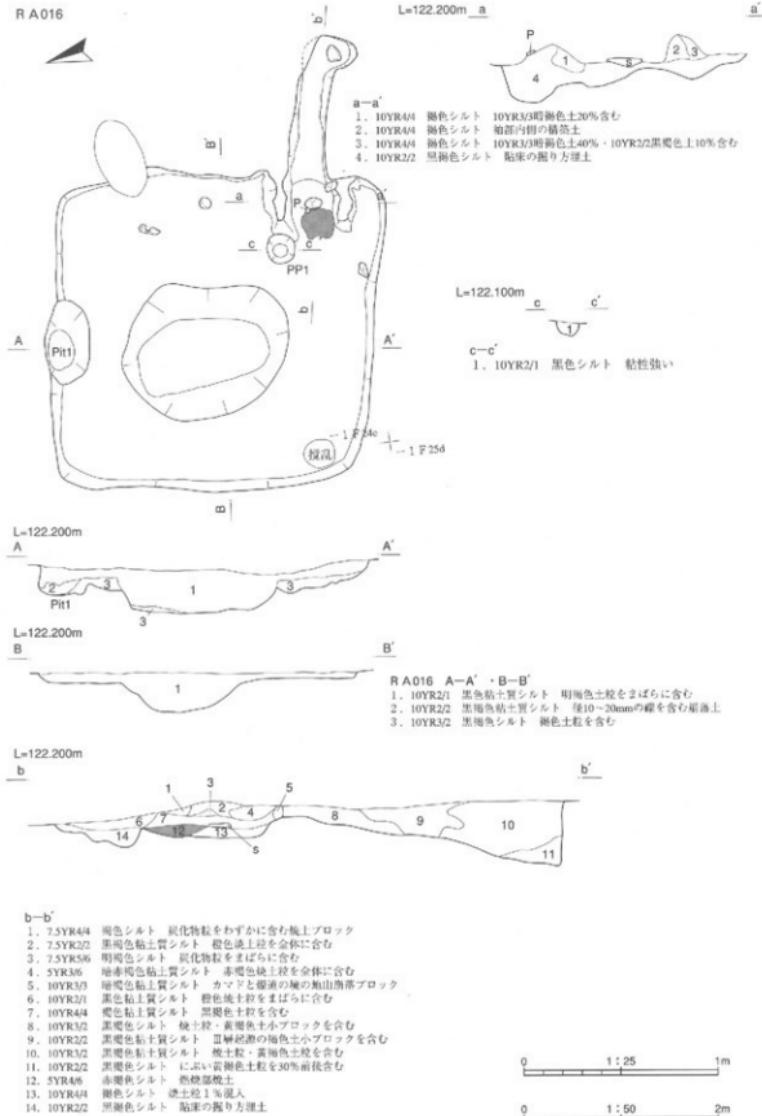
遺物 遺物の出土はない。

時期 平面形式・柱間寸法から近世に属するものと思われるが、詳細な時期は不明である。

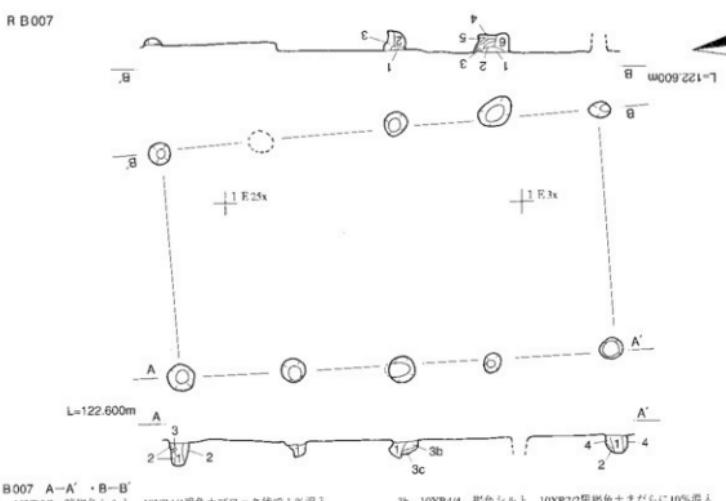
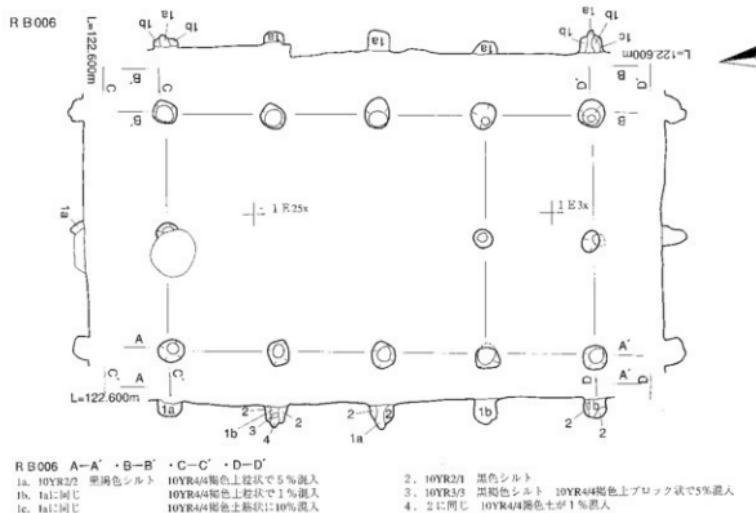
R B007 (掘立柱建物跡)**遺構 (第11図、写真図版8)**

〈位置・重複関係〉 C区の西側、-1 E24 v ~ 1 E 4 y グリッドに位置する。II b 層で検出した。R B006掘立柱建物跡と重複するが、柱穴の切り合いではなく、新旧関係は不明である。

〈平面形式・方向・規模〉 桁行4間、梁間1間の掘立柱建物跡である。9個の柱穴を使用した。桁



第10図 C区の遺構（1）(RA016)



第11図 C区の邊縫(2)(BB006・BB007)

行の方向はN-5°-Wである。平面形は桁行が9.0mで構うが、梁間は北側が4.5m、南側が4.8mと、ややゆがみが見られる。面積は40.5m²（約12.3坪）である。

〈柱間寸法〉 桁行は180cm（6尺）と210cm（7尺）を使用している。

遺物 遺物の出土はない。

時期 平面形式・柱間寸法から近世に属するものと思われるが、詳細な時期は不明である。

R B008（掘立柱建物跡）

遺構（第12図）

〈位置・重複関係〉 C区の西側、-1 F23 e ~ -1 F3 i グリッドに位置する。II b層で検出した。R A016堅穴住居跡・R D077陥し穴状遺構と重複するが、直接の切り合い関係はない。いずれの遺構よりも新しい。

〈平面形式・方向・規模〉 桁行3間、梁間1間の掘立柱建物跡である。7個の柱穴を使用した。桁行の方向はN-10°-Wである。桁行8.1m、梁間5.1m、面積は41.3m²（12.5坪）である。

〈柱間寸法〉 桁行は270cm（9尺）を使用している。

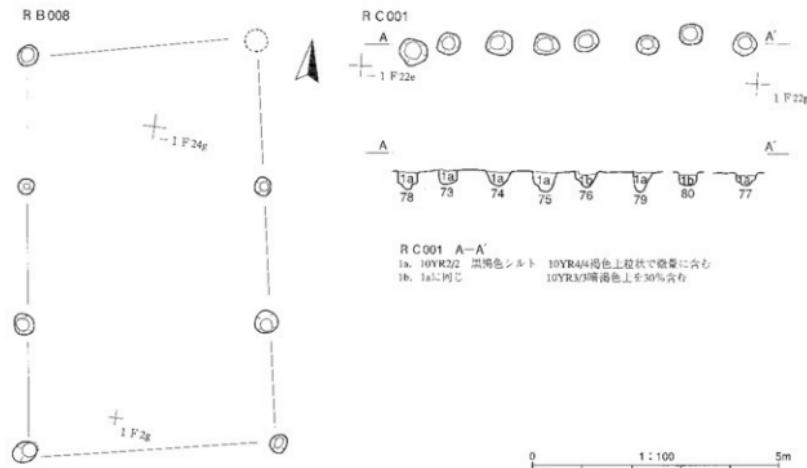
遺物 遺物の出土はない。

時期 平面形式・柱間寸法から近世に属するものと思われるが、詳細な時期は不明である。

R C001（柱穴列）

遺構（第12図）

〈位置・重複関係〉 C区の北東、-1 F21 l ~ -1 F21 p グリッドに位置する。II b層で検出した。重複する遺構はない。



第12図 C区の遺構（3）（RB008）

〈平面形式・方向・規模〉8個の柱穴状土坑がほぼ等間隔(0.8~1.2m)に並び、総長は6.7mを測る。これらは一直線にはならないが、軸方向は概ねN-85°-Eである。

遺 物 遺物の出土はない。

時 期 埋土が近世の掘立柱建物跡の柱穴と類似することから、近世に属するものと思われる。

R D075 (土坑)

遺 構 (第13図、写真図版9)

〈位置・検出状況〉1F2a~1F2cグリッドに位置する。IIb層で黒色土のプランを確認した。

〈重複関係・規模〉上端0.43×4.00m、下端0.16×3.75m〈深さ〉0.39m

〈平面形・横断面形〉溝状・U字状〈長軸方位〉N-80°-E

〈埋土・堆積状況〉上位は黒色土、下位は褐色土を主体とする。自然堆積である。

〈壁・底面〉壁は直立ぎみに立ち上がる。

〈遺構の性格〉遺構上部が削られた陥し穴状遺構の可能性があるが、不明としておく。

遺 物 出土遺物なし。

時 期 詳細な時期は不明だが、遺構の形態から縄文時代のいずれかの時期に属する遺構である。

R D076 (土坑)

遺 構 (第13図、写真図版9)

〈位置・検出状況〉1E5q~1E4rグリッド付近に位置する。IIb層で黒色土の広がりで検出した。

〈重複関係〉遺構の南側上部が攪乱を受けている。

〈規模〉上端0.44×3.20m、下端0.05×3.53m〈深さ〉0.80m

〈平面形・横断面形〉溝状・V字形〈長軸方位〉N-34°-E

〈埋土・堆積状況〉上位は黒色土、下位は地山崩落土の褐色土を主体とする。自然堆積と思われる。

〈壁・底面〉壁はオーバーハンプして立ち上がり、底面は北東側が大きく波打つ。

遺 物 出土遺物なし。

時 期 詳細な時期は不明だが、遺構の形態から縄文時代のいずれかの時期に属する遺構である。

R D077 (土坑)

遺 構 (第13図、写真図版10)

〈位置・検出状況〉1F1f~1F3gグリッドにかけて位置する。IIb層で黒褐色土の広がりで検出した。

〈重複関係〉遺構の西壁南寄りでPP11と、遺構の北側でRB008と重複する。いずれよりも本遺構のはうが旧い。

〈規模〉上端0.33×3.91m、下端0.06×4.07m〈深さ〉0.78m

〈平面形・横断面形〉溝状・漏斗状〈長軸方位〉N-13°-W

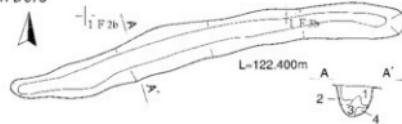
〈埋土・堆積状況〉上位は黒褐色土と黒色土、下位は地山崩落土である褐色土が主体である。自然堆積と思われる。

〈壁・底面〉壁はオーバーハンプして立ち上がる。底面には小さな凹凸が認められる。

遺 物 出土遺物なし。

時 期 詳細な時期は不明だが、遺構の形態から縄文時代のいずれかの時期に属する遺構である。

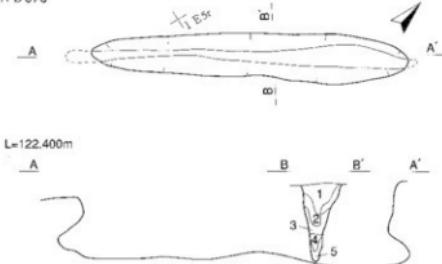
R D075



R D075 B-B'

1. 10YR3/1 黄色シルト よく詰まる
2. 10YR4/4 純色シルト
3. 10YR4/4 黄色シルト 10YR3/3暗褐色土まだらに混入する、よく詰まる
4. 10YR4/4 黄色シルト よく詰まる

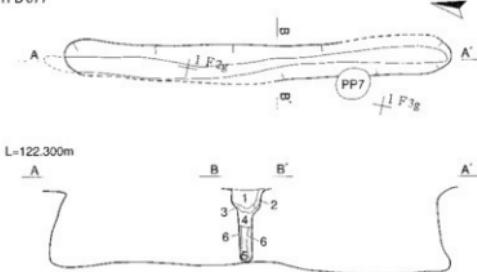
R D076



R D076 B-B'

1. 10YR2/1 黒褐色シルト よく詰まる
2. 10YR2/2 黑褐色シルト 10YR3/3暗褐色土5%
3. 10YR4/4 黄色シルト
4. 10YR2/2 黑褐色シルト 10YR4/4褐色土2%含む
5. 10YR4/4 黄色シルト

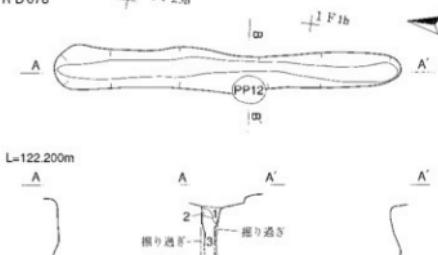
R D077



R D077 B-B'

1. 10YR2/2 黑褐色シルト 褐色土粒を含む
2. 10YR2/1 黑褐色シルト 本様による微孔
3. 10YR2/3 黑褐色シルト 褐色土粒・青褐色土粒を含む
4. 10YR3/3 暗褐色粘土質シルト 黑褐色土を含む
5. 10YR3/3 暗褐色粘土質シルト
6. 10YR3/4 暗褐色粘土質シルト 地山（砂質土）の崩落土

R D078



R D078 B-B'

1. 10YR2/2 黑褐色シルト 褐色土粒を含む
2. 10YR4/3 にぶい黄褐色粘土質シルト 黑褐色土と重合する
3. 10YR4/4 黄色シルト 全体に黑色土粒を含む

0 1:50 2m

第13図 C区の遺構 (4) (RD075・RD076・RD077・RD078)

R D078 (土坑)

遺構 (第13図、写真図版10)

〈位置・検出状況〉 -1 F 24 g ~ 1 F 1 g グリッドにかけてある。II b 層で黒褐色土の広がりで検出した。

〈重複関係〉 遺構の西壁南寄りでPP12と重複する。本遺構のほうが古い。

〈規模〉 上端0.45×3.75m、下端0.10×3.65m (深さ) 0.70m

〈平面形・横断面形〉 溝状・U字状 (長軸方位) N-10°-W

〈埋土・堆積状況〉 上位に黒褐色土、中位以下は黒褐色土粒を含む褐色土である。自然堆積である。

〈壁・底面〉 壁はオーバーハンプして立ち上がり、底面はほぼ平らである。

遺物 出土遺物なし。

時期 詳細な時期は不明だが、遺構の形態から縄文時代のいずれかの時期に属する遺構である。

R G037 (溝跡)

遺構 (第14図、写真図版11)

〈位置・検出状況〉 C区北側の西端から中央部付近まではほぼ西から東へ走る溝跡である。途中、擾乱を受け途切れるが、-1 E 22 t から -1 F 2 c グリッド付近まで延びる。II b 層上面で黒褐色土の広がりで確認した。

〈重複関係〉 ごく最近の搅乱を受けているが、一連の遺構と判断した。他の遺構との重複は認められない。

〈規模〉 確認できた長さ13.7m (途中3mあまりを欠く)、上幅0.50~0.65m、下幅0.10~0.35m

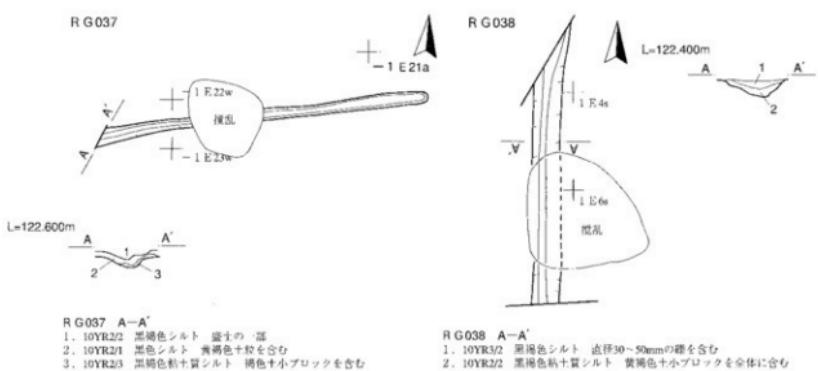
〈深さ〉 0.30m前後 (断面形) 浅皿状

〈埋土・堆積状況〉 黒色土と黒褐色土からなる。自然堆積と思われる。

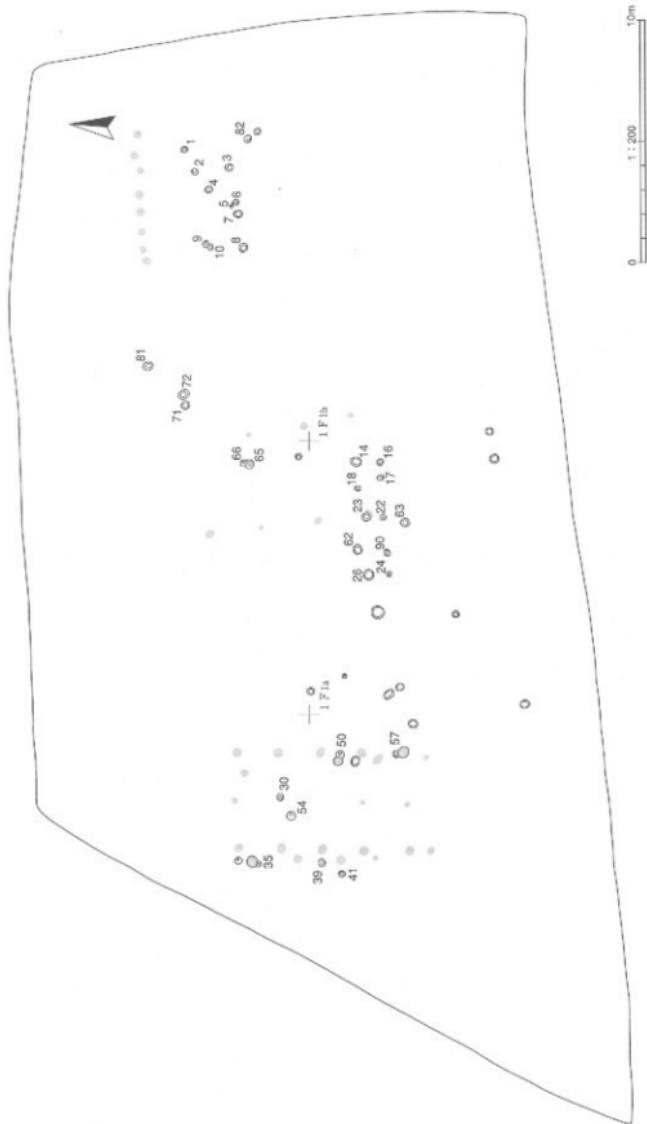
〈遺構の性格〉 確認できた部分が少ないため詳細は不明である。

遺物 (出土状況) 出土遺物なし。

時期 不明である。



第14図 C区の遺構 (5) (RG038・RG039)



第15図 C区の遺構（6）（柱穴群）

R G038 (溝跡)

遺構 (第14図、写真図版11)

〈位置・検出状況〉 C区の南西側にほぼ南北方向に延びる溝跡で、いずれも調査区域外まで延びている。1 E 2 q ~ 1 E 8 q グリッドにかけて位置する。II b層上面で黒褐色土のプランが確認された。

〈重複関係〉 中央にごく最近の擾乱を受け途切れているが同一の遺構とした。それ以外の重複は認められない。

〈規模〉 確認できた長さ11.0m (途中4mあまりを欠く)、上幅1.10m、下幅0.20m前後

〈深さ〉 0.30m前後 〈断面形〉 浅皿状

〈埋土・堆積状況〉 2層の黒褐色土からなり上層には礫を含んでいる。自然堆積と思われる。

〈遺構の性格〉 出土遺物もなく詳細は不明であるが、正方位に沿うことから区画溝の可能性がある。

遺物 〈出土状況〉 出土遺物なし。

時期 不明である。

C区の柱穴状土坑 (第15図、写真図版6)

今回の調査では、C・D・E区あわせて約100個の柱穴状土坑を検出した。これらはほとんどがC区に集中するため、ここで一括して記述する。柱穴状土坑は検出後、掘立柱建物や柱穴列の構成を考えながらすべて半裁して断面観察を行い、完掘した。

これらのほとんどは、規則的な配置を見ず、掘立柱建物や柱穴列を構成するものは少ない。C区の柱穴状土坑の配置は第15図に、E区のそれは第27図などに示した。これには掘立柱建物や柱穴列に使用したものも含めている。図では、掘立柱建物や柱穴列に使用した柱穴とそれ以外とを区別するため、前者は柱穴位置を網掛けして示した。後者の時期は、掘立柱建物と同じ近世のものと思われるが、掘立柱建物を構成する柱穴に切られるものや、逆に切るものがあるので若干の時期差はあると考えられる。

4 D区

D区は、調査区東寄りの-1 G~-1 H・1 G・1 Hグリッドの4つの大グリッドに跨る。近・現代の擾乱が数多く認められた区域である。確認された遺構は、土坑2基、陥し穴状遺構3基と柱穴状土坑数個である。柱穴状土坑については、報告の対象としていない。

R D079 (土坑)

遺構 (第16図、写真図版12)

〈位置・検出状況〉 1 G 1 u グリッド付近にある。II b層で検出した。

〈重複関係〉 なし。〈規模〉 1.46×1.95m 〈深さ〉 0.10m 〈平・断面形〉 不整円形・浅皿状

〈埋土・堆積状況〉 暗褐色シルト質土を2層に分層した。

〈遺構の性格〉 不明であるが、近現代の擾乱の可能性がある。

遺物 出土遺物なし。

時期 詳細な時期は不明である。

R D080 (土坑)

遺構 (第16図、写真図版12)

〈位置・検出状況〉 -1 G 25 s グリッドに位置する。II b層で検出した。

〈重複関係〉なし。〈規模〉
1.04×1.18m 〈深さ〉0.31m

〈平・断面形〉略円形・長方形

〈埋土・堆積状況〉黒褐色の単層で小礫を含んでいる。人骨片をわずかに含み人为的に埋め戻されていることから墓壙と判断した。

〈遺構の性格〉近世墓。人骨片は改葬の際に残されてしまったものであろう。

遺 物 人骨以外にはない。

時 期 概ね近世と判断した。

R D081 (土坑)

遺 構 (第17図、写真図版13)

〈位置・検出状況〉-1 G 18 k ~ -1 G 20 l グリッドにある。II b 層で黒褐色土の広がりで検出した。

〈重複関係〉なし。〈規模〉上端0.87×3.73m、下端0.26×4.12m 〈深さ〉0.85m

〈平面形・横断面形〉溝状・漏斗状〈長軸方位〉N-25°-W

〈埋土・堆積状況〉上位は黒色土～黒褐色土、中位は黒色土と褐色土、最下部には黒褐色土を含む。自然堆積と思われる。湧水があり下位の堆積状況は不明瞭である。

〈壁・底面〉壁はオーバーハンプグし、底面はほぼ平らである。

遺 物 出土遺物なし。

時 期 詳細な時期は不明だが、遺構の形態から縄文時代のいずれかの時期に属する遺構である。

R D082 (土坑)

遺 構 (第17図、写真図版13)

〈位置・検出状況〉-1 G 17m ~ -1 G 19 n グリッドに位置する。黒色土の広がりで検出した。

〈重複関係〉なし。〈規模〉上端0.63×3.50m、下端0.12×3.67m 〈深さ〉0.77m

〈平面形・横断面形〉溝状・V字状〈長軸方位〉N-22°-W

〈埋土・堆積状況〉上位は黒色土、中位はにぶい黄褐色土、下位は黒褐色土のブロックからなり、自然堆積と思われる。湧水があり下位の状況は不明瞭である。

〈壁・底面〉壁はオーバーハンプグして立ち上がり、底面は小さく波打つ。

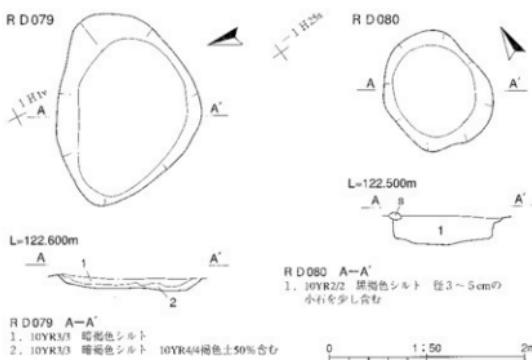
遺 物 出土遺物なし。

時 期 詳細な時期は不明だが、遺構の形態から縄文時代のいずれかの時期に属する遺構である。

R D083 (土坑)

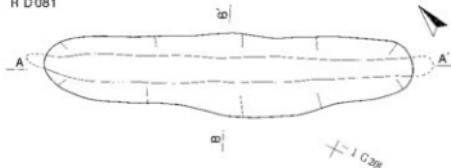
遺 構 (第17図、写真図版14)

〈位置・検出状況〉-1 G 11 v ~ -1 G 13 w グリッドに位置する。黒色土の広がりで検出した。



第16図 D区の遺構(1)(RD079・RD080)

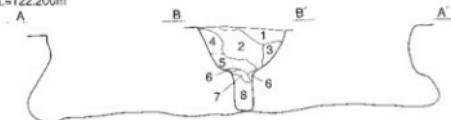
R D081



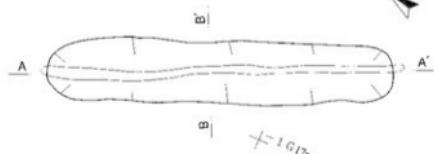
R D081 B-B'

1. 10YR2/2 黒褐色シルト 混入物なし
2. 10YR2/1 黒褐色シルト 黄褐色土粒をまばらに含む
3. 10YR3/2 黒褐色粘土質シルト 地山崩落ブロック
4. 10YR2/2 黒褐色シルト 黄褐色土粒ブロック含む
5. 10YR2/1 黑褐色シルト 黄褐色土小ブロック含む
6. 10YR5/6 黑褐色シルト 地山崩落ブロック
7. 10YR4/4 黑褐色砂質土 粗粒の崩落ブロック含む
8. 10YR2/2 黑褐色砂質シルト 黑色土ブロックだが
海水により不明瞭

L=122.200m



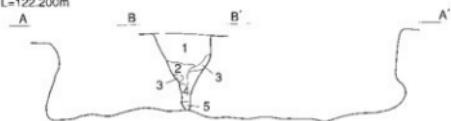
R D082



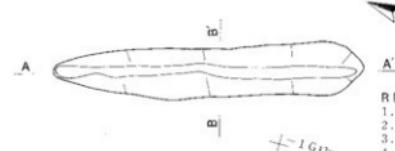
R D082 B-B'

1. 10YR2/1 黑褐色粘土質シルト 海入物なし
2. 10YR2/2 黑褐色シルト 混入物を含む
3. 10YR4/4 黑褐色粘土質シルト 地山崩落ブロック
4. 10YR5/4 にじい黄褐色粘土質シルト 粘性強い
5. 10YR2/2 黑褐色粘土質シルト 海水ライン下の黒色土

L=122.200m



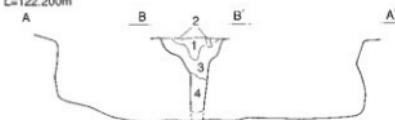
R D082



R D083 B-B'

1. 10YR2/1 黑褐色シルト 黄褐色土粒をまばらに含む
2. 10YR3/2 黑褐色シルト 黄褐色土粒を全體に含む
3. 10YR2/1 黑褐色シルト 黄褐色土との混合土
4. 10YR4/3 にじい黄褐色砂質シルト 黄褐色土粒・地山崩落土を含む

L=122.200m



0 1:50 2m

第17図 D区の遺構（2）(RD081・RD082・RD083)

〈重複関係〉なし。〈規模〉上端0.49×3.13m、下端0.08×3.05m〈深さ〉0.78m
 〈平面形・横断面形〉溝状・漏斗状〈長軸方位〉N-18°-W
 〈埋土・堆積状況〉上位は黒色土、中位は砂質の褐色土、下位はにぶい黄褐色土からなる自然堆積とである。これも湧水があり下位の状況は不明瞭である。

〈壁・底面〉壁は直立ぎみに立ち上がり、底面には小さな凹凸がある。

遺物 出土遺物なし。

時期 詳細な時期は不明だが、遺構の形態から縄文時代のいずれかの時期に属する遺構である。

5 E区

E区は-1H・-1Lグリッドにかけて位置し、かつて実施された飯岡才川遺跡第3次調査区の東側に隣接する区域である。今回の調査区の中では最も遺構密度が高く、遺構間の重複も多く認められる。また、遺構自体は上部が削られているものが目立ち、残存状態はあまり芳しくない。

確認された遺構は、竪穴住居跡4棟、住居状遺構7棟、掘立柱建物跡2棟、土坑3基、溝跡1条、柱穴状土坑1個、古代の土器埋設遺構としたもの1基である。竪穴住居跡と住居状遺構の区別は、調査後のカマドの有無を基準とした。

R A017（竪穴住居跡）

遺構（第18図、写真図版15）

〈位置・検出状況〉E区東寄り、-1L6hグリッド付近にあり、II b層で黒褐色土の方形プランが確認できた。残存状況から、遺構上部は幾分割れているものと思われる。

〈重複関係〉R B009を構成する柱穴（PP11）と重複しているが、本遺構のほうが古い。カマド中央部と煙出しの一部が攪乱を受けている。〈規模〉3.55×3.68m〈平面形〉ほぼ正方形

〈壁の高さ・状態〉削平を受けた壁も10cm程度しか残存しない。

〈埋土・堆積状況〉黄褐色土の小ブロックをわずかに含む黒褐色土のみ残る。自然堆積層か。

〈床面〉II b層もしくは基盤層のⅢ層を床面とし堅く縮まっていた。

〈カマド〉カマドは北東壁東隅寄りに設置され、本体は袖部と燃焼部焼上の一部が残る。

〈本体部〉袖部の幅は約1.4mで、褐色のシルト質土が貼り付けられる。左右とも土器片が入れられ構築される。燃焼部焼土は幅50cm程度に広がるが、厚さは数cmと薄く焼けも良くない。

〈煙道・煙出し部〉掘り込み式の煙道と思われる。底面はほぼ水平に延びるが、攪乱により煙出し部分の状況は不明である。煙道方位はN-64°-E。

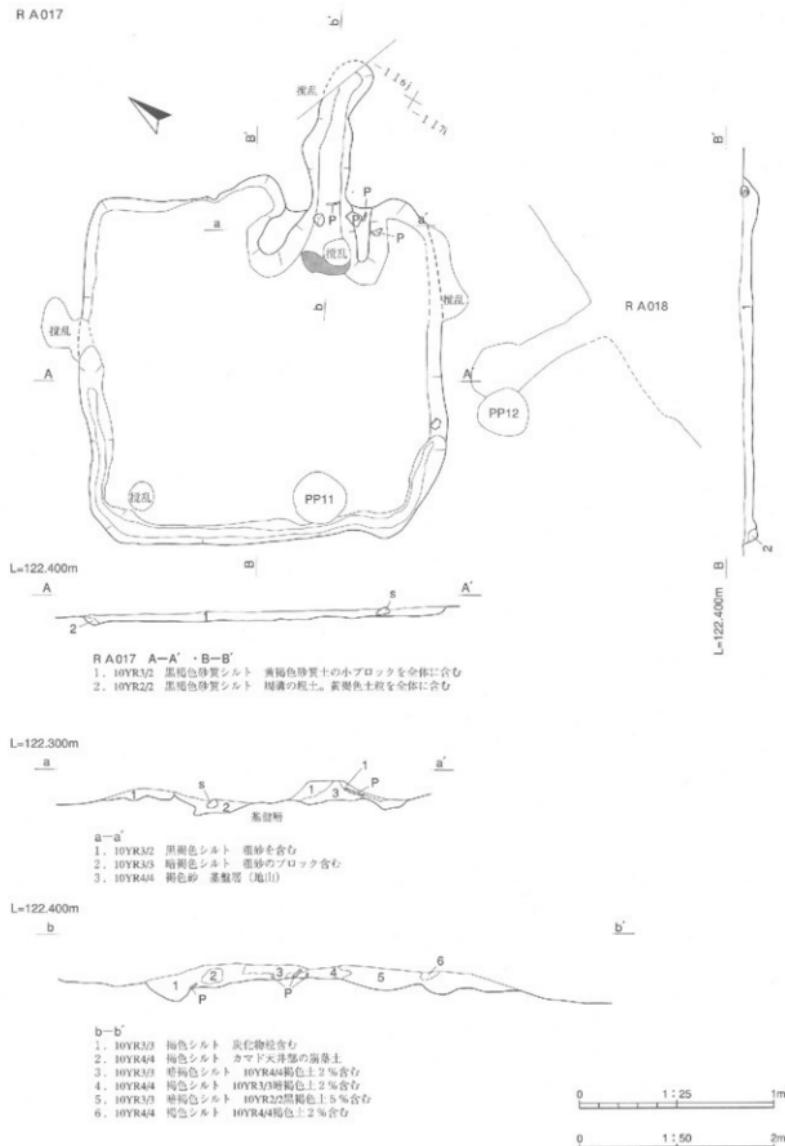
〈柱穴・土坑〉ともに検出されなかった。

遺物（第28・29図、写真図版25）

〈出土状況〉埋土やカマド内・煙道部などから、土師器が2kg弱、須恵器が2.2kgほど出土した。器種は壺・甕・大甕などである。

〈掲載遺物〉9点掲載した。5は内外面とも丁寧にヘラミガキ調整される土師器壺の体部下端付近である。器種は壺としたが、どうか。6の器種は碗とした。器高があり、内外面にはヘラナデなどの調整痕を残し、内面は黒色処理が施されない。口唇部は外反して立ち上がっている。7・8は極端に口唇部が短い土師器甕で、内外面の調整はいずれも似ている。9~13は須恵器の破片資料で、9・10は壺、11~13は大小甕類の破片と思われる。

時期 出土した遺物から、平安時代（9世紀後半~10世紀はじめ）に属するものと思われる。



第18図 E区の遺構（1）（BA017）

R A018 (竪穴住居跡)

遺構 (第19・20図、写真図版16)

〈位置・検出状況〉1号住南の一I 9 jグリッド周辺にあり、II b層で黒褐色土の広がりで確認した。

〈重複関係〉R B009を構成する柱穴PP12・PP13・PP14およびR G039と重複するがいずれよりも本遺構のほうが古い。また、中央部西寄りには直径1.3mほどの擾乱が認められた。

なお、本遺構はカマドを含む全体の1/3程度しか精査できていない。

〈規模〉5.42×?mの比較的大形のもの〈平面形〉不整な正方形か?

〈壁の高さ・状態〉3~6cmほどで上部の削平が著しい。

〈埋土・堆積状況〉黄褐色土粒を含む黒褐色土のみ薄く残る。自然堆積と思われるが状況は不明である。

〈床面〉II b層・III層を床面とし、礫が露出する箇所がある。

〈カマド〉燃焼部焼土と煙道の残存状況から、北西壁中央に設置されていたものと思われる。本体部の袖は失われている。

（本体部）燃焼部焼土は直径36cm、厚さは最大で8cmを測る。PP13に切られている。

（煙道・煙出し部）掘り込み式の煙道でPP12に切られている。埋土下位には、10~40mm程度の礫を含む層がある。煙道底面は煙出しに向かって緩やかに下り、壁からの長さはおよそ1.45mである。煙道方位はN-60°-Wである。

〈柱穴・土坑〉いずれも検出されなかった。

遺物 (第29図、写真図版25)

〈出土状況〉検出面から土師器の壊・甕が数g、須恵器の破片が数片(16g)出土した。

〈掲載遺物〉9点掲載した。14~18は土師器壊で、15は再被熱のため内面の黒色処理がなくなったもの。16の底部には墨書きの一部が残るが、「方」か?18は高台部分。19・20は土師器甕で、後者はロクロ成形されているもの。この他に鉄製品が2点出土しているが、21は角釘の欠損品とした。22は床面から出土した鉄斧の完形品で、基部が袋状にならないタイプである。保存処理前の重量は800g弱を計る。

時期 出土遺物などから、平安時代(9世紀後半~10世紀はじめ)に属するものと思われる。

R A019 (竪穴住居跡)

遺構 (第21図、写真図版17)

〈位置・検出状況〉一I 8 dグリッド付近にあり、II b層で黒褐色土のプランを確認した。

〈重複関係〉遺構西側の一部をRE011に切られ、北西以外は擾乱等により失われている。この住居プランの北西から南・東側にかけて床面の範囲かとも見られる輪郭を確認したが、不明瞭でありここでは同一の遺構としては扱わなかった。

〈規模〉一辺3.5~4.0mほどか?〈平面形〉方形基調と思われるが不明。

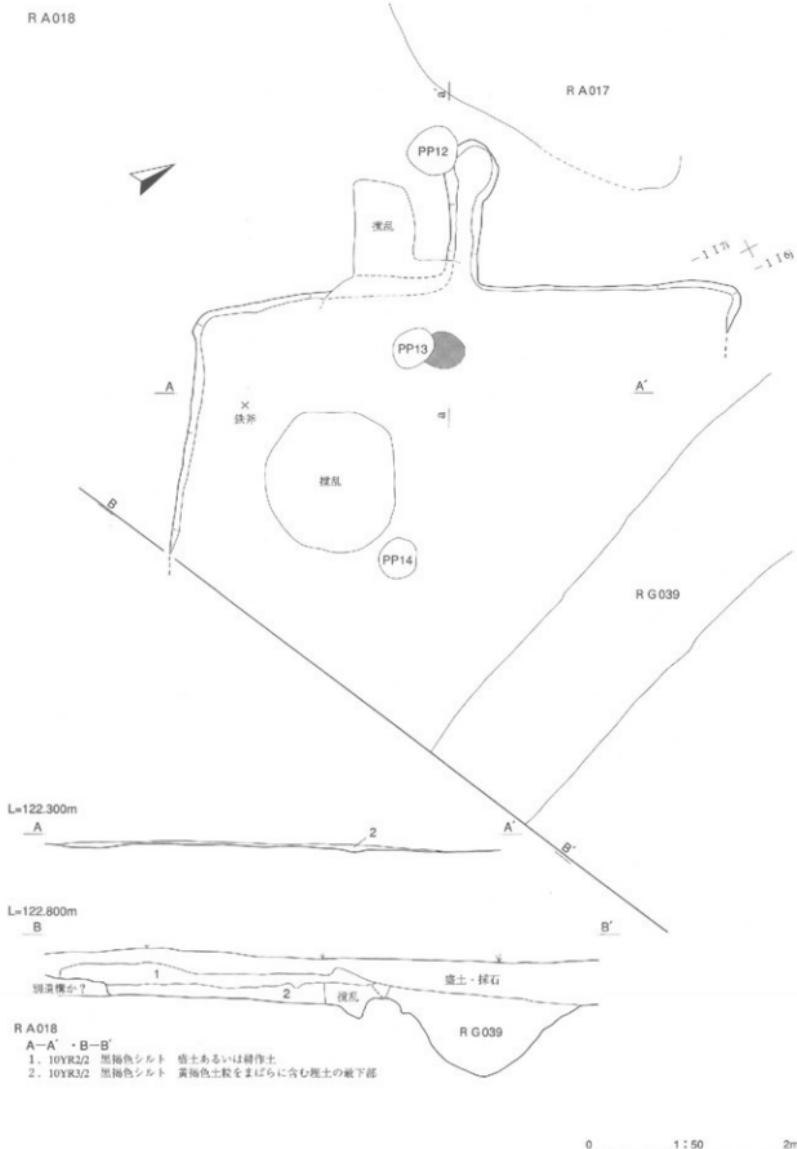
〈壁の高さ・状態〉10~17cmほどで上部は削られている。直立気味に立ち上がる。

〈埋土・堆積状況〉黄褐色土粒を含む黒褐色土。自然堆積であろうが状況は不明。

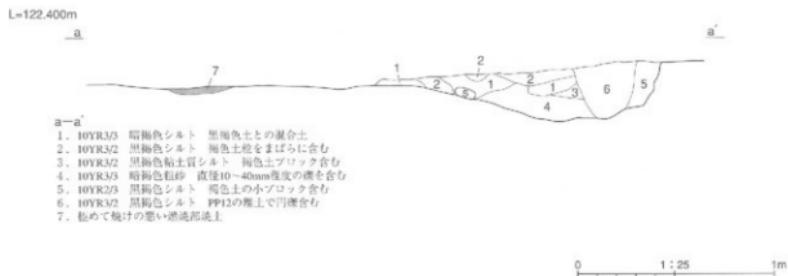
〈床面〉II b層もしくはIII層を床面とする。これも基盤となる礫が露出する箇所がある。

〈カマド〉東壁中央に位置する。

（本体部）土器片を含む左袖のみ残存する。それ以外は失われている。



第19図 E区の遺構（2）（RA018①）



第20図 E区の遺構（3）(RA018②)

（煙道・煙出し部）煙道は掘り込み式と思われる。底面は緩やかに下った後にいったん立ち上がり煙出し部の掘り込みに続く。壁からの長さは1.6mで、方位はN-75°-Eである。

〈柱穴・土坑〉いずれも検出されなかった。

遺 物（第30図、写真図版26）

〈出土状況〉左袖およびベルト内から土師器片が330g出土した。小片が多い。

〈掲載遺物〉4点掲載した。23はいわゆる赤焼きの壺で、底径が小さいのが目立つ。24は砂底の土師器壺の底部、25・26は須恵器の壺類の破片である。

時 期 出土遺物から、平安時代（9世紀後半～10世紀はじめ）に属するものと思われる。

R A 020（堅穴住居跡）

遺 構（第22図、写真図版18）

〈位置・検出状況〉E区南西隅の一H15 x グリッド付近に位置し、カマドの本体部・煙道・煙出し部が確認された。第3次調査で検出されたRA04堅穴住居跡に付属するカマド施設かと思われたが、住居プランとの軸のずれが大きいため、別遺構として報告する。結果的には、煙道の両側に並んでいた礫の存在が検出の決め手となった。

〈重複関係〉遺構東側でRE009と重複している。重複部分の断面観察により、本遺構のほうが新しいことが確認された。この周辺には擾乱も多く、左袖および燃焼部焼上の一帯は失われている。

〈規模〉〈平面形〉〈壁の高さ・状態〉〈埋土・堆積状況〉いずれも不明である。

〈床面〉基盤となる礫が露出する。床面下まで及ぶ擾乱が著しい。

〈カマド〉本体と煙道・煙出しが残存するが前述のとおり擾乱を受ける。北東壁に設けられている。

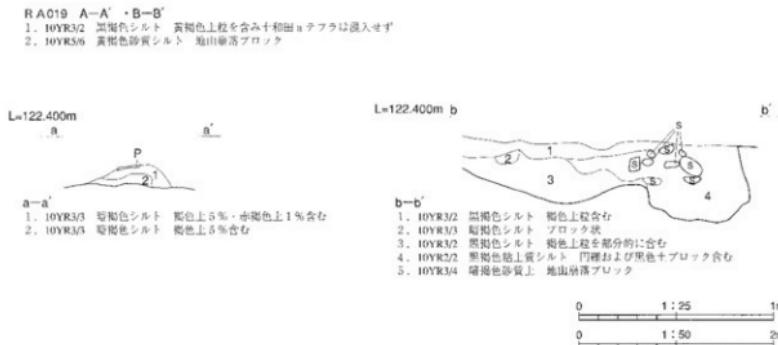
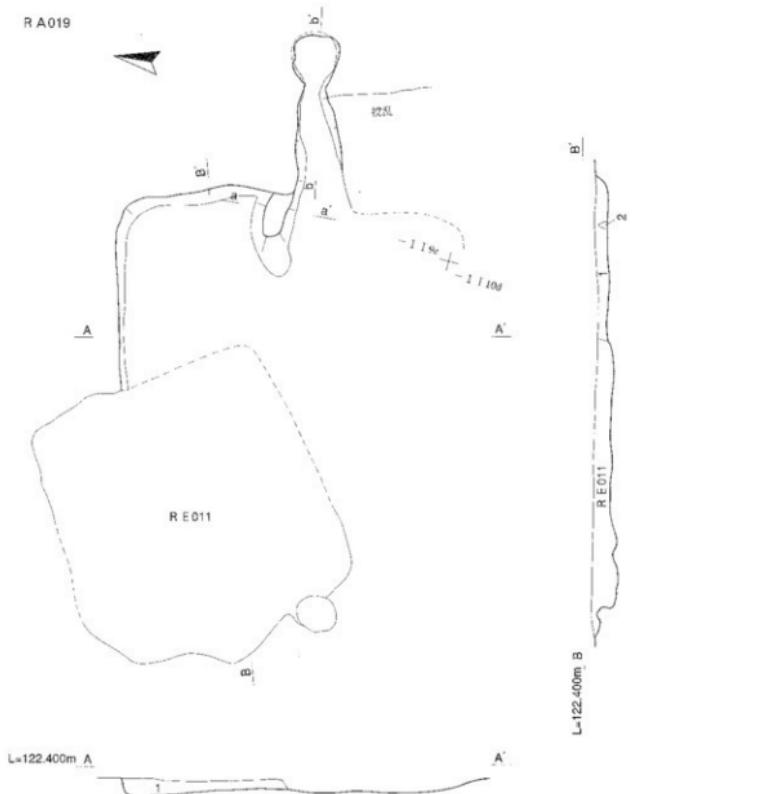
（本体部）燃焼部焼土は直徑30cm弱、厚さは最大で6cmである。

（煙道・煙出し部）掘り込み式の煙道で、住居の壁側30cmほどには煙道の両側に数個ずつ礫が配される。埋土は、焼土粒を含む黒褐色～暗褐色土が主体で、底面は煙出しに向かって緩やかに下り、煙出しへオーバーハングして立ち上がる。長さは約1.5m、煙道方位はN-22°-Wである。

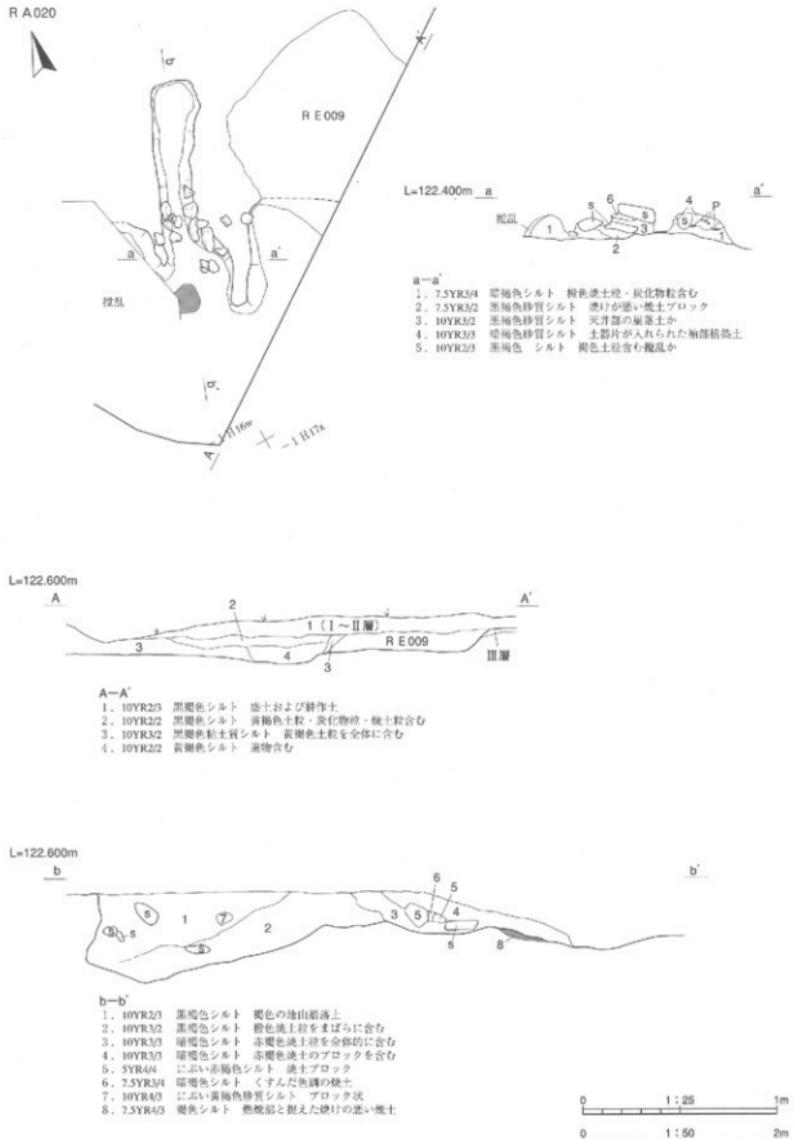
〈柱穴・土坑〉いずれも確認されなかった。

遺 物（第30・31図、写真図版26）

〈出土状況〉カマド本体および煙道内から土師器の壺・壺1.8kg、須恵器の破片が115g出土した。



第21図 E区の遺構(4)(RA019)



第22図 E区の遺構（5）（RA020）

〈掲載遺物〉16点掲載した。27~36は土師器坏で、31までは内面が黒色処理されているものである。30・31の底部および体部下端には再調整が施される。30の体部下端には紐状の粘土が全周し、高台を付けるための下処理かと思われる。31の底部には高台風にえぐられた跡を残す。32~36はいわゆる赤焼きの坏で、36は底径が小さめである。38・39はロクロ成形の壺、40は須恵器坏、41はカマド内から出土した焼成を受けた粘土塊で、この他に数点見つかっている。42は刀子で刃部の先端を欠いている。

時期 出土遺物から、平安時代（9世紀後半～10世紀はじめ）に属するものと思われる。

R B009（掘立柱建物跡）

遺構（第23図、写真図版22）

〈位置・重複関係〉E区の西側、-117f~-119kグリッドに位置する。II b層で検出した。RA017・018堅穴住居跡と重複し、いずれの遺構よりも新しい。

〈平面形式・方向・規模〉桁行3間以上、梁間1間の掘立柱建物跡である。7個の柱穴を使用した。桁行の方向がN-55°-Wの東西棟である。

〈柱間寸法〉210cm（7尺）を使用している。

遺物 遺物の出土はない。

時期 柱穴の掘り方が近世のものより一回り大きいことと、柱穴の埋土の様相から古代のものと推測される。RA017・018堅穴住居跡を切っているので、10世紀以降に位置づけられる。

R B010（掘立柱建物跡）

遺構（第23図）

〈位置・重複関係〉E区の中央、-111d~-113gグリッドに位置する。II b層で検出した。RA010堅穴住居跡と重複し、それを切っている。

〈平面形式・方向・規模〉桁行2間、梁間1間以上の掘立柱建物跡である。5個の柱穴を使用した。桁行の方向がN-80°-Eの東西建物である。南側は調査区外となっており、建物全体の精査を行えなかった。現状では、2×1間であるが、未調査分に桁行がもう一列あるとすれば、2×2間の総柱建物となる。

〈柱間寸法〉240cm（8尺）を使用している。

遺物 遺物の出土はない。

時期 柱穴の掘り方が近世のものより一回り大きいことと、柱穴の埋土の様相から古代のものと推測される。RE010堅穴状遺構を切っているので、10世紀以降に位置づけられる。

R E005（住居状遺構）

遺構（第24図、写真図版19）

〈位置・検出状況〉-115aグリッド付近にあり、II b層で黒褐色土のプランを確認した。

〈重複関係〉認められない。〈規模〉2.15×0.90m〈平面形〉方形基調と思われる。

〈壁の高さ・状態〉壁は25cmほどで、幾分上部は削られている。直立気味に立ち上がる。

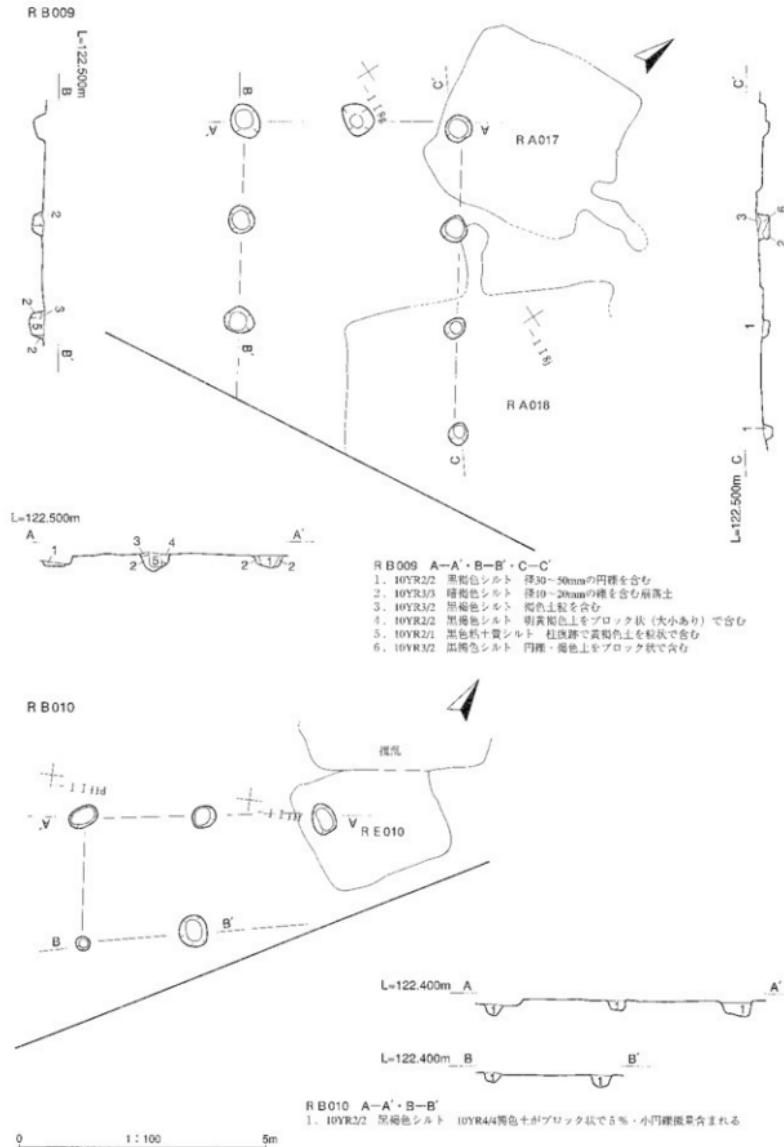
〈埋土・堆積状況〉黒褐色土が主体の単層であったと思われる。

〈床面〉Ⅲ層を床面とする。これも基盤となる小礫が露出する。

〈柱穴・土坑〉いずれも検出されなかった。

遺物

〈出土状況〉埋土から土師器片25gが出土した。図化可能な個体はない。



第23図 E区の遺構（6）（BB009・BB0010）

時 期 出土遺物などから、平安時代（9世紀後半～10世紀はじめ）に属するものと思われる。

R E 006（住居状遺構）

遺 構（第24図、写真図版19）

〈位置・検出状況〉－1 H 10w グリッド付近にあり、北西隅は調査区外にある。II b層で黒褐色土の長方形プランを確認した。

〈重複関係〉R E 007と重複するが、本遺構が新しい。

〈規模〉2.73×3.18m（平面形）長方形と思われる。

〈壁の高さ・状態〉11～16cmで、緩やかに立ち上がる。

〈埋土・堆積状況〉褐色土小ブロックを含む黒褐色土が主体となる自然堆積層である。

〈床面〉II b層を床面とし、ほぼ平坦である。

〈柱穴・土坑〉PP 5は伴うものと判断した。土坑は確認されない。

遺 物（第31図、写真図版26）

〈出土状況〉埋土から土師器坏・甕片が1.1kg、須恵器片が84gほど出土した。

〈掲載遺物〉赤焼きの坏（43）とロクロ不使用の甕（44）の2点掲載した。

時 期 出土遺物などから、平安時代（9世紀後半～10世紀はじめ）に属するものと思われる。

R E 007（住居状遺構）

遺 構（第24図、写真図版20）

〈位置・検出状況〉E区西側の－1 H 10x グリッド付近に位置する。II b層で確認した。

〈重複関係〉本遺構の東西でR E 007、R E 008と重複するが、いずれも本遺構のほうが旧い。

〈規模〉推定2.5m×2.77m（平面形）正方形か長方形と思われる。

〈壁の高さ・状態〉5～16cmを測り、北壁・南壁とも緩やかに立ち上がる。

〈埋土・堆積状況〉暗褐色土のシルト質土を基調とし隙間に褐色土が入る。自然堆積層と思われる。

〈床面〉II b層を床面とし大きく波打つ。〈柱穴・土坑〉いずれも確認されない。

遺 物（第31図、写真図版26）

〈出土状況〉土師器の坏・甕が200g、須恵器片が150gほど出土した。

〈掲載遺物〉いわゆる赤焼きの坏（45）、ロクロ不使用の甕（46）、須恵器壺の肩部付近の破片（47）の3点掲載した。

時 期 出土遺物などから、平安時代（9世紀後半～10世紀はじめ）に属するものと思われる。

R E 008（住居状遺構）

遺 構（第24図、写真図版20）

〈位置・検出状況〉－1 H 10 y グリッド付近にある。II b層で黒褐色土の不整の方形プランを確認。

〈重複関係〉R E 007の東側で重複するが、本遺構のほうが新しい。

〈規模〉2.36×2.50m（平面形）不整形をなす。

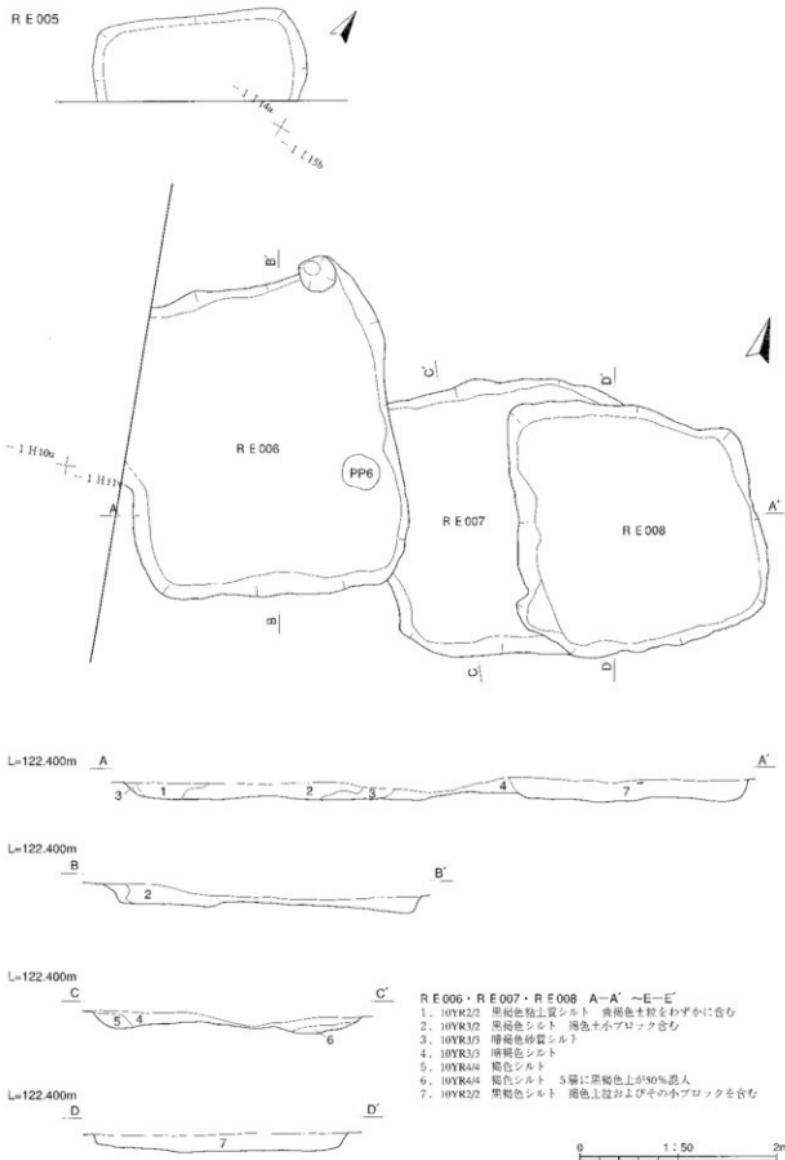
〈壁の高さ・状態〉各壁とも高さ20cm前後で、直立気味に立ち上がる。

〈埋土・堆積状況〉褐色土の小ブロックを含む黒褐色土の単層である。

〈床面〉II b層を床面とし、ほぼ平坦である。（柱穴・土坑）確認されない。

遺 物（第31・32図、写真図版27）

〈出土状況〉埋土から土師器の坏類が400g、須恵器の坏・甕類が1.5kgほど出土した。



第24図 E区の遺構 (7) (RE005・RE006・RE007・RE008)

〈掲載遺物〉8点掲載した。48・49は土師器壺の底部破片で、48は内面が黒色処理されるもの。50・51は須恵器壺の破片、52は須恵器壺の口縁部、53～55は大甕類の破片である。

時期 出土遺物から、平安時代（9世紀後半～10世紀はじめ）に属するものと思われる。

R E 009（住居状遺構）

遺構（第25図、写真図版21）

〈位置・検出状況〉E区南西隅の一1 H15xと15yグリッドに跨る。ほぼ南側半分は調査区外に延びているため、全体規模等は不明である。

〈重複関係〉本遺構の西側とR A020が重複するが、前者が後後に切られている。

〈規模〉？×2.00m前後（平面形）方形基調か。

〈壁の高さ・状態〉高さは16～18cmで、いずれも直立気味に立ち上がる。

〈埋土・堆積状況〉円礫を含む黒褐色土と壁際に堆積する暗褐色土からなる自然堆積層である。

〈床面〉II b層を床面とし平坦である。（柱穴・土坑）確認されない。

遺物

〈出土状況〉埋土から土師器片が40g出土しただけで、須恵器は出土していない。

〈掲載遺物〉なし。

時期 重複関係などから、平安時代（9世紀後半～10世紀はじめ）に属するものと思われるが、出土遺物が少ないため、詳細な時期は不明である。

R E 010（住居状遺構）

遺構（第25図、写真図版21）

〈位置・検出状況〉E区中央南側の一1 I 10gグリッド付近に位置する。暗褐色土の方形プランで確認できた。

〈重複関係〉本遺構の北隅が搅乱を受けている。

〈規模〉2.39×2.67m（平面形）不整な長方形を呈する。

〈壁の高さ・状態〉数cm～10cm程度しか残っていない。

〈埋土・堆積状況〉暗褐色土が主体で、一部南東壁側には黒褐色土が堆積する。

〈床面〉II b層を床面とし平坦である。（柱穴・土坑）確認されない。

遺物（第32図、写真図版27）

〈出土状況〉埋土から土師器片が200g、須恵器は56g出土した。

〈掲載遺物〉3点掲載した。56・57はいわゆる赤焼きの壺で、いずれも底部を欠く。58は刀子の先端部か？

時期 出土遺物から、平安時代（9世紀後半～10世紀はじめ）に属するものと思われる。

R E 011（住居状遺構）

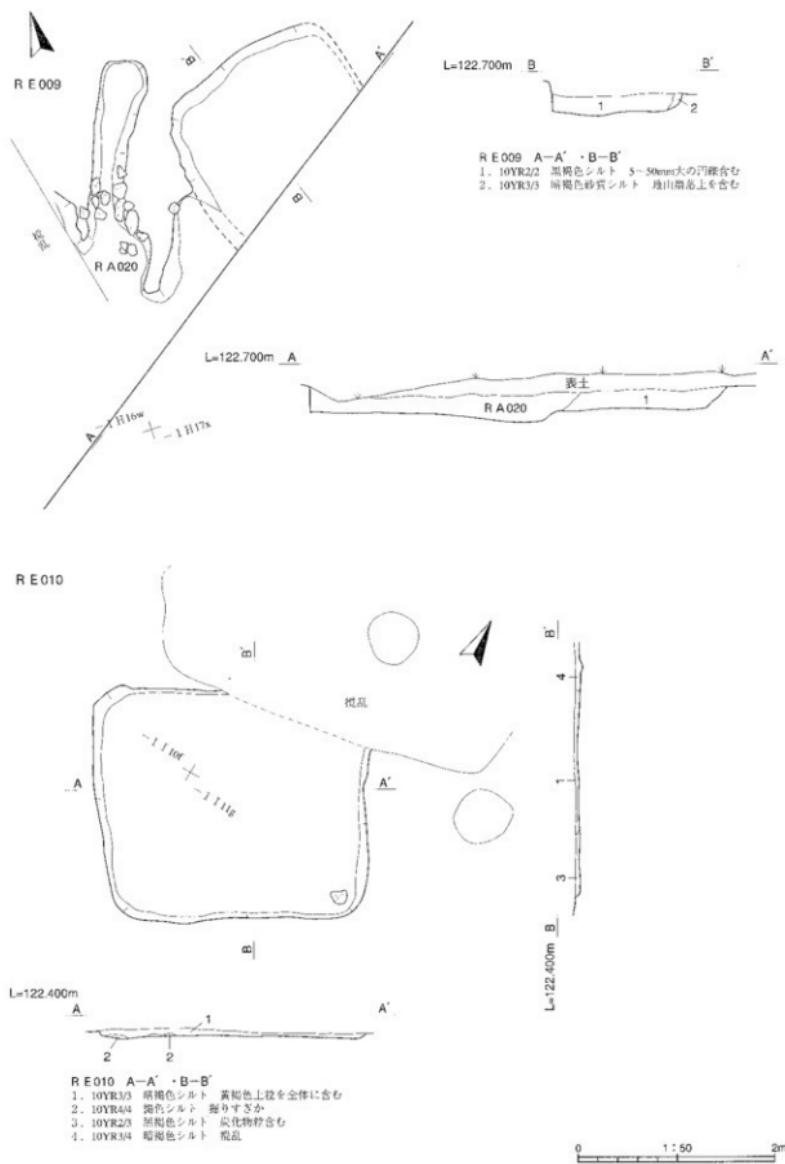
遺構（第26図、写真図版22）

〈位置・検出状況〉E区中央北西寄りの一1 I 8cグリッド付近に位置する。黒褐色土の不整形プランで確認した。

〈重複関係〉R A019と重複するが、本遺構の方が新しい。南西壁・北西壁に搅乱が見られる。

〈規模〉2.73×2.77m（平面形）不整方形（壁の高さ・状態）5cm～25cmを測る。

〈埋土・堆積状況〉2枚の黒褐色土からなる。上位のそれには十和田aテフラの小ブロックを含む。



第25図 E区の遺構（8）（RE009・RE010）

〈床面〉 II b 層を床面とするが、大きく波打っている。〈柱穴・土坑〉確認されない。

遺 物

〈出土状況〉 墓土から土師器片が100g弱出土した。須恵器は出土していない。

〈掲載遺物〉なし。

時 期 周辺の遺構のあり方から、他の遺構群と同様に平安時代（9世紀後半～10世紀はじめ）に属すると思われるが、詳細な時期は不明である。

R D084 (土坑)

遺 構 (第26図、写真図版23)

〈位置・検出状況〉 E 区東端、-1 I 6 1・7 1 グリッドに位置する。III層で検出した。

〈重複関係〉 精査した範囲では重複はない。

〈規模〉 直径3.5mほどか？ 〈深さ〉 10cm 〈平・断面形〉 円形か？・皿状

〈埋土・堆積状況〉 最上位は暗褐色土、上部から下位は黄褐色土と黒色土を含む黒褐色土からなる。

〈遺構の性格〉 不明であるが、近・現代の擾乱の可能性が高い。

遺 物 出土遺物なし。

時 期 詳細な時期は不明である。

R D085 (土坑)

遺 構 (第26図、写真図版23)

〈位置・検出状況〉 E 区1号土坑の北側、-1 I 5 k グリッドに位置する。III層で検出した。

〈重複関係〉 なし 〈規模〉 63×66cm 〈深さ〉 20cm 〈平・断面形〉 円形・皿状

〈埋土・堆積状況〉 小碟を含む黒褐色土の単層である。〈遺構の性格〉 不明である。

遺 物 出土遺物なし。

時 期 時期は不明である。

R D086 (土坑)

遺 構 (第26図、写真図版23)

〈位置・検出状況〉 -1 I 13 a グリッド付近にあり、II b 層・III層で検出した。

〈重複関係〉 なし 〈規模〉 1.15×1.50m 〈深さ〉 22cm 〈平・断面形〉 不整円形・皿状

〈埋土・堆積状況〉 小碟を含む黒褐色土の単層である。〈遺構の性格〉 不明である。

遺 物 (第32図、写真図版27)

〈出土状況〉 墓土から土師器片が50g、須恵器は24g出土した。小片がほとんどであった。

〈掲載遺物〉 59は須恵器の壺の口縁部である。図化できたこの1点のみ掲載した。

時 期 時期は不明である。

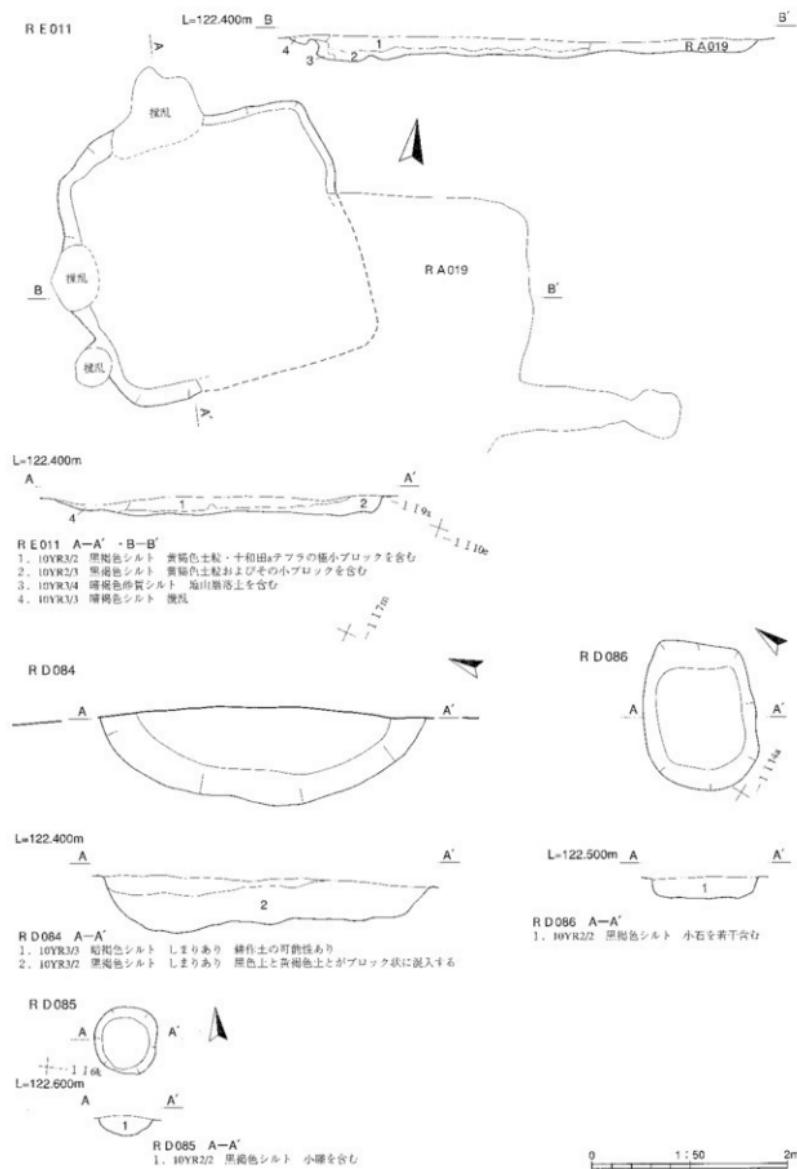
R G039 (溝跡)

遺 構 (第27図、写真図版24)

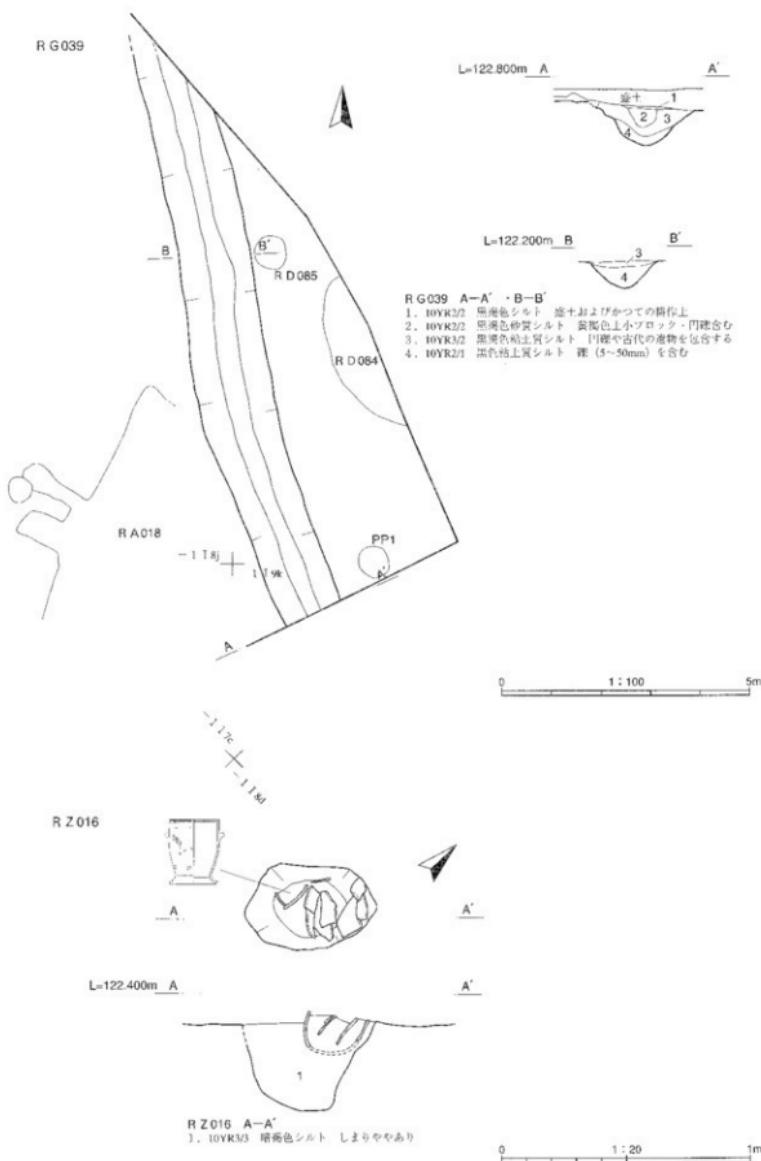
〈位置・検出状況〉 E 区東側をほぼ南北に走る溝跡で、いずれも調査区域外まで延びている。-1 I 3 j～-1 1 9 1 グリッドにかけてある。II b 層下面あるいはIII層の上面で黒褐色土のプランで確認した。

〈重複関係〉 RA018と重複するが、本遺構の方が新しい。

〈規模〉 確認できた長さ11.5m、上幅1.4～1.5m、下幅0.30～0.45m 〈深さ〉 0.50～0.80cm



第26図 E区の遺構 (9) (RE011・RD084・RD085・RD086)



第27図 E区の遺構 (10) (RG039・RZ016)

〈断面形〉 U字状を呈する。掘り込みはしっかりとしている。

〈埋土・堆積状況〉 上位から中位は3枚の黒褐色土、下位は小砾を含む黒色土からなる。3層めの黒褐色土に古代の遺物を含んでいる。自然堆積の様相を呈している。

〈遺構の性格〉 わざかに水が流れた痕跡を残すが、水路というよりは区画溝の可能性のほうが高いように思う。精査した範囲が狭いため全体が予想できず、詳細は不明である。

遺 物（第32図、写真図版27）

〈出土状況〉 土師器片は640g、須恵器片は90g出土した。層位は前述のとおりである。

〈掲載遺物〉 6点掲載した。60は内面黒色処理された土師器壺の底部で、外面がヘラ状の工具で再調整されるもの。61はロクロ成形された壺の口縁部、62は体部が張る土師器壺の口縁部破片、63は土師器壺の底部で粗い砂が外面に付着している。64は須恵器壺、65は同じく壺類である。

時 期 出土遺物から、平安時代（9世紀後半～10世紀はじめ）前半に機能した溝と思われる。

R Z 016（土器埋設遺構）

遺 構（第27図、写真図版24）

〈位置・検出状況〉 E区中央北側の一1 I 8 dグリッドに位置し、新3号住居跡・新7号住居状遺構のすぐ北側に隣接する。II b層上面で、同一個体と思われる土器破片が集中して見つかった。重複する他の遺構はない。

〈規模など〉 当初は古代の土器埋設遺構として精査していたが、土坑の上部に埋め込まれたものであることが判明した。土坑の規模は35×53cmの楕円形で、深さは40cm前後を測る。埋土は、暗褐色シルト質土の単層で他に混入するものはなかった。土器は、この掘り込み中に数片の破片が散乱する形で見つかった。ロクロ成形の無底式の壺であった。

〈遺構の性格〉 壺という特殊な遺物が出土しており、単なる土坑とは様子が異なると思われるが、詳細は不明である。

遺 物（第33図、写真図版27）

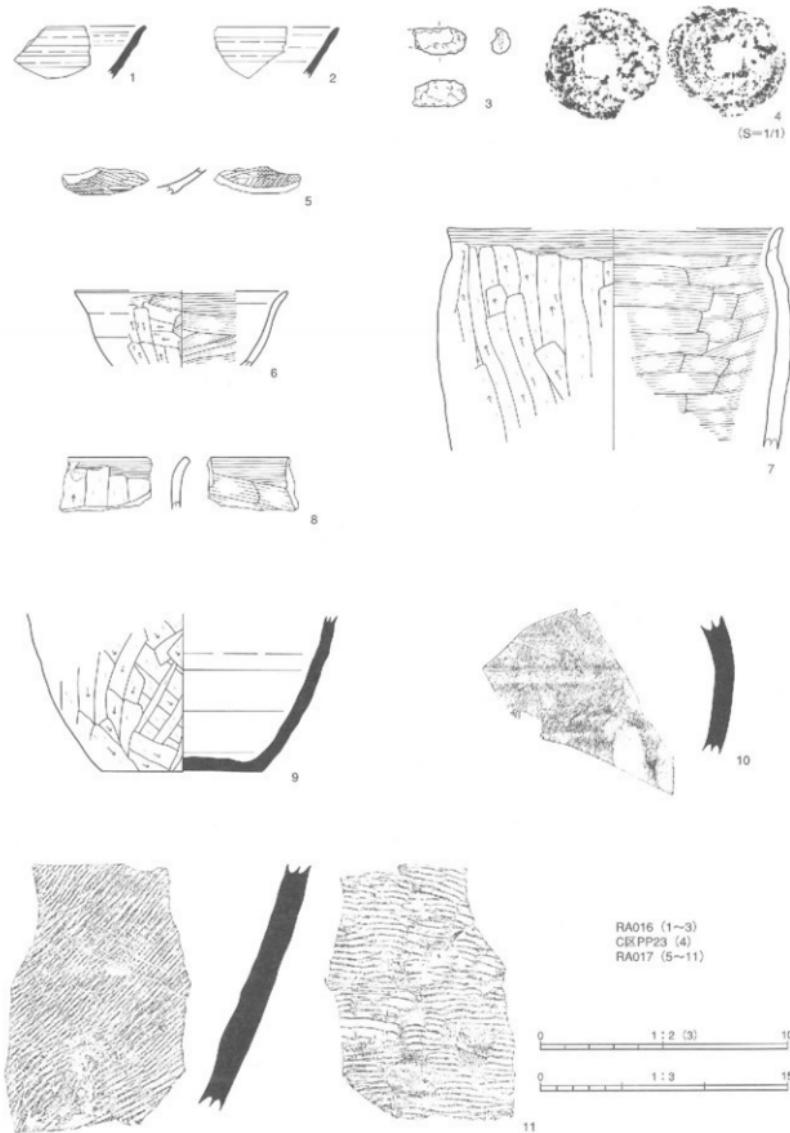
66はロクロ成形の無底式壺で、通常の口縁部を下側にして使用したものと思われる。止めの役目を持つ把手状の突起が2つ付くが、一方を欠く。上部方向に少し傾く形状の把手である。内面には桟木の痕跡が4ないし5箇所に認められ、それらと同じ高さには焼成後に開けられた直径1cmほどの孔が見られる。外面には、ロクロ成形後のヘラケズリ調整が観察される部分がある。

時 期 土器の特徴から、平安時代（9世紀後半～10世紀はじめ）前半に属するものと思われる。

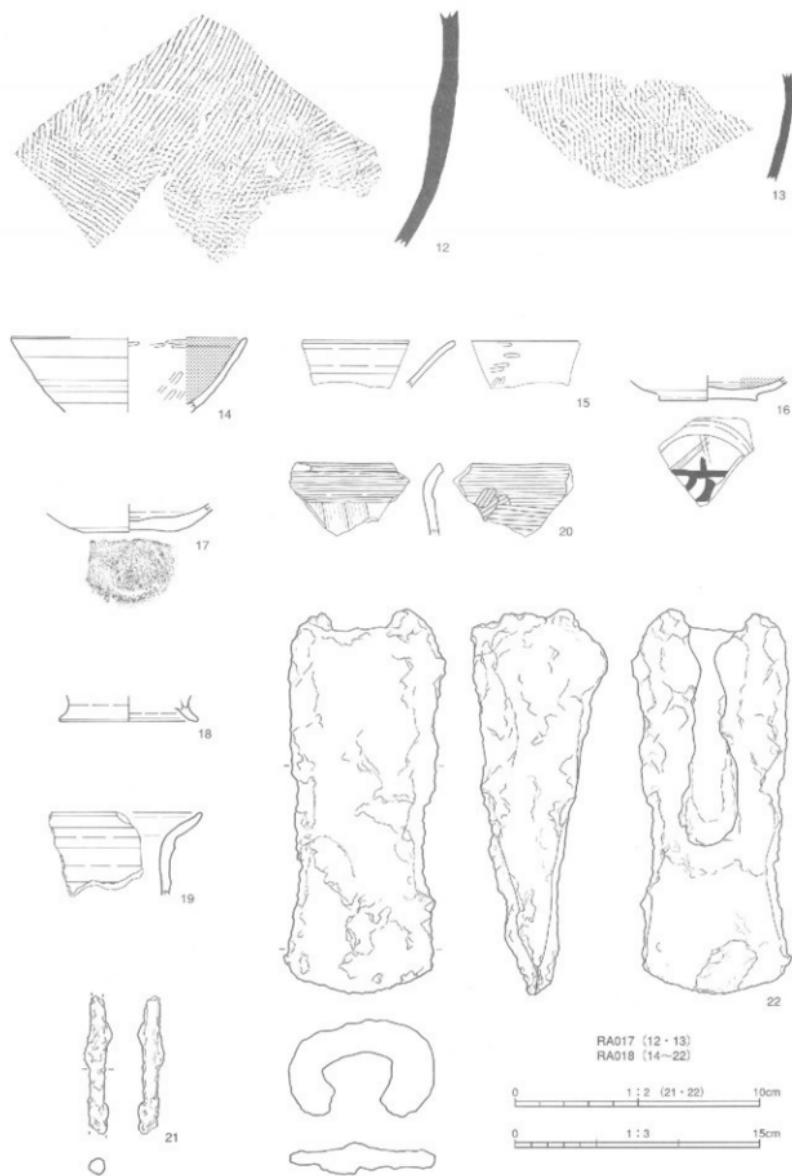
6 遺構外出土遺物（第33・34図、写真図版27・28）

遺構外から出土した遺物の総量は、当センターの遺物収納用小コンテナ（容量：14ℓ）1箱弱である。そのほとんどは平安時代の土器片で、土師器は1.5kg、須恵器は1.3kgほど出土している。この他には、平安時代のカマドから出土した焼成粘土塊や、現代の陶磁器片・金属製品（種類が不明のごく新しい鉄製品）、銭貨（寛永通寶）4枚などがある。以下に掲載した遺物について記す。

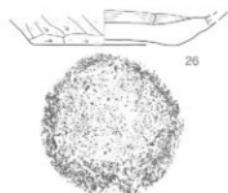
67～72は土師器で、67・69はいわゆる赤焼きの壺である。68は内面が黒色処理される壺、70は胎土から判断して、須恵器としての焼き上がりを目指したが結果として還元不足となった製品か。71・72はロクロ不使用の壺である。73～75は須恵器で73は壺、74は壺の底部破片か？75は大壺の体部破片と思われるもの。76・77は石製品で、前者は4面が使われた砥石、77は右臼の上臼の欠損品である。78～80はいずれも「寛永通寶」であるが、79・80は銘が不明瞭である。



第28図 遺構内出土遺物（1）

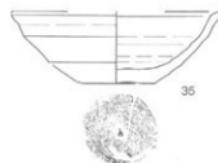
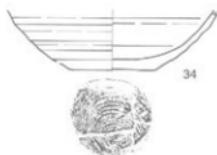
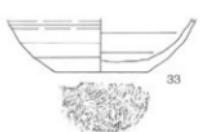
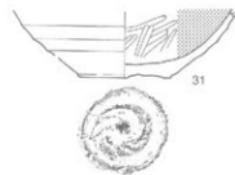
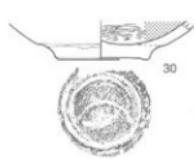
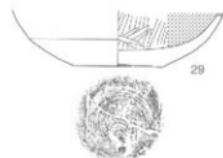
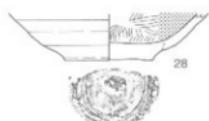
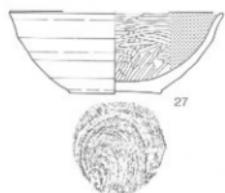


第29図 遺構内出土遺物（2）

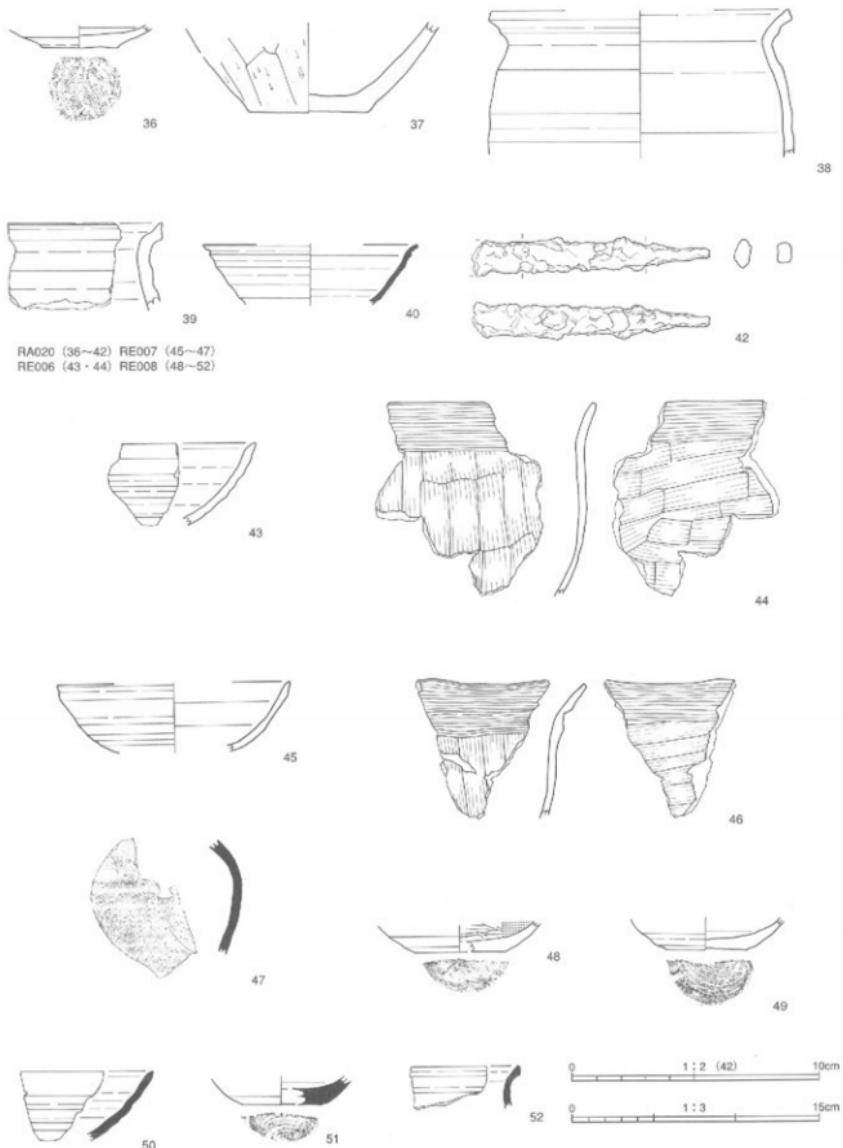


RA019 (23~26)
RA020 (27~35)

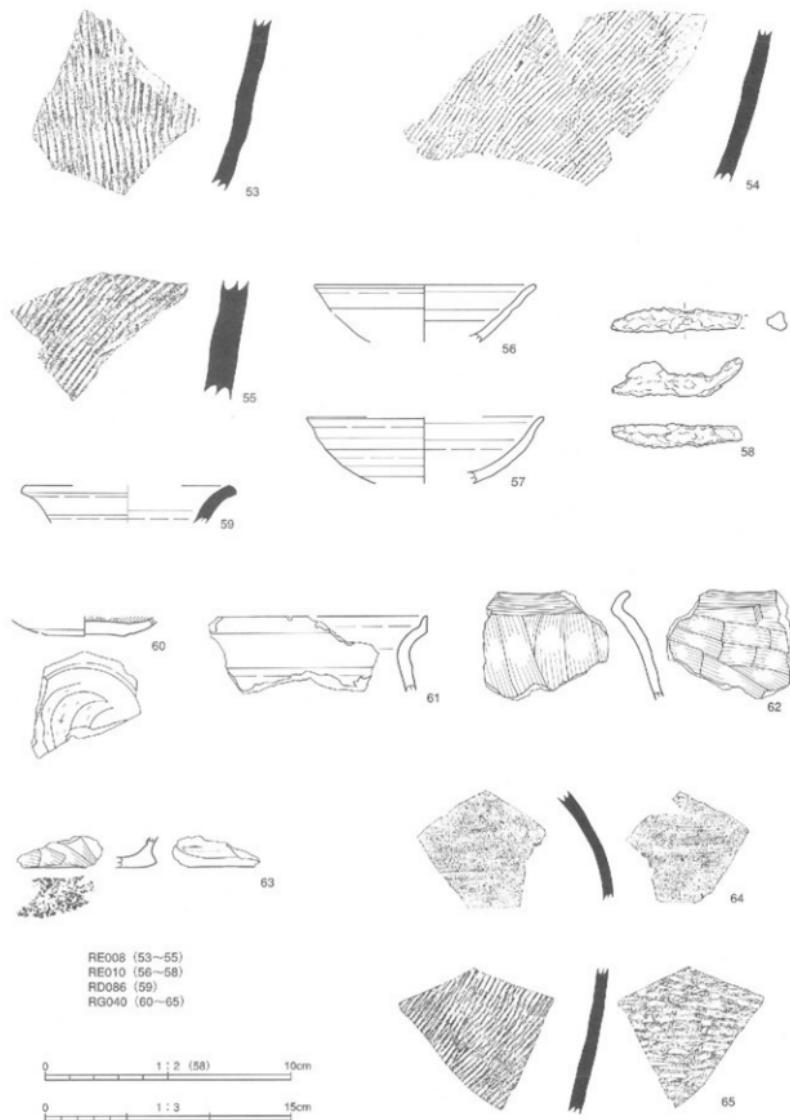
0 1 : 3 15cm



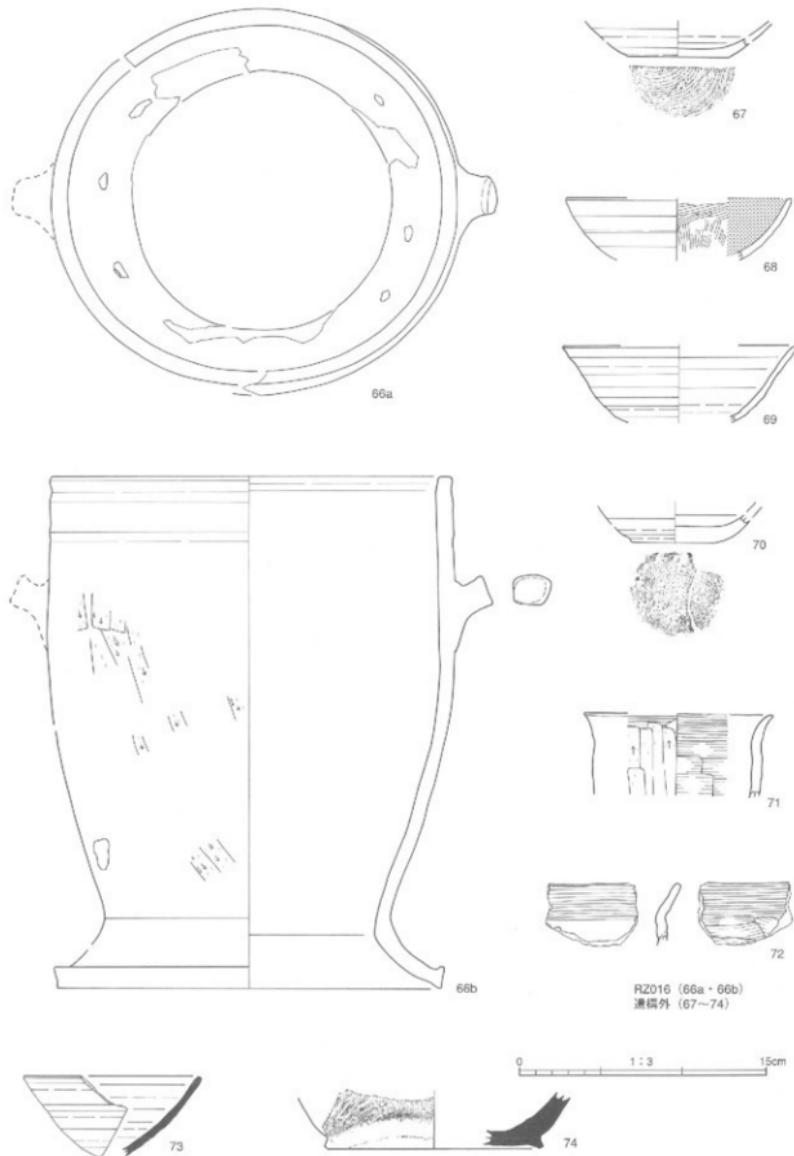
第30図 遺構内出土遺物 (3)



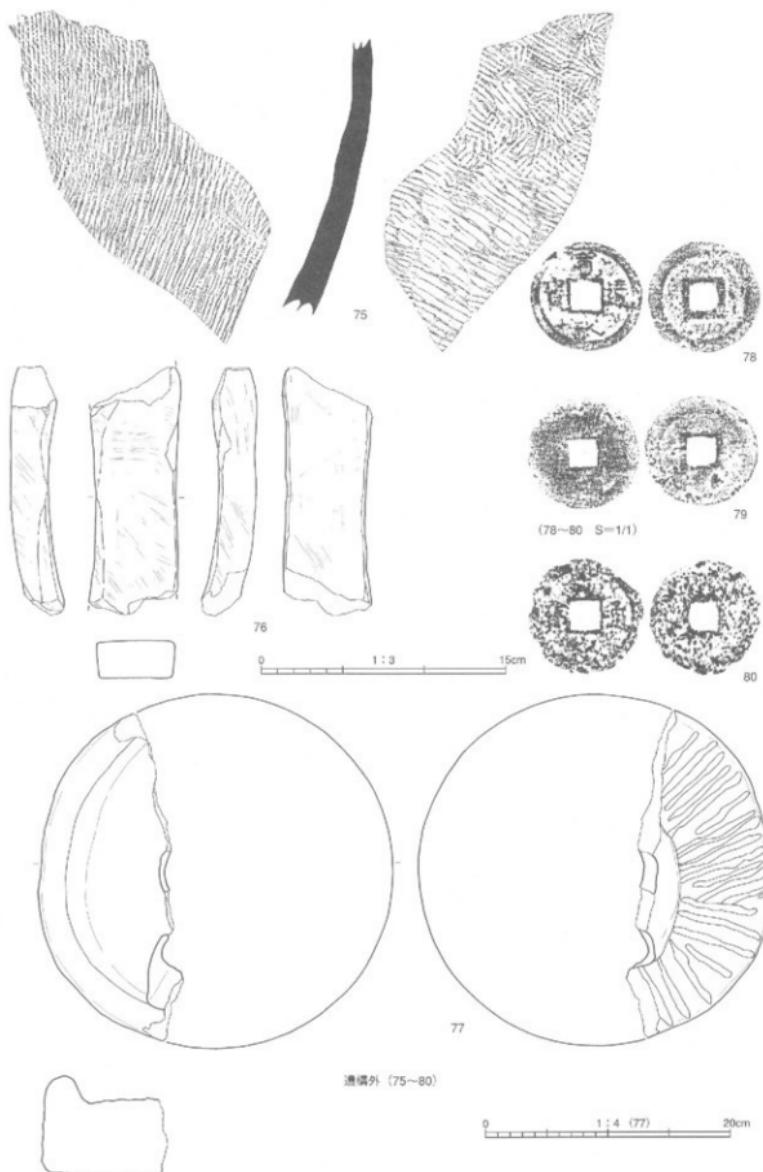
第31図 遺構内出土遺物（4）



第32図 遺構内出土遺物（5）



第33図 遺構内出土遺物（6）・遺構外出土遺物（1）



第34図 遺構外出土遺物（2）

表2 遺物観察表

番号	遺物名	出土地点	種類	基準	外因調整(口・体部)	内因調整(口・体部)	口径	底径	器高	底面	< >は現存値、-は推定値			
											横	縦	厚	重
1 RA016	カマド内	須恵器	环	ロクロ／ロクロ	ロクロ／ロクロ				<3.2>					
2 RA016	カマド～排出	須恵器	环	ロクロ／ロクロ	ロクロ／ロクロ				<3.1>					
3 RA016	雄蕊中央底面	鉄製品	刀子?	長さ(2.2) cm 幅0.1cm 厚0.8cm 重量1.60g										
4 CLB923	壁上	鐵 貨	「寛永通寶」	直徑2.4cm 重量(1.63) g										
5 RA017	壁上	土師器	环	「ヘラミガキ」	「ヘラミガキ」				<1.7>					
6 RA017	カマド周辺	土師器	环	「ヨコナデヘルナダ」	「ヨコナデヘルナダ」	-43			<4.6>					
7 RA017	カマド周辺	土師器	环	「ヨコナデヘルケズリ」	「ヨコナデヘルナダ」	-20.2			<13.5>					
8 RA017	カマド左	土師器	环	「ヨコナデヘルナダ」	「ヨコナデヘルナダ」				<3.5>					
9 RA017	壁上	須恵器	环	「ヘラケズリ」	「ロクロ」				-9.7	<9.6>				
10 RA017	壁上	須恵器	環?	「ヨコナデヘルケズリ」	「ロクロ」+「ナダ」									
11 RA017	右前内	須恵器	大甕	「タキメ」	「当其其瓶」									
12 RA017	壁上・土器上	須恵器	大甕	「タキメ」										
13 RA017	安堵・カマド内	須恵器	甕	「タキメ」										
14 RA018	床面	土師器	环	「ロクロ／ロクロ」	「ヘラミガキ／ヘラミガキ」	-14.2			<4.6>					
15 RA018	床面	土師器	环	「ロクロ／ロクロ」	「ヘラミガキ？」				<2.9>					
16 RA018	運送内	土師器	环	「ロクロ」	「ヘラミガキ」	-6			<1.5>					
17 RA018	土器上	土師器	环	「ロクロ」	「ロクロ」				5.4	<1.7>				
18 RA018	床面	土師器	环	「ロクロ」	「ロクロ」				-8.4	<1.6>				
19 RA018	床面	土師器	甕	「ロクロ／ロクロ」	「ロクロ／ロクロ」				<5.1>					
20 RA018	板出向	土師器	甕	「ヨコナデヘルナダ」	「ヨコナデヘルメ」				<4.4>					
21 RA018	床面	鉄製品	角鉗	長さ(5.7) cm 幅0.7cm 厚さ0.7cm 重量5.88g										
22 RA018	床面	鉄製品	鉄鉗	長さ15.7cm 幅6.2cm 幅5.3～5.4cm 重量793.47g										
23 RA019	ベルト埋土	土師器	环	「ロクロ／ロクロ」	「ロクロ／ロクロ」	14.1	-4.7	4.6	<4.6>	赤焼き				
24 RA019	カマド左袖	土師器	甕	「ヘラケズリ」	「ヘルナデ」				8.8	<2.1>	赤底			
25 RA019	鍵道～板出向土	須恵器	大甕	「タキメ」	「当其のへこみ」									
26 RA019	ベルト埋土	須恵器	大甕	「タキメ」										
27 RA020	カマド周辺	土師器	环	「ロクロ／ロクロ」	「ヘラミガキ／ヘラミガキ」	-13	5.6	5	<1.5>	内里				
28 RA020	カマド周辺	土師器	环	「ロクロ」	「ヘラミガキ」				5.4	<2.9>	内里			
29 RA020	カマド内	土師器	环	「ロクロ」	「ヘラミガキ」				5.4	<3.4>	内里			
30 RA020	カマド内	土師器	环	「ロクロ」	「ヘラミガキ」				5.7	<2.4>	青調整			
31 RA020	石油内	土師器	环	「ロクロ」	「ヘラミガキ」				5.6	<4>	青調整			
32 RA020	石油内	土師器	环	「ロクロ／ロクロ」	「ロクロ／ロクロ」				<4.4>					
33 RA020	カマド・石室	土師器	环	「ロクロ」	「ロクロ」				5.5	<3.3>	内里			
34 RA020	カマド周辺	土師器	环	「ロクロ」	「ロクロ」				5	<3.7>	内里			
35 RA020	カマド周辺・石室	土師器	环	「ロクロ／ロクロ」	「ロクロ／ロクロ」	-12.7	4.6	4.4	<4.6>	置元不足、底径小				
36 RA020	カマド周辺	土師器	环	「ロクロ」	「ヘラケズリ」				4.4	<1.3>	赤焼、底径小			
37 RA020	右側内	土師器	甕	「ヘラケズリ」	「?」				7.2	<5.5>	削小修理多い			
38 RA020	カマド天井部	土師器	甕	「ロクロ／ロクロ」	「ロクロ／ロクロ」	-18			<8.8>					
39 RA020	カマド周辺	土師器	甕	「ロクロ」	「ロクロ」				<5.3>					
40 RA020	カマド周辺	須恵器	环	「ロクロ／ロクロ」	「ロクロ／ロクロ」	-13			<3.7>					
41 RA020	カマド内	粘土塊												表面赤味がかる
42 RA020	カマド天井部	鉄製品	刀子	長さ(9.6) cm 幅0.4～1.3cm 厚さ0.6cm 重量15.14g										
43 RE006	窓土	土師器	甕	「ロクロ／ロクロ」	「ロクロ／ロクロ」				<5.8>					
44 RE006	窓土	土師器	甕	「ヨコナデヘルナダ」	「ヨコナデヘルナダ」				<11.9>					

番号	遺構名	出土地点	種類	器種	外周調整(口/底部)	内面調整(口/底部)	口径	底径	高さ	底面	備考
45	RE007	埋土	土師器	环	ロクロ/ロクロ	ロクロ/ロクロ	-4.1	<4.2>			赤焼き
46	RE007	埋土	土師器	甕	ヨコナヂ/ヘラナヂ	ヨコナヂ/ヘラナヂ		<8.2>			
47	RH007	埋土	須恵器	壺	ロクロ	ロクロ					
48	RH008	ベルト埋土	土師器	环	ロクロ	ヘルミガキ		-5.4	<1.7>	留脂名	内黒
49	RE008	埋土	土師器	环	ロクロ	ロクロ		4.9	<2.1>	留脂名	赤焼き
50	RE008	埋土	須恵器	环	ロクロ/ロクロ	ロクロ/ロクロ			<4.2>		
51	RE008	埋土	須恵器	环	ロクロ	ロクロ		-5	<1.8>	留脂名	
52	RH008	埋土	須恵器	甕	ロクロ	ロクロ			<2.6>		
53	RH008	ベルト埋土	須恵器	大甕	タタキメ	当て具のへこみ					
54	RH008	埋土・検出面	須恵器	大甕	タタキメ	当て具のへこみ					
55	RE010	埋土	須恵器	大甕	タタキメ	当て具のへこみ					
56	RE010	床面・検出面	土師器	环	ロクロ/ロクロ	ロクロ/ロクロ	13.3		<3.5>		赤焼き
57	RE010	床面	土師器	环	ロクロ/ロクロ	ロクロ/ロクロ	-14.3		<4.1>		赤焼き
58	RE010	床面	鉄製品	刀子	長さ(5.3)cm 幅1.4cm 厚0.7cm 重量6.50g						
59	RD086	廻土	須恵器	甕	ロクロ	ロクロ	-43		<2.3>		
60	RG040	埋土	土師器	环	ロクロ	ヘルミガキ		4.8	<0.9>	青銅鏡 内里	
61	RG040	埋土	土師器	甕	ロクロ	ロクロ			<4.6>		
62	RC040	埋土	土師器	甕	ヨコナヂ/ヘラナヂ	ヨコナヂ/ヘラナヂ			<6.6>		
63	RG040	埋土	土師器	甕	ヘルナヂ	?			<1.9>	跡底	
64	RG040	埋土	須恵器	甕	ロクロ	ロクロ					
65	RG040	検出面	須恵器	甕	タタキメ	当て具底					
66	RZ016	上部器	甕	ロクロ/ロクロ/ヘルナヂ	ロクロ/ロクロ	ロクロ	24.3	-23.2	31.3	ガリ付、留脂名付	
67	C区 I層	土師器	环	ロクロ	ロクロ	ロクロ		6.2	<2.1>	赤焼き	
68	E北端 I層	土師器	环	ロクロ/ロクロ	ヘルミガキ/ヘルミガキ	ロクロ	-13.6		<3.8>	内黒	
69	E北端 II層	土師器	环	ロクロ/ロクロ	ロクロ/ロクロ	ロクロ/ロクロ	-14.2		<4.7>	赤焼き	
70	E北端 II層	土師器	环	ロクロ	ロクロ	ロクロ		5.4	<2.2>	留脂名	遺元不足?
71	E北端 II層	土師器	甕	ヨコナヂ/ヘルナヂ	ヨコナヂ/ナヂ	ヨコナヂ/ナヂ	-11.2		<5.2>		
72	E北端 I層	土師器	甕	ヨコナヂ/?	ヨコナヂ/ヘルナヂ	ロクロ/ロクロ			<3.8>		
73	E北端 棚	須恵器	环	ロクロ/ロクロ	ロクロ/ロクロ	ロクロ/ロクロ			<4.9>		
74	E北端 棚	須恵器	甕	タタキメ	タタキメ	ロクロ		-13.2	<3.1>		
75	E北端 I層	須恵器	大甕	タタキメ	当て具底	ロクロ					
76	E北端 I層	石製品	砾石	長さ52cm 幅47cm 厚さ23cm 重量540.52g. 砂灰岩 奥羽山脈 新生代新第三紀	4面使用						
77	C区 大甕	石製品	石臼	重量3310.0g. 安山岩 奥羽山脈 新生代第三紀							
78	C区 大甕	検出面	鐵貨	「寛永通寶」 直径2.3cm 重量2.51g							
79	D区 西側	検出面	鐵貨	「寛永通寶」 直径2.3cm 重量1.57g							
80	RA007-5	検出面	鐵貨	「寛永通寶」 直径2.3cm 重量3.32g							

V まとめ

1 遺構

(1) 検出遺構の概要

今回の調査では、各区から下表に示した遺構が確認された。

	A区	B区	C区	D区	E区
検出遺構	陥し穴状溝 1基 3条	土坑 1基	住居跡 1棟 掘立柱建物跡 1棟 陥し穴状 3基 土坑 3基 溝跡 2条	陥し穴状 3基 土坑 2基 (うち近世墓 1基)	住居跡 4棟 住居状 7棟 掘立柱建物跡 2棟 土坑 3基 溝跡 1条 土器埋設遺構 1基

調査で得られた成果について列挙する。

- ① 今回の調査では、縄文時代の狩り場跡および平安時代の集落跡（9世紀後半～10世紀初）であったことが確認された。
- ② E区はかつて実施された第3次調査区の東側に隣接する区域で、前回と同様に遺構密度が高かったが、遺構の残存状況は良くなかった。
- ③ 遺構の検出状況、時期などからみて、周辺に存在する向中野館遺跡や細谷地遺跡、飯岡沢田遺跡との関連があることは明らかである。古代の集落構成を検討する際はこれらを総合的に判断する必要がある。

次に、今回検出された掘立柱建物跡についてまとめてみる。

(2) 掘立柱建物跡

今回の調査ではC区で3棟、E区で2棟の掘立柱建物跡を検出した。前者は近世に、後者は平安時代に属する。ここでは平安時代のものについて、周辺の遺跡で検出されたものを含めて若干検討する。飯岡才川遺跡の周辺はいわゆる盛南開発に伴って、大規模な調査が継続的に行われており、多くの奈良・平安時代の集落が検出されている（本書II章）。これまで台太郎（12、第4図の番号と一致する。以下同じ）・本宮頬堂B（11）・野古A（20）・小幡（8）・飯岡才川（本遺跡）で掘立柱建物跡が検出されている。その他、やや範囲を広げれば盛南開発に伴うものではないが、一本松（81）・飯岡林崎II（40）・大新町遺跡（第4図幅外。零石川左岸）でも検出されている。これらをまとめたのが表1・2である。ここからどのようなことが読みとれるだろうか。

表1 飯岡川遺跡周辺の総柱の掘立柱建物

番号	遺跡名	遺構名	桁行×梁間	規模(m)	面積(m ²)	備考	時期
1	一本松	掘立柱跡	2×2	3.4×3.3	11.2		
2	飯岡才川3次	R B 002	2×2	3.4×3.4	11.6	並列する3棟のうちの1棟	9C後
3	飯岡才川3次	R B 003	2×2	3.4×3.4	11.6	並列する3棟のうちの1棟	9C後
4	飯岡才川3次	R B 004	2×2	3.3×3.2	10.6	並列する3棟のうちの1棟	9C後
5	飯岡才川3次	R B 005	2×2	3.3×3.3	10.9	R B 004と軸方向同じ	9C後
6	小幅4次	R B 007	2×2	4.4×4.4	19.4	R B 010と並ぶ	9C前
7	小幅4次	R B 010	2×2	3.6×3.5	12.6	R B 004と並ぶ	9C前
8	小幅2・4次	R B 003	3×2	5.8×3.0	17.4		9C前
9	台太郎23次	R B 029	2×2	4.6×4.4	20.2	中央に柱穴2つ	9C後
10	台太郎26次	R B 040	2×2	3.6×3.6	13.0		9C中
11	台太郎44次	R B 045	2×2	5.3×5.0	26.5		9C中
12	本宮熊堂B1次	R B 002	2×2	3.8×3.4	12.9		9C中
13	本宮熊堂B20次	R B 012	2×2	3.9×3.9	15.2		9C中
14	飯岡林崎II・3次	R B 002	2×2	3.0×3.0	9.0		9C前

表2 飯岡川遺跡周辺の側柱の掘立柱建物

番号	遺跡名	遺構名	方向	桁行×梁間	規模(m)	面積(m ²)	時期	分類	備考
1	小幅4次	R B 004	東西	2×2	5.4×5.3	28.6	9C前	B-2	
2	小幅4次	R B 005	東西	3×2	6.5×4.8	31.2	9C前	B-2	
3	小幅5次	R B 012	東西	5×2	13.5×5.8	78.3	9C前	B-1	北側木掘
4	小幅5・6次	R B 010	南北	3×2	6.5×6.0	39.0	9C後	B-1	東西二面庇
5	細谷地4次	R B 001	南北	2×1	3.2×2.9	9.3	9C後	A	
6	細谷地4次	R B 002	東西	2×2	4.2×3.8	16.0	9C後	A	平面形やや変む
7	細谷地4次	R B 004	東西	3×2	5.9×4.6	27.1	9C後	B-2	
8	本宮熊堂B1次	R B 001	東西	2×2	3.1×2.6	8.1	9C後	A	
9	本宮熊堂B13次	R B 010	東西	2×2	2.9×2.8	8.1	9C後	A	
10	本宮熊堂B13次	R B 011	東西	1×1	2.4×2.2	5.3	10C前	A	
11	野古A6次	R B 001	東西	1×1	1.8×1.8	3.2	9C後	A	
12	野古A6次	R B 002	東西	1×1	2.7×2.0	5.4	9C後	A	平面形やや変む
13	野古A15次	R B 003	東西	2×2	4.7×4.7	22.1	9C後	A	
14	飯岡林崎II・3次	R B 001	東西	2×2	3.1×2.8	8.7	9C前	A	
15	大新町4次	R B 701	南北	5×3	12.1×8.6	104.1	10C後	B-1	R B 703と建物群を構成
16	大新町4次	R B 702	東西	3×1	6.7×3.5	23.5	—	B-2	R B 701と重複
17	大新町4次	R B 703	東西	2×1	4.3×2.4	10.3	10C後	A	R B 701と建物群を構成
18	大新町21次	R B 8704	南北	2×1	3.9×2.7	10.5	—	A	
19	大新町21次	R B 8705	南北	2×1	3.6×2.4	8.6	—	A	
20	大新町21次	R B 8706	南北	1×1	2.4×2.4	5.8	—	A	

注 小幅遺跡にはR B 10(報告書での表記)。近年では盛南開発に関わる遺跡の遺構番号は3桁で表記することになり、本文ではそれにしたがっている)と表示される遺構が2つある。ひとつは、4次調査で検出された2×2間の総柱のもの、もうひとつは5・6次調査で検出された3×2間で東西2面に1間分の庇がつくものである。本文ではR B 10にふれる場合、次数を付すことで区別している。

総柱の掘立柱建物跡 これまで14棟が検出されている。時期はすべて9世紀以降のもので、8世紀にさかのぼるものは今のところ検出されていない。平面形式は小幅遺跡R B 003を除けば、すべて2×2間である。平面形も正方形もしくはそれに近いものがほとんどで、倉として使用されていたものと思われる。面積の平均は14.4m²であるが、集落の倉は20m²以下のものが多いという傾向とも合致する(山中ほか1998)。

側柱の掘立柱建物跡 これまで20棟が検出されている⁽¹⁾。総柱のものと同様、出現するのは9世紀以降で、8世紀にさかのぼるものはない。平面形式は多様で、 1×1 間のものから 5×3 間のものまである。これらはA・B-1・B-2の3つ分類できる。A類は、平面が 2×2 間 (2×1 間のものも含む)あるいは 1×1 間の正方形もので、これらの平均面積は $11.6m^2$ である。B類は、桁行が3間以上の柱間をもつもので、これらの平均面積は $47.4m^2$ である。A類は柱配置が総柱とならないものの、平面形態が正方形となること、総柱の掘立柱建物跡の平均面積と近いことから、総柱のものと同じように倉的な使われ方がされていたものと推測される。柱配置が総柱とならないのは、収納する物資の重量の違いによるのだろう。一方、B-1類は居住用と考えられる。小幅遺跡第5・6次調査で検出されたR B010の面積は $39.0m^2$ と、明らかに住まいと考えられる小幅遺跡R B012の $78.3m^2$ よりやや狭いが、2面に庇がついていることからこれも居住のための建物と考えられる。とすれば、集落遺跡で検出される $40m^2$ 前後より広い面積の掘立柱建物跡は居住用と考えられる。B-2類については桁行が3間確保されているものの、平均面積が $27.6m^2$ とB-1類に比べれば狭く、居住用とは断定できない。A類で最大の台太郎遺跡R B045の面積は $26.5m^2$ で、B-1類にはこれより狭いものがあり、これらも倉庫と考えてもよいかもしれない。

以上のことから、次の二点を確認できよう。

①集落に倉が造られるようになるのは9世紀になってからで、A類の側柱建物も倉庫とすれば、9世紀になるとほとんどの集落で倉庫が出現することになる。

②居住用の掘立柱建物が集落にみられるようになるのも、倉庫と同じように9世紀からである。ただ、住まいとしての掘立柱建物は、倉庫がすべての集落にみられるのと対照的に限られた集落でしか確認されない。しかも、同じ時期に複数の集落で建てられることはない。

これらのことからどのようなことを読みとることができるだろうか？

まず、①の点について。各集落に倉庫が出現在したということは、各集落で物資の集積・蓄積が進行したことを物語る。そして、その時期が9世紀以降で8世紀に遡らないことは、およそこの間に生産のあり方に変化がないとするならば⁽²⁾、志波城・徳丹城といった城柵の設置と関連すると考えるのは不當ではなかろう。

次に、②の点について。B-1類の側柱建物が居住用だとすると、住まいとして同じ機能を持つ堅穴住居との関係が問題となる。北上盆地における集落遺跡の分析によれば、9世紀になると堅穴住居は「小型化・均一化し、中型住居は残るが、突出した大型住居は姿を消す」といわれている（西野 1998）。この傾向は、盛南開発に伴う調査が進んだ現段階でも変わらない⁽³⁾。このように9世紀になると、大型の堅穴住居が姿を消し、住まいとしての掘立柱建物が出現する。この現象を単純に考



第35図 第3・4次調査と今次E区の遺構配置

えれば、大型住居に住んでいた者が平安時代になると掘立柱建物に住むようになると判断できるかもしれない。けれども、8世紀以前の大型の堅穴住居が各集落にまんべんなく見られるのに対し、B-1類の掘立柱建物はどの集落でも建てられていたわけではなく、また同時に複数の集落で建てられることはなかったようである。さらに、こうした掘立柱建物が建てられるのは9世紀になって新たに形成され始めた集落だけで、8世紀から継続する集落には見られない。これらのことから、8世紀以前の大型住居に住むような各集落の有力層は没落し、かわりに新たな集団が勃興し、その集団の長が掘立柱建物に住むようになったと推測される。つまり、8世紀以前に大型の堅穴住居に住むような人物が9世紀以降になって掘立柱建物の居住するようになったわけではなく、両者には断絶があると考えるべきだろう⁽⁴⁾。また、同時期に居住用の掘立柱建物が複数の集落に出現しないことは、そこに住もう人物がこれらの集落を統括する首長だったことを示唆している。

9世紀以降に出現するB-1類の掘立柱建物の性格を以上のように解釈することができれば、各集落に見られる倉庫の性格は次のように考えられないだろうか。すなわち、9世紀以降の各集落で出現する倉庫は各集落ごとに管理されていたとはい、各集落の有力者は没落しているのだから、そこに収納される物資の消費は集落ごとに完結するのではなく、より上位の、具体的にいえば掘立柱建物に住もう人物に集約される性格のものだったと推測される⁽⁵⁾、と。

以上、盛岡周辺の掘立柱建物跡について簡単に検討した。それによれば、9世紀にはいって小さくない社会変動があったことが予想される。志波城・徳丹城といった城柵が設置された時期であることから、それとの関連は当然予想される。だが紙数の関係もあり十分に検討できなかった。詳細なデータの提示と共に別稿を期したい。

註

- (1) 平面形式が判明しない大新町遺跡R B8707・8708と林崎遺跡R B 001・003は除いた。
- (2) 近年、島の跡跡であるいわゆる軸間状遺構が県内各地で発見されており、それらのほとんどは平安時代のものとされている。このことから9世紀に入り店舗用とした作物の生産が盛んになったとも解釈することは可能である。しかし、発掘調査において軸間状遺構は「和田a テフラ」を介して認識される場合が多く、「和田a テフラ」が1次のあるいは2次的に兼ねる以前に確実した軸間は島として認識されないことも十分考えられる。したがって、今のところ本文のように考えておく。ただ、やはり農作が平安時代以降にさかんになることになっても、その場合、生産における住民の自的な転換と考えるよりは、城柵に象徴される律令国家の進出によって生産のあり方が変化したと考える方がより合理的であろうから、本文で示した論旨に変わりはない。
- (3) 本来ならばデータを提示すべきだろうが、集計が間に合わなかった。ただ、2005年度までに検出された野古A遺跡の堅穴住居の面積を時期別に集計したものをみると、本文で示したような傾向が読みとれる。このデータは本報告書と同時に刊行される『野古A遺跡第23・24・29次発掘調査報告書』(第501集)で提示されているので、そちらを参照していただきたい。
- (4) 坚穴住居の大きさが、即、居住者の階層差につながるかどうかは慎重でなければならない。というのも、台人郎遺跡R A61312、規模が9.5m×9.8~10.7m、面積が101.7m²と超大型に分類されるが、そこから出土する遺物は他の小型・中型の堅穴住居から出土するものと大差ない。このことは、堅穴住居の大きさはそこに起居する人数が反映されるとまずは考えられ、その居住者が首長だったかどうかは別の角度から検証されるべきことを示唆している。それに対し、掘立柱建物と堅穴住居とは明らかに階層差が認められる。したがって、超大型の堅穴住居と掘立柱建物とを対置することはできないと考える。
- (5) 胆沢城跡第52次調査S E 1050から次のような木簡が出土している(『胆沢城一昭和61年度発掘調査概報』水沢市教育委員会 1987年)

第一八分木簡

「和我連口○追泊白五斗」(051型式 185×25×4)

ここから、和我連某が五斗の白米を胆沢城に貢進していたことが判明する。通常、物資の貢進は国郡制を通じて行われるが、ここでは個人が貢納単位となっている。和我連某は、連姓を有していることからかなりの有力者と推測される。B-1類の掘立柱建物を住まいとするような首長は各集落で様々な物資を審査し、和我連某のように城柵に貢納していたのではなかろうか。

2 遺物

(1) 出土遺物の概要

今回の調査で出土した遺物の主体は、平安時代9世紀後半～10世紀初めに属すると思われる土師器（いわゆる赤焼き土器を含む）と須恵器である。出土量は、当センター収納用大コンテナ（容量40t）1箱強で、土師器は10.2kg、須恵器は9.5kgの出土をみた。土師器の器種は壺・甕・瓶、須恵器では壺・甕・壺・大甕などが見られる。当センターが実施した第3次調査では、口径が50cmを越える須恵器の大甕をはじめ、須恵器の出土量が際立つとの報告がなされているが、今回はそのような傾向は見られなかった。須恵器の時期は、概ね9世紀代でおさるとした第3次調査のものとはほぼ同じと考えている。

この他には、鉄斧・刀子などの鉄製品4点、銭貨（寛永通寶）4点、焼成粘土塊1点、石製品では砥石・石臼各1点、近・現代の陶磁器などが出土した。全体としては、遺物量もその種類も少ない印象である。

(2) 把手状突起が付く甕について

ここでは、数少ない出土遺物の中から、RZ016:土器埋設遺構で報告した特殊な器形の甕について取り上げる。

第36図に示したとおり、今回出土した把手状の突起が付く甕は、本遺跡の事例以外に岩手県内で2例、青森県内で5例見つけることができた。いずれも、通常の土師器甕の口縁部を下にして使用したものと思われ（第36図八戸市古宮遺跡・同田面木平（1）遺跡の例を除く）、他の甕と重ねる際の止めあるいは把手となる2個1対の突起を有している。この突起は、真横に伸びるものやわずかに上部を向くものなどがあり、取り付く位置もまた様々である。もちろんロクロ成形か否かの違いも大きい。この中で、5. 青森県平賀町高田I遺跡、6. 水沢市（現奥州市）佐野原遺跡、7. 盛岡市細谷地遺跡の3例には、実測図から判断して体部下端の内面に枝木を渡すための孔、あるいは渡した痕跡が残っているようである。本遺跡出土の甕にも、焼成前の孔1個とその痕跡4ないし5個が観察される。

これらの時期については、旧い方から7世紀代—古宮遺跡、7世紀中～8世紀前半—田面木平（1）遺跡、9世紀初め—ふくべ（3）遺跡、9～10世紀代—高田I遺跡・倉越（2）遺跡・佐野原遺跡、9世紀末～10世紀初め—細谷地遺跡・飯岡才川遺跡となる。出土する地域についても、今のところ岩手県内では北上川沿いの盛岡・水沢市（現奥州市）に限られるが、青森県では津軽地方・三八地方から出土しており、出土例は少ないものの広範囲に分布する遺物と判断できよう。また、時期



第36図 扱手状突起付の甕 (S=1/6)

的にもその形をわずかに変えながら、数世紀にわたって使われていたものであることがわかる。

このように、一見土師器の口縁としか思えない部分を底部にして使用する甌が存在するということは、これまで「土師器甌の口縁部」として報告されてきた遺物の中に、本来は「甌の底部」であったものが含まれている可能性は少なくないと思われる。甌の体部破片についても、内面に桟木を渡した痕跡がないかなど、今後注意して観察していく必要があろう。

註 この甌について、秋田県仙北市（現大仙市）にある上台A遺跡でも出土例が1例あることがわかった。堅穴住跡に伴うもので、時期は9世紀末～10世紀初頭と思われる。

引用・参考文献

- 青森県教育委員会 2005『通日本遺跡 ふくべ（3）遺跡 ふくべ（4）遺跡』青森県埋蔵文化財調査報告書第392集
 秋田県教育委員会 2000『上台A遺跡』秋田県文化財調査報告書第301集
 (財)岩手県文化振興事業団県蔵文化財センター（以下（財）岩文振埋文セと略す）
 1999『飯岡才川遺跡第3次発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団県蔵文化財調査報告書第310集
 (以下岩文振第○集と略す)
 (財)岩文振埋文センター 1999『佐野原遺跡発掘調査報告書』岩文振第327集
 (財)岩文振埋文センター 2001『訓谷地遺跡発掘調査報告書』岩文振第414集
 (財)岩文振埋文センター 2004『飯岡林崎II遺跡発掘調査報告書（第1・3次調査）』岩文振第427集
 (財)岩文振埋文センター 2004『飯岡沢田遺跡発掘調査報告書』岩文振第450集
 西野 修 1998『城構と地域社会の変容－北上盆地北部－』『第24回古代城構官衙遺跡検討会資料集』
 郡出比呂志 1998『平地住居・高床建物と堅穴式住居！先史日本の住居とその周辺』同成社
 八戸市教育委員会 1992『殿見溝跡発掘調査報告書Ⅰ』八戸市埋蔵文化財調査報告書第49集
 八戸市教育委員会 1993『殿見溝跡発掘調査報告書Ⅱ』八戸市埋蔵文化財調査報告書第57集
 八戸市教育委員会 1993『八戸市内遺跡発掘調査報告書6』八戸市埋蔵文化財調査報告書第60集
 半賀町教育委員会 1981『高田I遺跡』半賀町埋蔵文化財報告書第8集
 兵庫県埋蔵文化財調査会 1996『日本出土鉢瓶』1996版
 三沢市教育委員会 1995『平畑（3）遺跡』三沢市埋蔵文化財調査報告書第14集
 盛岡市教育委員会 1999『前野遺跡－浅岸地区区画整理事業関連遺跡発掘調査報告書Ⅰ－』
 山中敏史ほか 1998『豪族居宅と倉』『古代の穀食と村落・郷里の支配』奈良国立文化財研究所

写 真 図 版



遺跡北西部近景（南東から）



遺跡から望む岩手山



A区検出状況



A区全景（調査後）

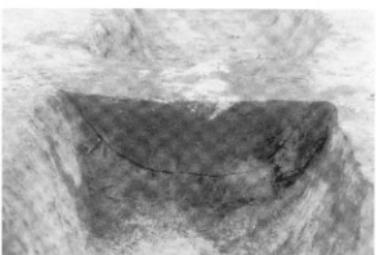
写真図版2 A区の状況



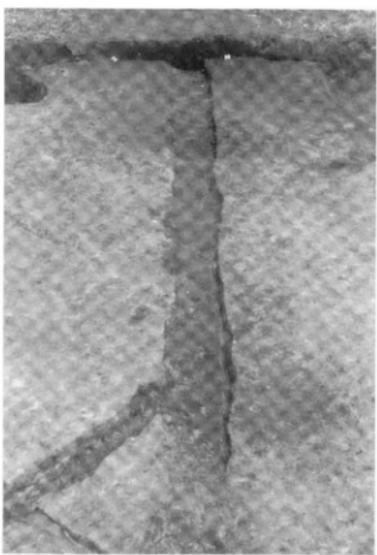
RG035 平面



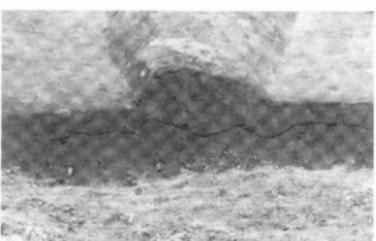
RG035 断面（1）



RG035 断面（2）



RG018 平面

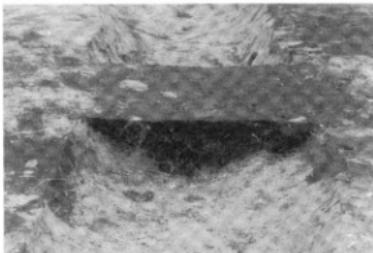


RG018 断面

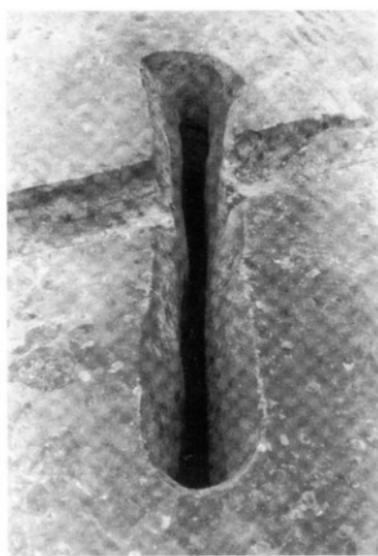
写真図版3 A区の遺構（1）



RG036 平面



RG036 断面



RD073 平面

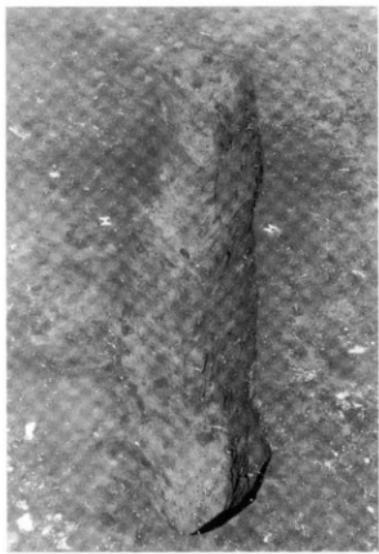


RD073 断面

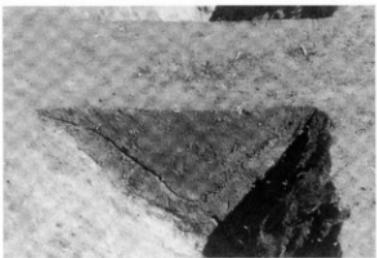
写真図版 4 A区の遺構（2）



B区全景



RD074 平面



RD074 断面

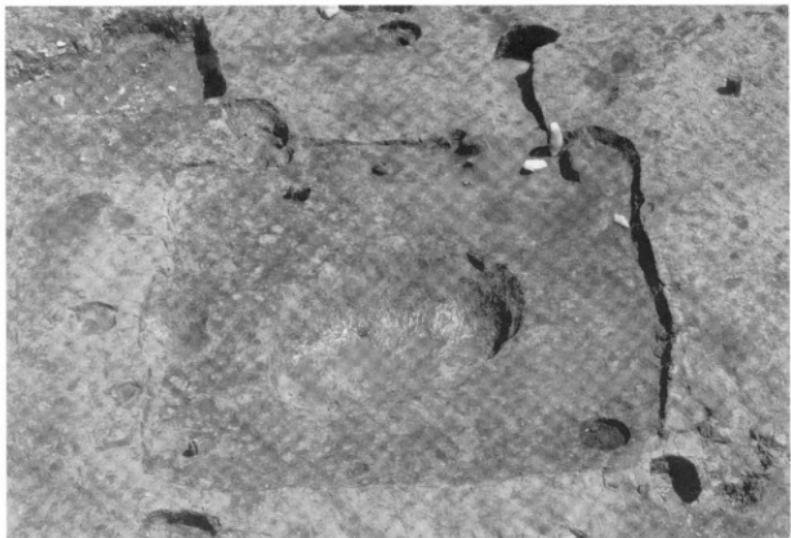


C区検出状況

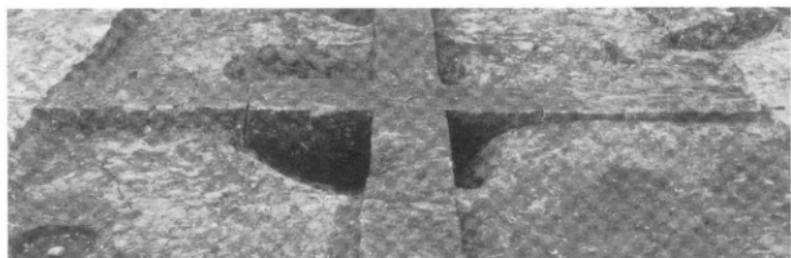


C区東側全景

写真図版 6 C区の状況



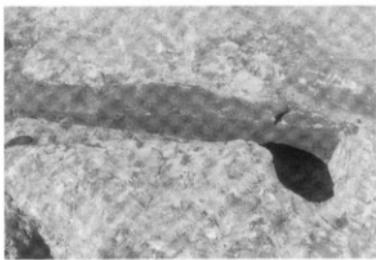
RA016 完掘



RA016 埋土



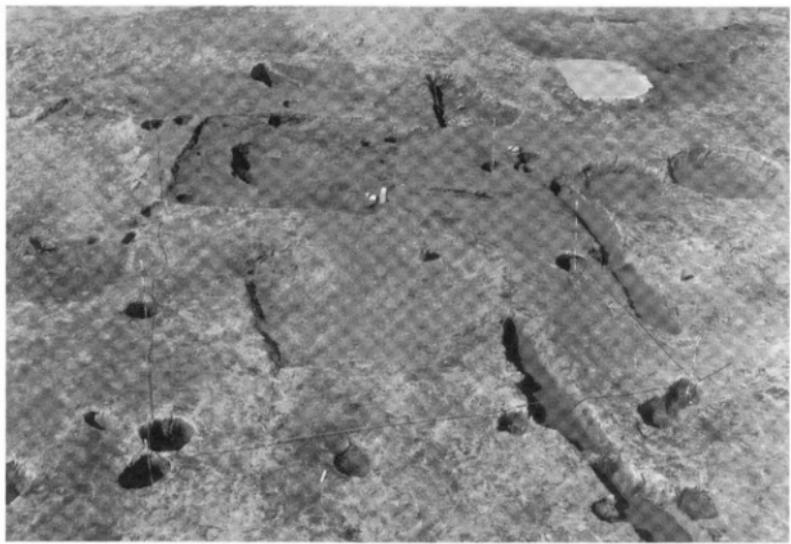
カマド燃焼部たち割り



煙道・煙出断面

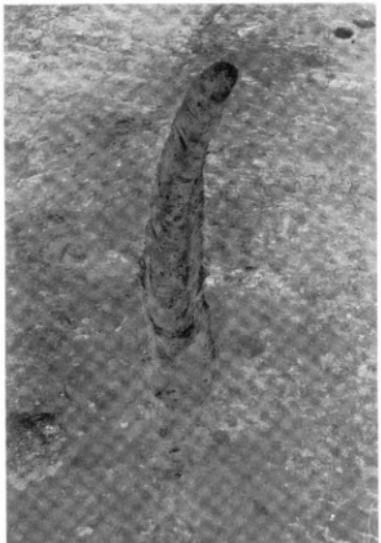


RB006 平面

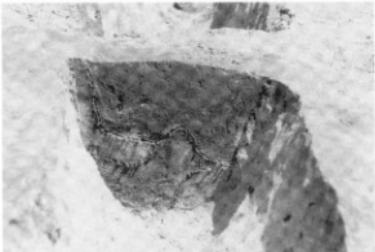


RB007 平面

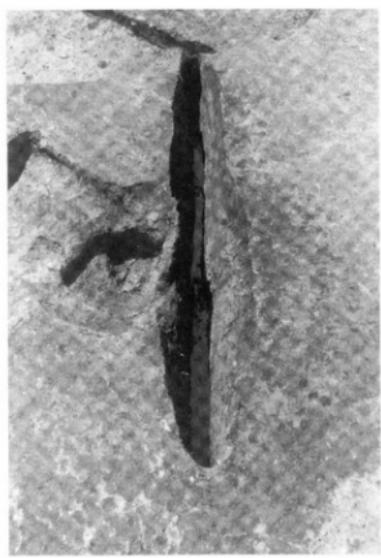
写真図版 8 C区の遺構（2）



RD075 平面



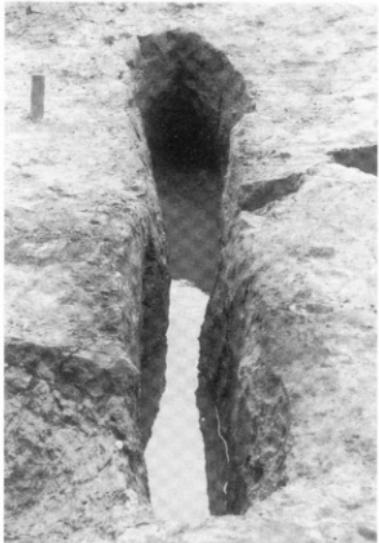
RD075 断面



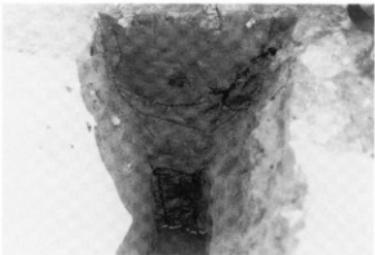
RD076 平面



RD076 断面



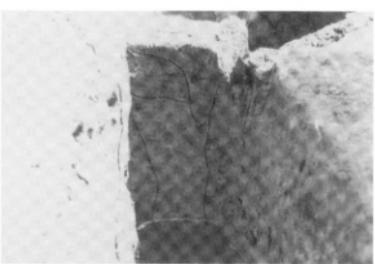
RD077 平面



RD077 断面



RD078 平面

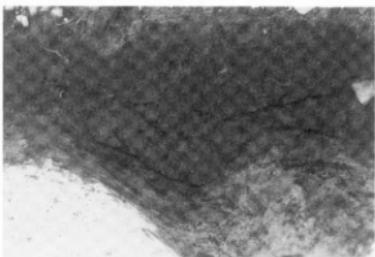


RD078 断面

写真図版10 C区の遺構（4）



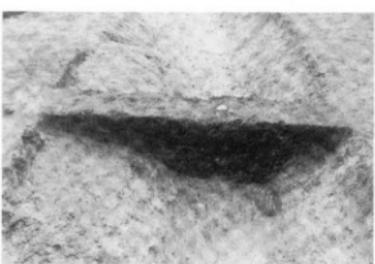
RG037 平面



RG037 断面



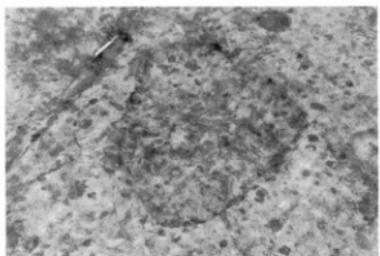
RG038 平面



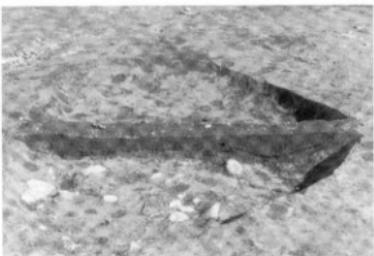
RG038 断面



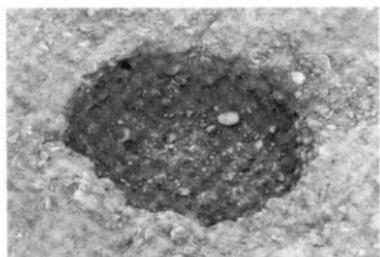
D区全景



RD079 平面



RD079 断面



RD080 平面

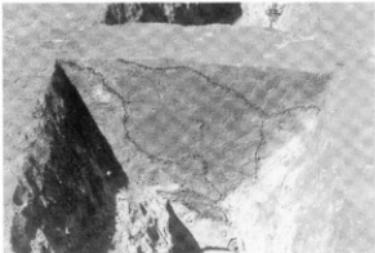


RD080 断面

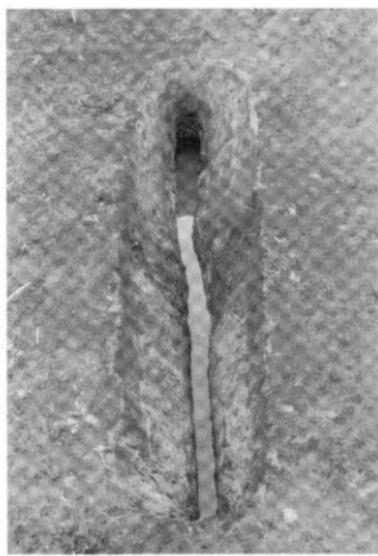
写真図版12 D区全景と遺構（1）



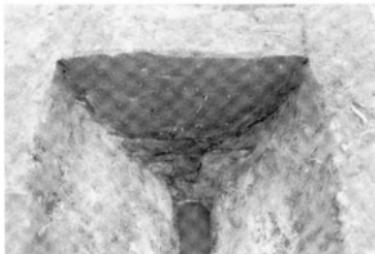
RD081 平面



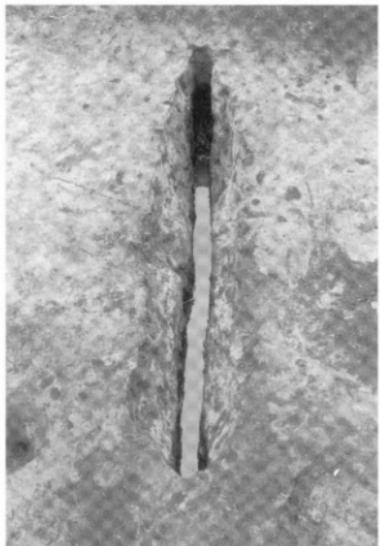
RD081 断面



RD082 平面



RD082 断面



RD083 平面

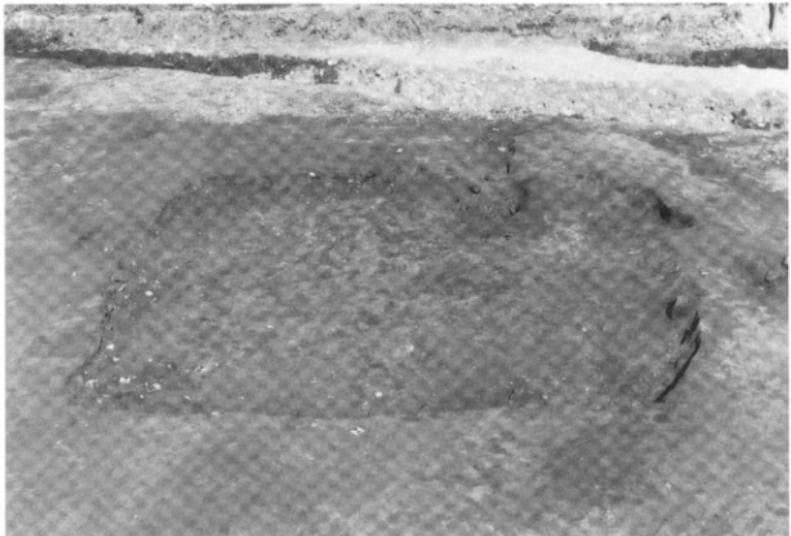


RD083 断面



E 区全景

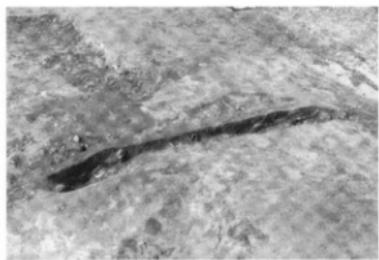
写真図版14 D区の遺構（3）・E区全景



RA017 完報



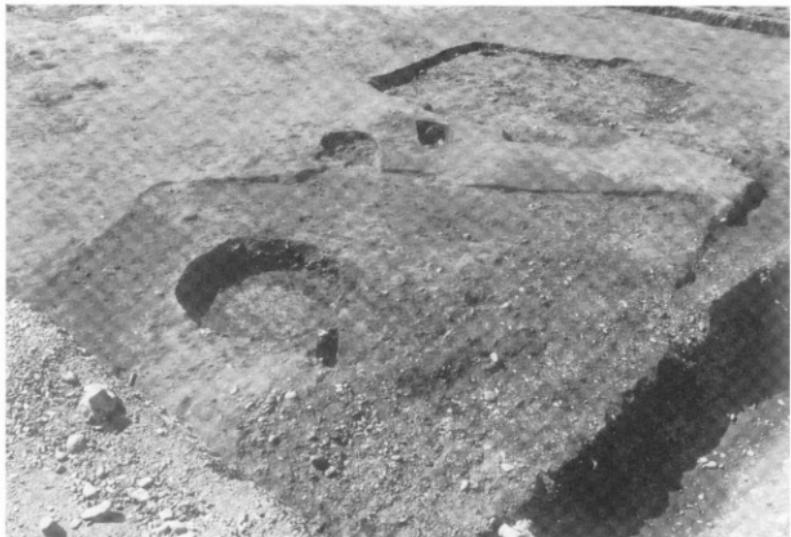
RA017 埋土



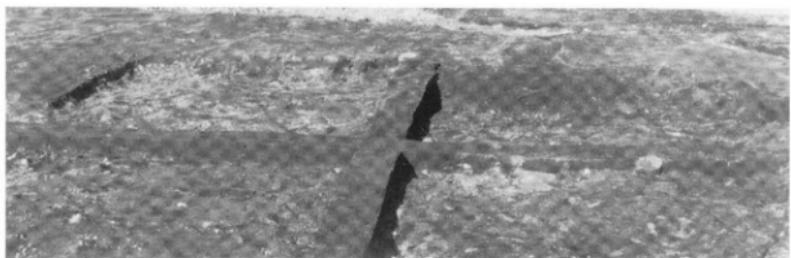
煙道・煙出 断面



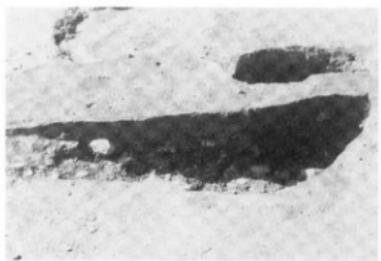
カマド燃焼部たち割り



RA018 完掘



RA018 埋土



煙道・煙出 断面

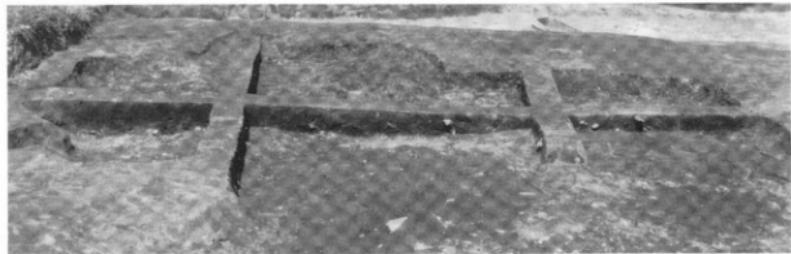


RB009との重複状況

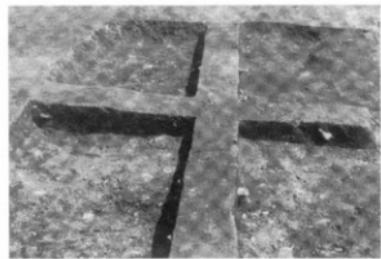
写真図版16 E区の遺構（2）



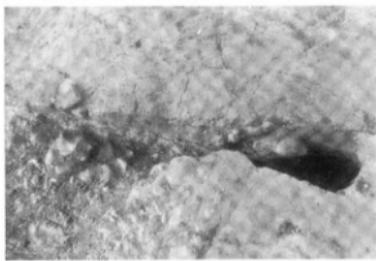
RA019 完掘



RA019とRE011の埋土（北から）



RA019 埋土（西から）



煙道・煙出 断面



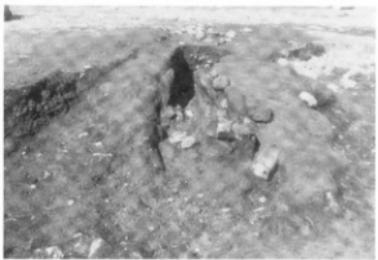
RA020 完掘



RA020とRE009の埋土

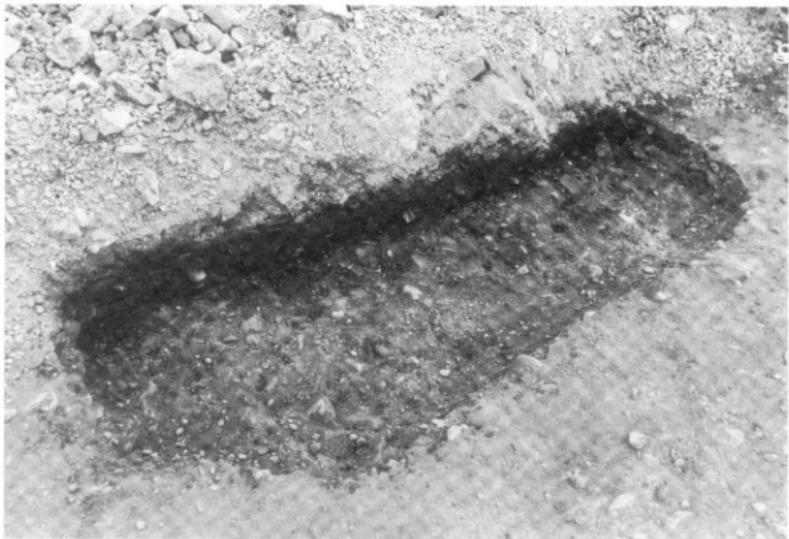


煙道・煙出 断面

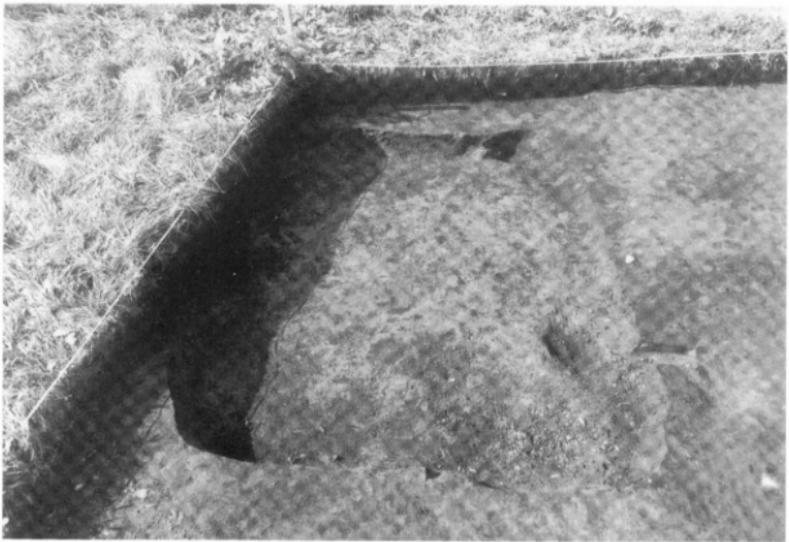


カマド全景

写真図版18 E区の遺構（4）

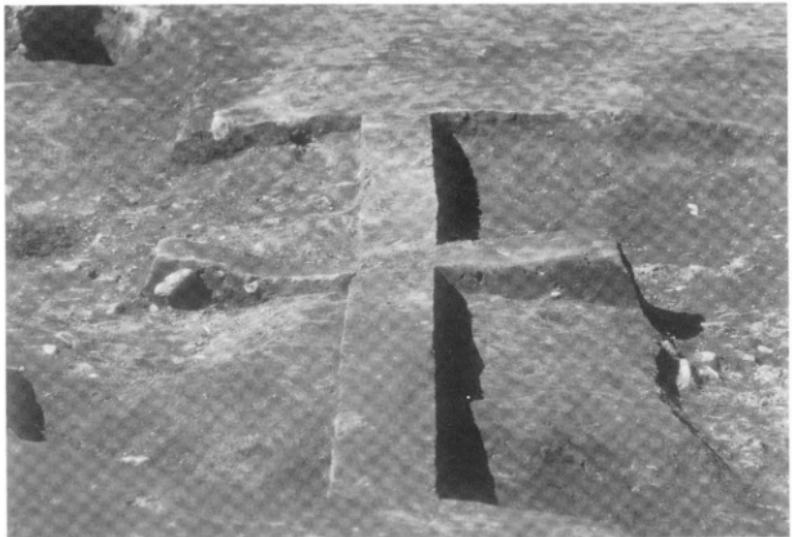


RE005 完掘

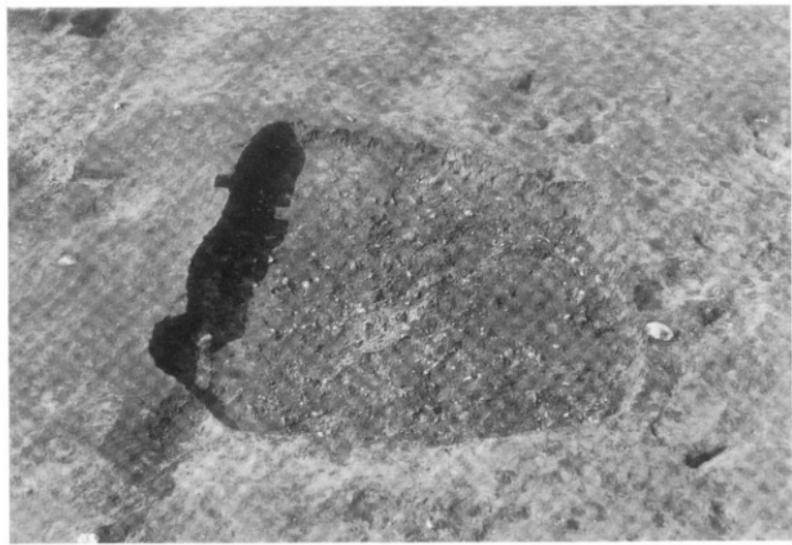


RE006 完掘

写真図版19 E区の遺構（5）



RE007 完撿

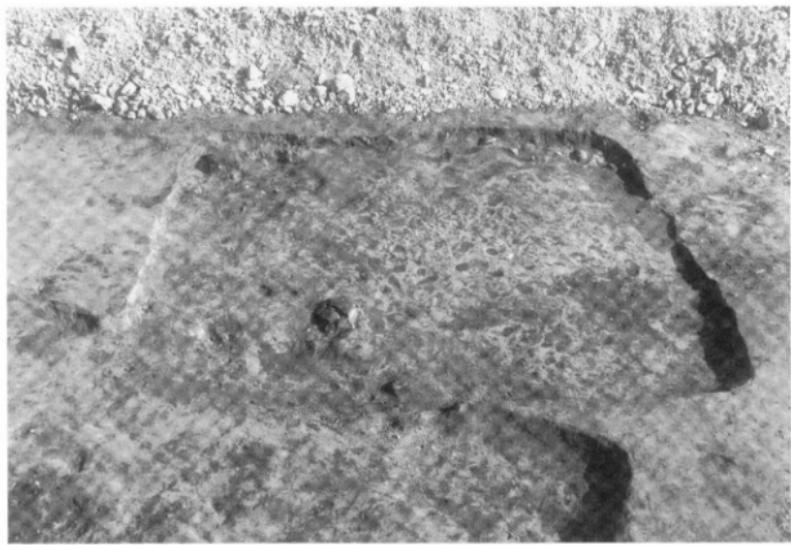


RE008 完撿

写真図版20 E区の遺構（6）

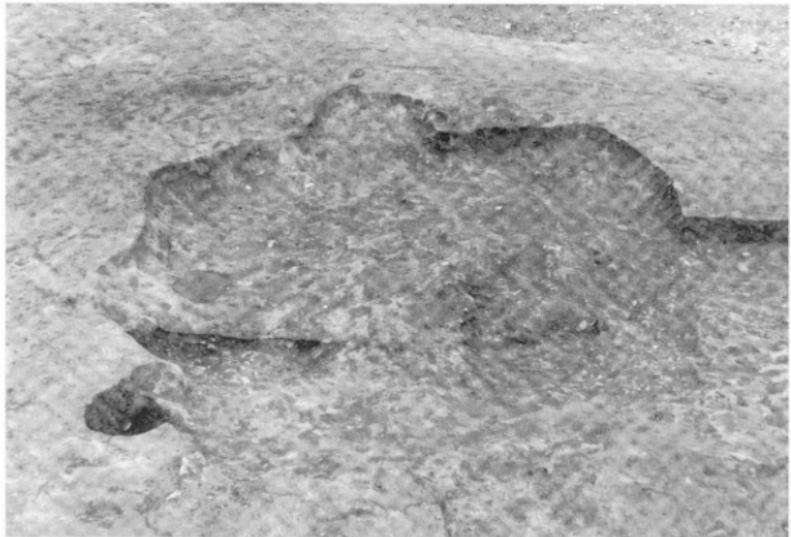


RE009 完整



RE010 完整

写真図版21 E区の遺構（7）

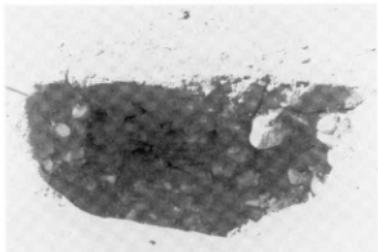


RE011 完掘



RB009 平面

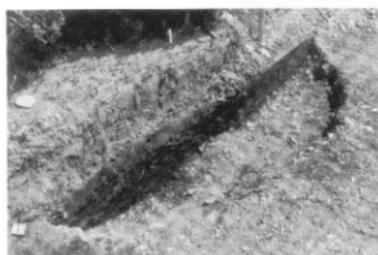
写真図版22 E区の遺構（8）



E区 PP7 断面



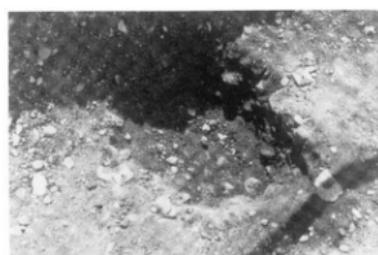
E区 PP10 断面



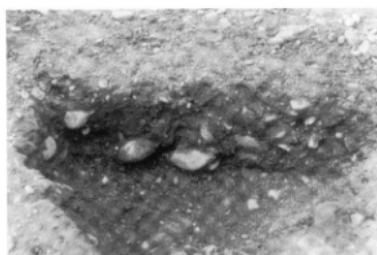
RD084 平面



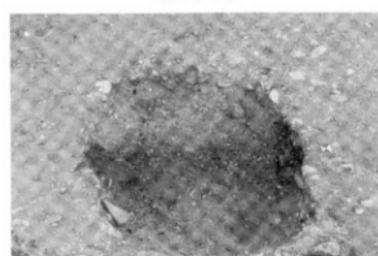
RD084 断面



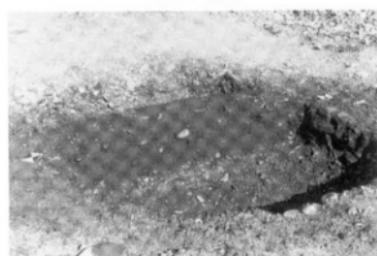
RD085 平面



RD085 断面

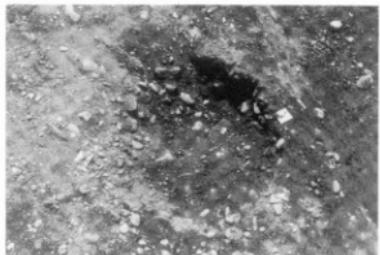


RD086 平面

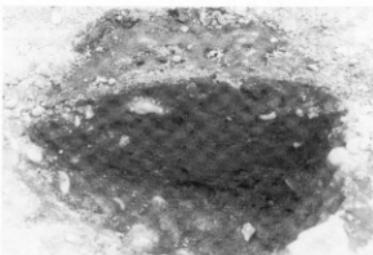


RD086 断面

写真図版23 E区の遺構（9）



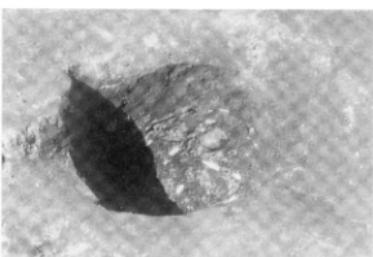
E区 PP1 平面



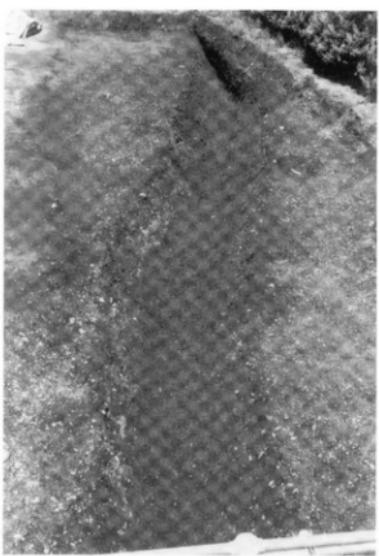
E区 PP1 断面



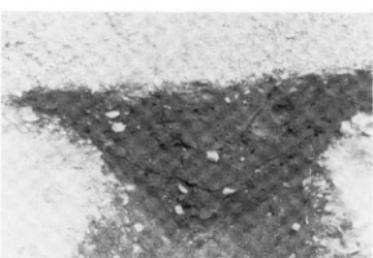
RZ016 土器出土状況



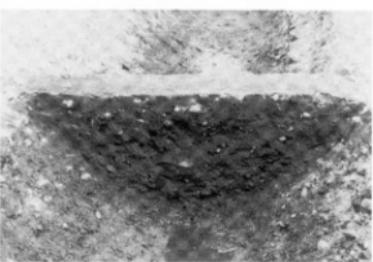
RZ016 実掘



RG039 平面

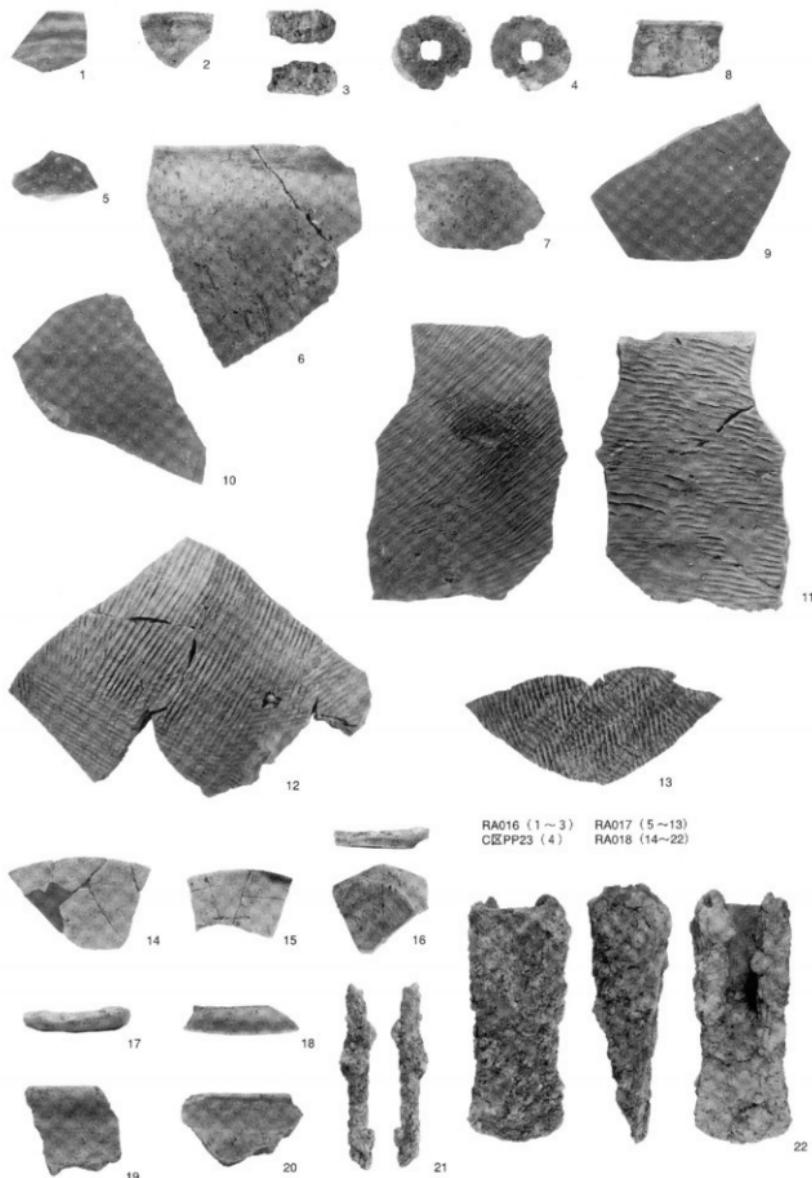


RG039 断面（1）

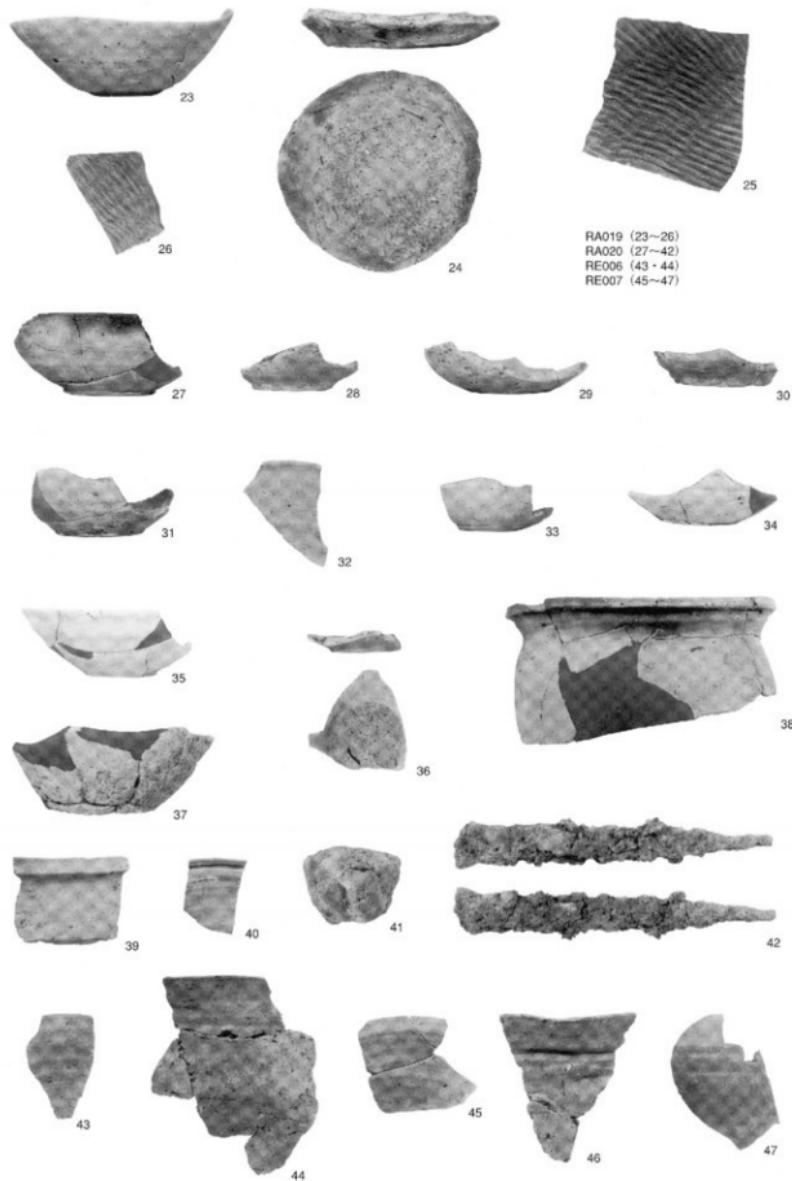


RG039 断面（2）

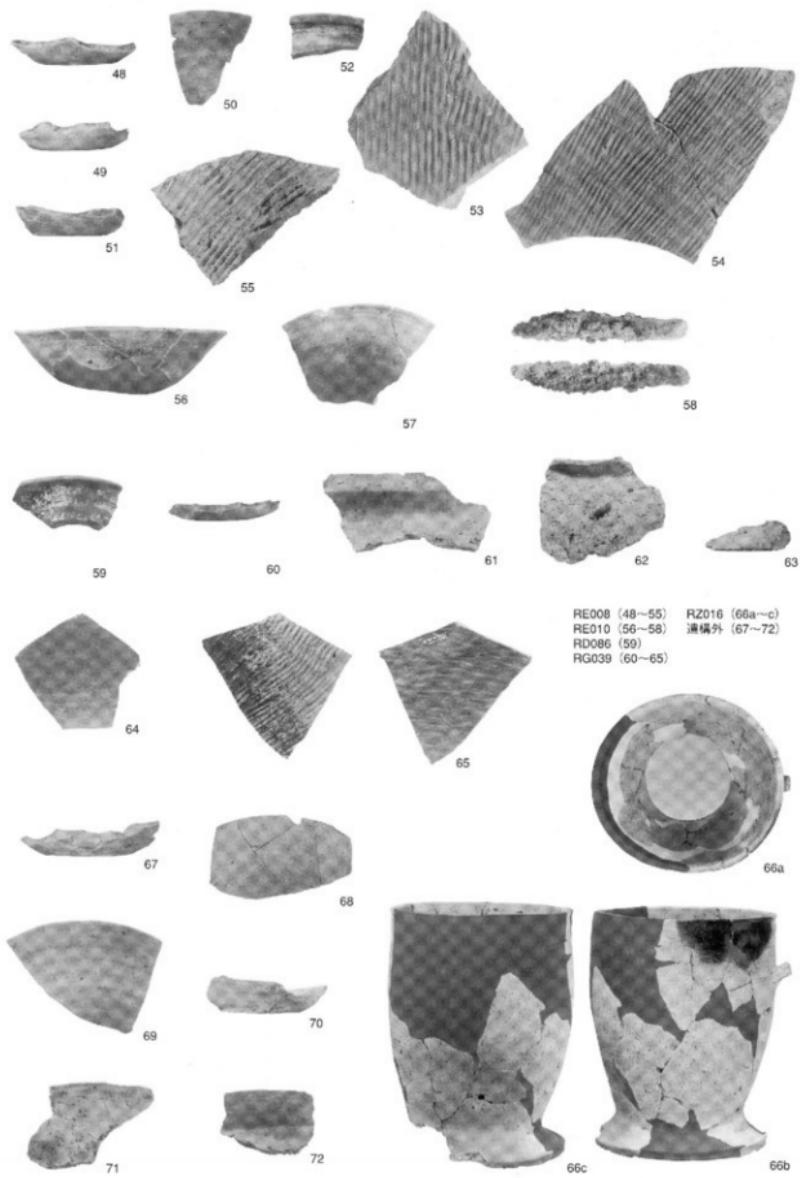
写真図版24 E区の遺構（10）



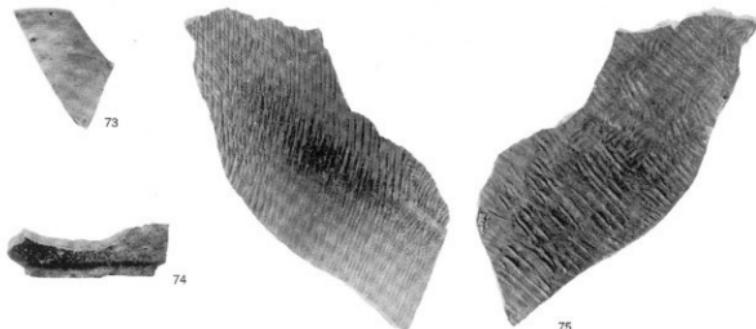
写真図版25 遺構内出土遺物（1）



写真図版26 遺構内出土遺物（2）



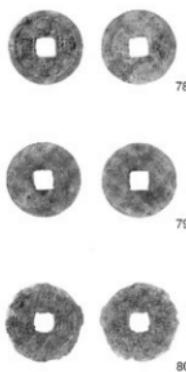
写真図版27 遺構内出土遺物（3）・遺構外出土遺物（1）



遺構外 (73~80)



写真図版28 遺構外出土遺物 (2)



報告書抄録

ふりがな	いいおかさいかわいせきだいはちくじはくつちょうさほうこくしょ							
書名	飯岡才川遺跡第8・9次発掘調査報告書							
副書名	盛岡南新都市地区開拓事業関連遺跡発掘調査							
卷次								
シリーズ名	岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書							
シリーズ番号	第494集							
編著者名	濱田宏・石崎高臣							
編集機関	(財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター							
所在地	〒020-0853 岩手県盛岡市下飯岡11-185 TEL 019-638-9001							
発行年月日	2006年2月28日							
ふりがな 所取遺跡名	ふりがな 所在地	コード	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因	
飯岡才川遺跡 第8・9次発掘調査	盛岡市飯岡新田 2地割46-3ほか (第8次) 盛岡市飯岡新田 2地割78-1ほか (第9次)	03201	LE16-2291	39度 40分 30秒	141度 08分 27秒	2005.0901～ 2005.0929 (第8次) 2005.0725～ 2005.0929 (第9次)	839m ² (第8次) 2,907m ² (第9次) 合計 3,746m ²	盛岡南新都 市開拓整備 事業関連遺 跡発掘調査
所取遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物	特記事項		
飯岡才川遺跡 第8・9次調査	集落跡	縄文 古代	階し穴状遺構 琴穴住居跡 住居状遺構 掘立柱建物跡 溝跡 上坑 土器埋設遺構	7基 5棟 7棟 3棟 6条 9基 1基	土師器・須恵器 陶磁器・鉄製品 石製品・錢貨			
要約	本遺跡は、平安時代9世紀前半から後半の集落遺跡である。かつて実施された第3次調査東側の調査区では、当該期の住居跡や掘立柱建物跡、溝跡などが確認された。							

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第494集
飯岡才川遺跡第8・9次調査発掘調査報告書

盛岡市新都市土地地区画整理事業関連遺跡発掘調査

印 刷 平成19年2月23日

発 行 平成19年2月28日

発 行 (財) 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター

〒020-0853 岩手県盛岡市下飯岡11-185

電 話 (019) 638-9001

FAX (019) 638-8563

印 刷 有限会社 博光出版

〒020-0122 岩手県盛岡市みたけ5丁目8番43号

電 話 (019) 641-0671

